
PLOT OF WIZARD

02

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P L O T O F W I Z A R D

【Nコード】

N 8 4 6 6 H

【作者名】

O 2

【あらすじ】

無鉄砲な少年剣士・ネオンが出会ったのは、『白い』青年だった――若年駆け出しパーティが贈る、剣と魔法ののんびりファンタジ

プロローグ(1)

パーク町の大衆酒場は、今日も賑わっていた。

洒落っ気もないが、下世話な笑い声がするでもない。この酒場自体町の中心に近く、大体の客が地元住民であるせいかもしれない。

昼間という時間帯もあって普通に家族連れや子連れもいるし、酒場と言うよりはファミリールレストランに近い雰囲気だ。

ただ、空間がカオス化してまとまりがなく、会話音同士が混じり合っって少し耳障りではあった。

店の入り口の少し奥まったところにカウンターが見え、マスターらしき壮年の男が先程オーダーを受けただろうビールを、鼻歌混じりにカップに注いでいた。

「――マスター、」

と、ホールの若い女性から声を掛けられ、そこで鼻歌が止む。

カウンターに腕を掛けて顔を覗き込む彼女に、マスターはちらと目を向ける。

「あっち」

彼女は既に視線を変え、立てた親指で用件を指し示していた。

親指に視線を導かれると、方向は入り口に行き着き、そこには10数名の団体が控えていた。

見ると、全員が頭からつま先までくすんだ茶系のフード付きウェアに身を包んでいた。目深に被ったフードのせいだ

顔もよく見えないといういでたちに、マスターはたじろぐ。
どう考えても町の住人ではないし、旅の者…といっても見るからに怪しい。

奥へ入れる気は起きないが――とにかく入り口をくぐって来た客人だ、と気分を多少入れ替え、マスターはいつもの声を掛けた。

「…いらっしやい。何か飲むかい？」

「…人を探している」

団体の一人がマスターに近付き、彼の営業文句を無視するかのよう
に話を切り出す。声質からして男のようだ。

「は？」

面食らうマスターに、男は物々しく、抑えるように続ける。

「聞かれた事だけに答えればよい。最近変わった旅の者を見なかったか？」

「変わったって…どう変わってるのかい？」

「身なりとか…とにかく容姿だ」

「わかりやしないよ。そんなもんいちいち覚えてない」

「では、この町全ての宿改めをしたい。代表に取り次げ」

「はぁ…!!?」

いよいよマスターはいぶかりだす。

男の高圧的な態度に圧され気味だったが、冷静に考えてみれば、自分はかなり見下されているようだった。

「宿改めなんて穏やかじゃないねえ：何しようとしてるのか知らないが、会いたいならそっちで好きにやっどくれ。変なことに巻き込まれるなんてごめんだよ」

ひとしきり言い切るとマスターは男から顔をそらし、グラスを拭き始めた。

男はそんな彼の態度に、怒りと焦りを混じらせて食い掛かる。

「聞け！！　それができぬからお主に頼んでいるのだから！！」

「しつこいねえ、大体探し者の特徴もわからないのに話すも何もないじゃないか！」

「くっ…！」

押し問答を互いに繰り返し、2人は睨み合った：否、男の方はフードの中から睨んでいるに違いなかった。

しばらく沈黙が続く。

「おやめなさい」

と、男の後ろからもう一人、団体の中から声を出す者がいた。

呼ばれた男は臨戦態勢から顔色を一変させ、勢いよく振り返る。

「しかしっ…」

「その者の言うことも、もったもです。我々は事を密にし過ぎました：もう時が迫っています、話して差し上げなさい」

「！！ はっ：」

男は声色を裏返し、マスターへ尻を向けて大きな図体を90度前に折る。その様子を見、マスターも男の後方へ視線をやる。

声の主は女のものであるようだ。よく見ると団体の中に、ウェアの色が他より明るい者が一人いて、周りはそれを取り囲むように並んでいた。背も周りより頭二つ分ほど低く、それで気付かなかったのだ。しかし、声は確かにそこから聞こえている。

品のある透き通った声で、マスターはその口振りからも、位のある女性像を感じた。

男は再び表情を張り詰めさせ、神妙な面持ちでマスターの方に振り返った。

「：これから話すこと、他言は無用だ。よいか？」

許しを得てもまだ警戒しているのか、男はやはり押し殺した声で、警戒心を含めながら話し出した。

マスターは先程の女性とこの男との意味深げな会話からただならぬ気を感じ取り、男の話に耳を貸す気になった：

プロローグ（１）（後書き）

2011／11 一部改変

プロローグ(2)

カウンターを背にしたこぢんまりとしたバーテーブルに、一人の男が腰掛けた。

ワインレッドの、そのぼつさり長い前髪の間からのぞく灰色の瞳：クロム・シャーレットは、片手に先ほど

ホールスタッフから渡された店のチラシを、もう片方の手にやはり先程注いでもらった酒の入った小さなグラスを持っていた。

このざわついた店内では、彼の存在は空気に等しい。彼はそんな了見を逆手に取り、誰にも干渉されない空間を作りあげて

いるように見えた。しばらくその雰囲気酔って静かに目を閉じ、グラスを口に運ぶ。透明で、さらっとした液体質が、喉の奥を熱くした。

遠くを見るように、細く薄目を開ける。

：バーク：この土地を訪れたのも、これで三度目になる。

——：この町に立ち寄ることも、恐らくこの先無いな：——

そんなことを頭に浮かべながら、グラスの中に揺れる酒を眺めていた。

——と、にわかに横から騒がしい雰囲気がい込んで来た。

「——よっ、クロム！」

「…リン…!」

ゆったりとしたウェーブをきかせた髪を軽やかにかきあげながら、リン・ライムは彼を見て悪戯気に笑った。

明るいパープルの髪と、オレンジ系の健康的な肌色からつくられる彼女の容姿は、どれをとっても淡い、クロムの持つそれとは対照に見える。実際の二人の関係も同じようなものだが…

リンはクロムの思うところなどおかまいなしに、声を掛けるなりドカッと彼の隣に陣取った。それぐらいならまだ許容範囲であったが、何故か必要以上に距離を縮めてくる。幾分か心ここにあらざであったクロムは、先程までの鉄面皮に若干焦りの色を交え、逆に彼女を避けるように身を引いた。

「な、何だ…」

リンは人指し指を立て、注意を促す。

「…いいから!　かくまって」

すると、リンの背後から更に数人の男がこちらへ近付いてくるのがわかった。

どれも見知らぬ者であったが——クロムには目に見えて察しがついてくる。

『かくまって』——その怪しげなニュアンスを含めたリンの言葉を思い出し、クロムは小さく溜め息をついた。

――またか。

「――リンさ〜ん…あれっ？」

いかにもナンパを思わせるような声がし、すぐに声色が変わる。早々にクロムの存在に気付いたようだ。

「え〜っ、そいつ何い？」

「マジでえ？　おいおい」

男共は総勢四人。

リンはクロムに寄り添いながらも愛想笑いを返していたが、クロムは無視と決め込んだ。リンの注意にもかかわらず、頬杖をついて余所を向く。

そんな彼の態度に、男共の矛先が向かないわけがない。初めはリンに絡んでいたが、たちまちクロムの席を囲った。

「おいてめえ、俺らんことなめてんか？」

「聞こえてんだろがああ？　顔くらい向け！！」

ガンッ

一人がバーテーブルを手ひどく蹴り上げ、リンが「キャッ」と小さく悲鳴をあげる。

よほどしつこい目に遭ったのだろうか、普段通りを装いながらも、不安気な心持ちが表情に表れているようだった。

リンの手がクロムの腕に触れ、彼女の無言のプレッシャーが掛かる。

(…クロムっ、頼むわよ!)

まったくもって、気乗りしない。

再び、今度は深い溜息をつきながら…ようやくクロムは杖を解き、顔を向けた。

途端、半ばキレかかっていた男共の顔が一瞬凍りつく。

「……………」

「こっ、こいつっ…」

更に彼の全身を見届け、たじろいだ。

「チッ…剣士かよっ!!」

クロムはこの時、主な防具やロングブレードは宿に置いて来たにしろ、バトルスーツに身を包み、グローブもはめたままだったのだ。どう見ても地元民衆のいでたちで、たいした肩書きもないだろう男共の敵う相手ではないことを象徴していた。

もつとも、先程から見受けられた彼の態度からしても、男達とやり合う気なんて毛頭無いだろうが。

「ちつくしょっ…おい赤毛、覚えてやがれ!!」

「おう! いつか落とし前つけてやる!!」

そう、既に死語な捨てゼリフを吐きながら、男共は半ば逃げるよう

に立ち去っていった。

おおよそ、クロムの剣士姿に加え――単純に彼の容姿が、自分達の敗北を決定付けたのであろう。しかし、本人には

そんな自覚は無いに等しいようで、去っていく男共の後ろ姿を呆れ顔で見送りながら、左頬の赤黒く残る切り傷に触れる。

…やはり、街の者にはあまり良い気分はしないだろうな…

男共が完全に姿を消したことを確認すると、ようやくリンの緊張がほぐれた。

早々にクロムから離れ、リラックスした表情で一息つく。

「…あゝ、よかった！ あいつら意外にしつつこくてさゝあ。そんなに女に飢えてるのかしらねえ？」

悪びれる風も見せず、逆にバーテーブルに身体を突っ伏し、ニカッと笑顔を作りながらクロムの方を見上げた。

幾度と無くこんなパターンを繰り返してきていたし、何となく察しはついていたので、やっぱりか…と内心で呆れつつ、クロムはリンへ憮然とした表情を向ける。

「…リン…お前、俺を何だと思っている？」

「悪かったって！ 利用させていただきましたゝ」

「……」

クロムはまた、長い息を吐き出した。

「あまり気を許すな、危険な目に遭っても今みたいに上手く免れられんことだってある」

「わあかってますよ、我らがリーダー、クロム・シャーレット様！」

しかしこの時にはもはや、リンはクロムの注意の半分も聞く耳を持っていなかった。

彼のもっともなコメントには生返事を返しただけに終わり、次の瞬間には既に、自分の酒のオーダーを取り始める。

彼女の自分に対する『聞く耳もたず』は毎度のことなので、クロムにも自然と諦めがつく。

テーブルにできたコップの水跡を指でいじっているリンに、別の質問を掛ける。

「…ネオンとテルルは？」

町に着いてから宿をいち早く後にしたクロムは、残ったパーティーメンバーの行動を把握していなかった。

「ああ、テルルは宿の手伝いしてるわ。ネオンは、町の北の森を散策しに行ってる」

特にクロムの方を向くでもなく、リンは答えた。
クロムの顔色が変わる。

「北の森…：一人で行ったのか？」

「そーよ」

「……」

思案と後悔の入り混じったような顔をしながら、クロムは額に手を当てる。目に見えてネオンを心配しているのだ。

そんな彼に、今度はリンの方が大袈裟に溜息をついて見せる。

「ま、ネオンもあんたと行きたかったらしいけど。気にすることないわよお、あのコだって、“一応” 剣士なのよお？」

ネオンの信頼性をくむリンであったが、自分と同年のネオンを『あのコ』だなんて、まるで年下扱いだ。
しかし、元来アネゴ肌の彼女がそんなこと気にするはずがない。

「それに、あんたが問題ないって言ったんじゃない」

「確かに…この町には「奴ら」の気配は感じられないが…」

「じゃあ平気よ。あんたさあ、心配し過ぎるとそのうちハゲるわよお？」

「……」

自身の頭頂部を指でトントンと指しつつ、リンはわざとらしくにやけながらクロムへ視線を送る。

クロムはそんな彼女へ向けて細い目を見開き、顔を凍らせた。

「——おまちどお。」

とそこへ、リンの前に彼女が先程オーダーしたカクテルのグラスが

置かれ、そこで二人の会話は一旦中断した。

いまだ複雑な顔で思案にふけるクロムを尻目に、リンは大好きなモスコミュールを美味しそうに口に含んだ。

「うーん、格別。あんたは？ 何飲んでんの？」

と、突き放した途端、またしてもリンはクロムに絡む。彼女は先程から、クロムの横にあるグラスが気になっていたらしいのだ。頬杖について手持ち無沙汰なクロムの肩につかまりながら、彼のグラスをわしっとつかみ寄せた。クロムの顔が少し赤らむ。

「なっ、おい…」

「ちょっと頂戴」

「！ それは…」

クロムの制止を押し切って、リンは豪快にグラスを傾けた。途端

「…うわあっ、なあにこれ！！ ウォッカ…のストレートですってえ！？」

口にした酒をふき出す勢いでリンは渋面を作り、むせ返りながら口の中を必死に煽ぐ。

そんな彼女を、クロムは軽い表情で見据えていた。

「お前には強過ぎるだろうな。…人のものに不用意に手を出すな」

「喉があゝ…もおっ、そんな罰ゲームみたいなのを涼しい顔で飲んでんじゃないわよっ!!」

冷静に助言をするクロムに、すっかり機嫌を悪くしたリンは怒りを向ける。無論、クロムには怒られる理由はない。

「あんたに関わっていると、ろくなことないわ。出る！」

「何故俺のせいになるんだ…」

酒のせいか怒りで頭に血が上ったせいか…リンは顔を真っ赤にしながらその場を不遠慮に立ち上がり、ふらつく足取りで入り口へ向かう。

“俺を使ったくせに”という言葉を飲み込んで、クロムはそんな彼女の後を付いて行く。

「何よっ！ 一人で飲んでればいいでしょーっ？」

「どこへ行く気だ」

「ネオン探しに行くの！」

「止めておけ、今のお前では追えんぞ」

「うーるさいっ、ほっというてよーっ!!」

プロローグ(2) (後書き)

2011/11 一部改変

1日目：北の森

ガサガサッ

クロムとリンの騒動より、幾分かさかのぼる時分になる。

パークの北の外れ、冴えない緑を生い茂らせる森。

歴史が古いことを物語るように、樹皮のただれた大輪が数多くそびえ立っているものの：地質が良くないのだろう、

まばらに生えた葉を通り抜けて中に陽が良く差し込んで来る。豊かさや瑞々しさは感じられないものの、光の漏れ入る

隙間のないくらいこんもりと緑々しいよりは、かえって悪くない雰囲気であつた。

それでも、その果てしないだっ広さゆえか、好んで中へ踏み入る者は少なく、土地の人には『忘れられた森』という

名を頂戴し、ありもしない怪話も飛び交う未開の森であつた。

そんないわく付きのエリアを、さっきから一人の少年がうろついていた。

言わずもがな、ネオン・エドラーである。

彼の、若芽のようにつややかな緑髪が、冴えない緑の彩る森の中をうごめき、同系のカーキ色のトラベルウェアに

身を包んだ風体は、全く森と同化していた。

ネオンは何かを探し回るように、無作為に散策していた。自分の動きと合わせ合わさず、これまた澄みきった

グリーンの瞳がくるくるとよく動いている。

また時折上を見上げ、木々の間から透ける、ほぼ真天井に上がった陽の位置を確認する。

「…大丈夫。まだ戻れる！」

…さりと危なげなコメントを口にしながら。

ネオンの森散策に当てはなかった。

先刻13時頃この町に着き、宿をチャーターし、適当にお腹を膨らませてしまうと夕方まで特にすることが無くなった。

誰ぞと話をしようにも、クロムは早々に宿を出て行ってしまうし、テルルは生活費稼ぎのために宿の手伝いをする

言い始める。リンに付き合おうにも…行き先が酒場であろう彼女に、あまり酒が得意ではない身で付いて行くのは

気が引けた。

仕方なく、暇つぶしにこの森へ来てみた、という訳である。

クロムの言う所によれば、現在のパークには危惧すべき「彼ら」の気配は無いそうで、一人で行動しても多分平気だろう。

彼自身、このことがいい機会だと感じていた。

…来てみたら来てみたで、この薄寂れた森の中にも案外おもしろい発見はあるものだ。見たことのない植物や新鮮な

景色がネオンの興味を引き、彼をどんどん森の奥へ導いていった。

「——っう…！」

——するとにわかに、ネオンの鋭い嗅覚が、草の匂いでも土の匂いでもない異様な『臭い』を嗅ぎ取った。

思わず顔をしかめる。

血の混じったような、生き物の臭い。

そして、人並み以上によく聞こえる敏感な耳で、何かが吠える声も

聞き取った。

…犬…？

一匹ではないようだ。複数で、けたたましく鳴いている。しかも、そんなに遠くない。

ネオンの胸が高鳴る。

——少なくともこの先で、何か『異変』が起きている——

そう感じ取った。

…次の瞬間、ネオンはその方向へ走り出していた。

少しの躊躇もなかった。不安に思うより、何が起きているのかの確証を得たい気持ちが勝っていた。

履き慣れた茶色のスウェード靴が、軽快に地面を蹴る。腰に無造作に巻きつけられた赤いストールが、風の様に走る彼に合わせて、しなやかになびく。

先程感じ取った気配は1ヶ所に留まっているようで、順調に近づいているらしかった。

やがて、あと少し、という所で足を止める。

適度に上がる息がおさまるのを待つ傍ら、背中に下がるミドルソードを確認した。呼吸を整え、大木の陰から慎重に顔を覗かせ、行くべき先をうかがう。

瞬時、ネオンは身体のまわりに寒気を感じ、思わず自分の両腕で肩を抱いた。

その先にある土地だけが薄暗く、湿気を帯びた異様な雰囲気をも

し出していたのである。

…ネオンの視線の先には、鳴き声の主であろう野犬が確かにいた。総勢は5、6匹というところで、何かに向かって唸り、牙をむき出し、毛を逆立てている。

…一体、何が起きているんだろう？

と、ネオンはそれらが顔を向ける先へと視線を動かしていく。

「!!」

そこには、また数多の野犬がうごめいていた。体躯が黒いせいか、剥き出しになった顎から覗く鋭い牙が異様に白く光っている。

黒い者共はその牙と鉤爪を使い、何かを囲っていたぶっているようだった。

ネオンは目を凝らす。

…人だ!! 血混じりの臭いは確かにそこからしている――

「~~~~!!」

ネオンは何事か叫びながら猛接近していった。

背にあったソードを鞘ごと繰り出し、振り回しつつ足で野犬をなぎ払う。

野犬共は突然の横入りに一瞬ひるんだが、たちまち交戦の構えを取り、場を蹴散らすネオンに牙を向けた。

ネオンはソードを駆使し、彼らからの直接の攻撃を防ぐ。

ふとネオンがちらと、うずくまるその人物に注視すると、ネオンが

現れてもまだしつこく牙に襲われ、既にその全身はその者のものであるう血で染まっていた。顔を埋め、両の腕で喉を必死に庇っている。
ネオンは唇を噛んだ。

「…うわぁっ…!!」

とその瞬間、よそ見をしていたネオンの隙を突いて、野犬がネオンの左足に噛みついた。痛みと野犬の勢いので、あっさり地面に倒れこむ。

野犬はそれを期に、一気に彼を襲う。が、

「あ・あ・あああ———!!!!」

直後、ネオンは森の外まで響くくらいの、大声を発した。

襲いかけていた野犬は驚愕し、そのままちりぢりに離散していった…

「……」

と同時に、周囲に立ち込めていたよどんだ空気も消え、辺りと変わらない明るさを取り戻していた…

……。

野犬は戻って来なかった。

安全を確認すると、ネオンは長く息を吐き出しながらその場に寝転がった。そのまま頭の中が徐々に白くなるようであったが…ふと視線を横に向けると、途端にパッと起き上がる。

「おいっ…大丈夫か!？」

木の根元でうずくまる、その人物に駆け寄った。きつく押し当てられたまま固まってしまっている腕を首からはがし、

丸まった体を背後の木に預けさせる。力無くうつむいた顔を恐る恐る覗くと、苦しみに歪ませたまま気絶している

ようで、ネオンがその顔をピタピタと叩いても、気付く様子は全く無い。噛まれ、裂かれた体中から出血が続く、

地面に嫌な染みを作り始めていた。

恐らく、非常に危険な状態である。

先ほどの野犬との一戦と、目の前に映る惨状とで、ネオンの鼓動はドクドクと大きく脈打っていた。

ネオンはパニックを起こしそうになっている自我を抑え、落ち着きを取り戻そうとする。

人物から数歩離れて目を閉じ、大きく静かに息を吐き出し、冷静に考える状態を整えた。

「――…」

…水と薬草。きつくと応急処置…とりあえずそれくらいしかこの場では出来ない。

ネオンは素早く立ち上がり、口の中で目的を反芻しながら、その場を走り去った。

ネオンにしては上出来の判断だった。

数分後、ネオンは先ほどまで散策していたついでに摘んだ草を入れていた皮袋に水を、手には彼が厳選してきた傷に効く薬草を握り締め、一目散に戻ってきた。

目的の人物は、さっきと変わらずにいた。ネオンは気が付いていないかと、下から顔を覗き込む。

そして初めて直視し…驚きに目を見開かせた。

「…うわ、きれー…」

体格からして先程から察しがついていたが、男だった。

目を閉じ、うつむき加減で正確には見当つかないが、ネオンらパーティーメンバーとほぼ同年らしい容姿だった。

この世界にしては珍しい、細縁楕円形の眼鏡をかけていることにも目を引かれたが、中でも彼の髪色が、ネオンの視線を奪った。

…真っ白だあ…！

木漏れ日の光を反射して輝く髪色は、単なる白髪と形容してしまっ
ては勿体無いくらい繊細だった。もっとも、

今はそれが赤黒くこびりついた血と土の汚れで、幾分鈍くなっ
ていた。よく見ると、閉じた瞳に被さる睫毛も白い。

ネオンは布の切れ端に水を含ませ、男の口元に持っていき、静かに絞った。少量の水が口の中へ流し込まれる。

「…んっ…」

すると、男は気がつき、軽く咳き込んだ。ネオンはほっと安堵の表情を見せる。そのまま彼の顔についた汚れを落とし始めた。

男は薄目を開け、うめくように小さく声をあげた。

「…君…は…」

「いいから！　じっとしてなよ」

やや身じろぐ彼を制しながら、ネオンは外傷を調べる。

腕や足、横腹にまでおびただしい数の噛み傷の痕が広がり――それから一つ一つが結構な深手で、それなりの

時間が経っているにもかかわらず止血に至っていなかった。

ネオンは困惑した顔をする。

持ってきた薬草だけじゃ、足りないかなあ？

とりあえず、ある量でだけでも処置をしようと、薬草を一束、手の中でもみ始める。すると、それを見た男がネオンの視界に入るように手を挙げて揺らした。

「…いいよ、薬草は…」

「何言ってるんだよ、あんた、血だらけじゃんか」

「…放っておけば…すぐ治るから…」

「放っておけねーっての！」

勢い良く首を横に振って、ネオンは男を言い聞かせようとする。
ところが、また男はこう続けた。

「…いや、本当にいいから… …それに…、違うんだ…」

今の彼の一言で、やや強引気味に続けようとしていたネオンの動きが、ピタッと止まる。

「…え？」

「それ…眠気覚まし…」

「…え、えっ！！？ ウソ！！！」

ネオンは酔狂な声をあげ、懐から使い古された小さな図鑑を取り出し、たどたどしい所作で手にする薬草と今一度照らし合わせる。

…ホントだ…

「…ごめん、間違えちゃった…」

先程の強引さとはうって変わり、済まなそうにうつむいてしまった。
そんな表情がコロコロ変わるネオンに、男は苦しそうな表情から軽く笑顔を見せた。

「謝ることはないよ…」

「：いや、今度は間違い無く怪我に効く薬草採ってくるから!!」

「え、だからいいって…」

男は再び断ったが、このことがネオンの意地に火を点けてしまったらしい。

また一層の強い決心を固め、

「じっとしてろな! 動いちゃ駄目だぞ!!」

と言い残し、走り行ってしまった。

ところがである。

今度こそ本当に傷に効く薬草を手に、ネオンが息を切らして戻ってくると、

「――あれっ!？」

はたして男はそこにいた。

が男は、うずくまったまま顔をあげることさえ出来なかったさつきまでのが一変して、ネオンに笑顔で手を上げていた。

啞然としているネオンが近付くや否や、男はヒラッと立ち上がり、彼を迎えた。

まるで体中にあるだろう鋭い痛みを時に忘れてしまったかのように。全身はまだ赤黒く汚れたままであったが、恐らく衣服にこびりつい

ているものにすぎないのだろう。

「…あんた…もう平気なのか？」

ネオンは驚きに不可解さを交えながら、問う。

「ああ。ありがとう、さっきはお礼も言える状態じゃなくなつて…」

男はそれにも普通に、さらっと答えた。そして、ネオンのなりを見て逆に問う。

「…それ…もしかして、さっきの奴らに…？」

男に指摘され、ネオンは自分の足許を見る。

「ん…げっ!？」

この男に夢中になっていて、ネオン自身も先程の野犬に左足を噛まれていたことをすっかり忘れていた。

ネオンの左足はくるぶしを境にそこから下が、血で服や靴をどす黒く色を変え、見るも痛々しいことになっていた。

「…つてえ…!!！」

見て思い出した途端、患部が激しく痛み出したようで、反対に今度はネオンがその場にうずくまってしまった。

放って置いたまま動き回ったためか、傷口の状態や出血が、だいぶ悪くなってしまうているようだ。

男も怪訝そうな顔をしながら、かがんで彼の足を診る。

「今採ってきた薬草を使おうか」

「う、うん…」

男がネオンの手から薬草を拝借する。途端、男の目が丸くなった。

「…これ…」

「え？」

「また、違う…今度はしびれ草だ…」

「……」

ネオンは目が点になり、そしてみるみる半べその表情になった。

「おれ、また間違えたのかあ…？」

泣きそうな声を上げ、がっくりとうなだれる。

その見事な百面相っぷりを見、男はたまらず声をあげて笑い出した。
ネオンは力無げに、すねた顔を向ける。

「笑うなよっ！ …おれがこんなに悔しがってるのに」

「ごめん…でも、もう限界。…お前、面白い奴だなあ」

くっくと笑いながら、ネオンの左足を手に取る。

すると、彼の手の周りがぼんやりと淡く明るくなり、傷跡が光に包

まれた。

「うわ…」

最初は驚いたネオンだったが、鋭い痛みが徐々に和らぎ、消えていくのを感じた。それどころか、見事に刺さった牙の跡も薄らいでいくようであった。

しばらくその状態が続き…やがて男が、手をそつと離す。

「どう？ 痛くないか？」

ネオンは興奮した面持ちで、首をぶんぶん縦に振った。

「すっげー！！ あんた、そんな力ー」

「シド」

「…へ？」

「シド・レーン。 …自己紹介」

そう名乗り、男…もといシドは人懐っこそうな笑顔を見せた。

ネオンは彼のその顔にしばらく注視してしまったが…はっと我に返り、

「…ああ！！ お、おれね、ネオン・エドラー！ よろしくっ！！」

あわてて名乗り返した。

彼のあからさまに動揺している様子を見、シドはまたさも可笑しそうに笑った。

そして改めてネオンの方へ向かい、会釈する。

「改めて——ありがとう、助けてくれて。怪我までさせて……すまなかったな」

その彼の丁寧さに、かえってネオンは慌ててしまった。シドより更に深く、勢いよく頭を下げる。

「何言っただよ、おれの方こそっ！ 怪我治してくれてありがとうおっ……！」

見上げると、やっぱりシドは笑っていた。

シド・レーン。

髪色は何度見ても純白で、無造作に短めにカットされて風に揺れていた。瞳の色も白に限りなく近い薄緑で、

肌や唇の色も薄く、全体的に“透明”な印象を受けた。年や背格好はクロムと同じくらいで、形からして旅剣士風。

ダークグレイのロングコートをはおり、腰で厚めのベルトを締め、固定している。内側にはコートと同系色の、

バトルスーツに近いものを身に付けているようだったが、腰に下げているのはネオンの持つそれより小さく細い、

本来護身用に多く持つショートソードだけだった。

……ネオンはさっきの怪我の治療法も含め、彼は剣士では無いのではないかと考えた。

「シドは、剣士じゃないの？ さっきのアレは、魔法？」

ネオンの問いに、シドは少し考えるような顔をした。

「うーん…いまいち職種がはつきりしてないんだけど。魔法って言うても、さっきの『治癒』しか使えないんだ」

「でも、使えるだけすっげーじゃん？ 憧れるよ、おれ」

興味深げに見上げるネオンに、シドは素直に嬉しそうな表情をした。

「いいよなあ、そしたら薬草なんかいらねえもんな。…あ、そうかあ、さっきの怪我也、シドが自分で治したのかあ！」

「…！」

ネオンのひらめいた言葉に、シドは少し言葉を止めた。しかしすぐにとりなす。

「…うん、まあ…そんなとこかな」

と言い、自分の腕をさする。

この時には既にさっきの流血はおろか、傷口も浅くなり、歯型が少し残っている程度にまで回復していた。

ネオンは改めて、彼の回復魔法という能力に驚いた。身近なところでテルルという魔法士がいるが、回復魔法は覚えてないのか、今まで一度も使ったことが無い。そこで、こう切り出す。

「…なあ、シドは旅してるのか？」

「そうだな。ずっと、各地を点々と」

「これからどっか行く気なの？」

「いや、まあ旅の途中ではあるんだけど…どうにしろ、こんな格好じゃ続けられないからな。この先に町あるだろ？
そこに寄ろうと思ってるんだ」

そう返すシドの言葉を聞いて、ネオンは声を張り上げた。

「じゃーさ、おれの泊まってる宿来ない？」

「え…」

「おれもパーティ組んで旅してるんだけど、そいつらと一緒にそこに泊まってんだ。あんたまだそんなだしさ、
一人で泊まるよか絶対いいって！ な？」

目を輝かせながら、ネオンは懸命に誘った。

ネオンはシドと出会ってからたちまちのうちに、彼の能力や容姿、垣間見える内面などに興味を引かれていていた。

ネオンの掻き立てられた好奇心は、彼とここで別れる気には到底させなかった。

血だらけの彼の腕を加減しながら、それでも必死に掴む。

「……」

シドは困ったような表情を見せていたが、ネオンのあまりの真剣さぶりに、また少しくすりと笑った。

切れ長の涼やかな瞳が、ネオンに笑顔を見せる。

「…うん、じゃあ、お言葉に甘えて」

「…いいの！？ やったあ！！」

ネオンは飛び上がって喜んだ。

シドも笑って、頬を赤らめてはしゃぎ回る、ネオンの様子を眺めていた…

1日目…北の森（後書き）

2011／1／2 一部改変

1日目：宿屋（1）

「――ありがとよ、お嬢ちゃん。いやあ、良い働きっぷりだ」

「ううん！　こういうこと好きなんだ、気分転換になるの」

「約束通り、ちゃんと代は払うからね」

「ありがとう」

「礼を言いたいのはこっちの方さ。なんならこのまま住み込んで欲しいくらいだよ」

と悪戯気に笑い、宿主は『お嬢ちゃん』の背中をぽんぽんと叩いた。彼女――テルル・アンドレイも、軽く振り返りながら明るく笑った。束ねていた髪をほだき、キッチンを後にする。

腰にまで届くくらい長く、美しい金髪が背中に揺れた。

宿のフロアにあった壁掛け時計をちらっと見ると、もう16時過ぎになっていた。テルルは思わず”あらら”とつぶやき、宿の外を見渡す。

「…まだ、誰も帰って来ないんだ」

パークにつき、この宿に荷物を置いてから、テルルは一度も宿の外に出ていなかった。

この土地には以前に1度来ているし、懐かしいと感じるだけで、特に真新しい景色ではない。それほど疲れて到着した

訳ではなかったし、気分転換したいとは思ったが、先に述べている

通り彼女にとっては、掃除、炊事、洗濯など、家事全般をこなすことが何よりの気分転換の種であったのだ。遊び歩いているより、余程楽しさを見出すことができる。

そんな訳で宿の外に出る理由も無く、宿の手伝いでもしながらパーティの帰りを待つことにしたのだ。

手持ち無沙汰に、入り口に一番近いテーブル席に腰掛けた。

「――あつたまるよ」

ふいに先程の宿主が、横から視界に入り：彼女の席の前に、淹れたてのホットカフェ・オレ入りのカップを差し入れてくれた。

「ありがとう」

もうすぐ10月とあって、午後四時頃となると肌寒さを感じる。テルルは喜んで受け取り、カップを両手で包み込むようにして持ち、口に運んだ。ミルクの分量が多めで、彼女好みの味だった。

もうすぐ宿の食堂も混んでくる頃だったが、テルルはそこに居させてもらうことにした。

ぱーっと外の行き交う人を眺め、パーティの帰りを待つ。

――すると、正面から見慣れた服装の、細長い人物の姿が近付いてきた。

テルルはすぐさま確認でき、その場でカタンと立ち上がる。

「――お帰り、クロム」

テルルの柔らかな笑顔に、クロムは無言で、やや首を傾げて答えた。声は無いが、彼なりの返事だ。

入り口を通り抜けると、クロムはテルルの頭の上から宿内を見回した。テルルは慌てて彼を見上げる。

「あつ、まだみんな帰って来てないの：クロムが一番先だよ」

彼女の助言に、クロムは目線だけ下に向ける。

「：そうか」

「リンに会った？　どこかの酒場に行くって言ってたんだけど」

「会ったが：すぐに分かれた。『付いて来るな』と言われたからな」

特に関心も無さそうに、クロムは答えた。

テルルはリンが言っただろう一言が少し気になったが、どうせまたリンがクロムを突きはねたのだろう、と納得することにした。

「ネオンは：まだなのか。北の森へ行ったとリンから聞いたが」

それに、彼的にはネオンの方が気になっていたらしい。

その問いに、テルルも不安げな顔を浮かべて頷く。

「うん、まだ：」

テルルもネオンを、気にはしていた。

「彼ら」の気配は無いとクロムから聞かされ、興味本位で一人森へ

向かっていったネオン。無鉄砲なのはわかっていたが、
仮にもそこ——北の森は前回訪れた際、「彼ら」に襲われた場所だ。
気配が無いと言って、決して『安全』ではない。

念のため、テルルは再度クロムに問う。

「…来た時と、雰囲気変わってきた？」

「いや…だが、気は許せんな」

テルルは小さく、でもはつきりとうなずいた。

確かに…不意打ちの多い「彼ら」のこと、いつ急に姿を現して来る
かわからない。

クロムは、ネオンやテルルとパーティを組む前からずっと、一人旅
を続けていた。『昔の職種』も相まって、クロムは

敵の気配…いわゆる『殺気』に恐ろしく敏感なのである。——もつ
とも、相手が気配を消してしまえば効果は期待できない
のだが——だからこそ、クロムの周囲への警戒心はネオンや、まし
てテルルなんかより数段鋭敏だ。

クロムはなんとなく、テルルの座っていた席の向かいに腰掛けた。

「何か頼む？」

テルルは思い出したように声を掛けたが、クロムは無言で首を横に
振った。おおよそ、ネオンの帰りを待つつもり

なのだろう。椅子に深く腰掛けて腕を組み、横目で入り口の外に見
える景色を眺め始めた。

「……」

向かった先はわかってるにしろ、違う所へ移動しているかもしれないあの行動派・ネオン少年を確実に捉えるには、

下手に動くよりも必ず戻ってくる場所で待つ方が得策と言えた。

クロムに合わせる様に、テルルもと座っていた席に座り直し、さつきと同じようにまた、ぼーっと外の景色へ

視線を漂わせた。

それから10分も経たずして、二人は、また見慣れた細っこい人物がこちらへ近付いてくるのを確認できた。

「あ…」

と声を掛けそうになって、テルルははっと止まる。

クロムも腕を解き、少し目を見開いて一点を見つめていた。

その人物は、一緒に何かを連れていた。横切る人々も、それを見て何事かを小さく叫び、通り過ぎざまに数歩遠のき、過ぎると振り返ってざわつく。近付くにつれ、二人にも何にそれほど驚愕しているのかが、はっきりわかってきた。

テルルはガタンッ、とふいに立ち上がり、自らも悲鳴に近い声をあげる。

「ネオンっ…!？」

「…ただいまあ」

見慣れた服装の人物——ネオンは、至って普通に二人の前に立っていて、微妙に気まずいような、はにかんだ表情を浮かべていた。

注目すべきは、彼の隣である。

「…どうしたの、その人は…!!」

驚かないはずがない。ネオンは連れと一緒にだったのだが…その人物が全身真っ赤という恰好だったのである。

遠目に見た時点では赤っぽい服装なのかと思えていたが、徐々にそれが、どうやら血汚れのものらしいと判り…テルルは立ち上がったものの、足を動かす事が出来なかった。あまりの痛々しい光景に、近寄ることを躊躇ってしまったのだ。

しかし、その人物——男は、何かしらの重症を負っているだろうにもかかわらず、表情はとても苦しそうには見えない。

テルルの困惑した顔を見て、ネオンは男の方をちらっと見、また向き直った。

「森の中で会ったんだ。もうだいぶ平気みたいなんだけど…怪我したから一応診てやってくれね？」

「…う、うん、その方がいいと思うけど…」

テルルはまごついて、クロムの方へ振り返る。彼に判断を委ねたいらしい。ネオンも、クロムの方を向く。

クロムはずっと、男を凝視していたようだ。ネオンの視線に気付くとちらと彼に視線をやり、一寸後に顔をそむけた。ゆっくりと静かに立ち上がる。

「…怪我人が先だ」

そう言い、一人先に宿部屋に続く奥へと向かっていった。“先だ”のニュアンスには、いろいろ言いたいことがある、という思惑が隠されているようだった。

ネオンは見るからに困っていた。テルルの顔を決まり悪そうに覗う。

「…まずかったかな」

「そんなことないよ！ 心配してただけ」

テルルは笑って返し、男の方へ向く。

男もやはり、立ち去っていったクロムを見送り、やや緊張したような面持ちでテルルを見ていたが…

「とにかく、治療しなくっちゃ！ ね？」

「…ありがとう」

明るい笑顔を見せるテルルに安心したのか、人懐っこそうに少し笑った。

それからすぐに、一同は宿の部屋へ引っ込んだ。

そして名前だけをとりあえず名乗るような簡単な自己紹介の後、テルルによってすぐに男——シドの治療が始まった。

確かにほぼ全身に噛み傷や引っ掻き傷があつて、凄惨たるいでたちだったことも理解できた。しかし：

「…ねえ、これって本当に今さっき出来た傷なの？」

コートを脱がせ、テルルがしっかりと傷を確認する頃には、先程ネオンが見たよりも更に傷は浅くなつていて、ほとんどかさぶたになつていた。

ネオンも改めて目を丸くする。

「そうだよ！ おれが見つけた時には野犬に襲われててさ、そりゃひどいモンだったんだぜ」

「…野犬…！？ ああ、森、野犬なんていたんだ」

テルルは想像したのか、ブルツと身震いした。そこへネオンがまた続ける。

「でも、こいつ回復魔法が使えるんだ。だからすぐ治っちゃうんだよ」

「回復魔法…！？」

「俺が使えるのは簡単な『治癒』だけ。大した程じゃないよ」

聞き慣れないフレーズに驚きの声を上げたテルルに、シドはそう軽

く答えたが、ネオンが横から付け足すように口をはさむ。

「でも、ホントすげーんだ。おれも怪我、治してもらったの」

「えっ、ネオン怪我したのっ!？」

テルルは再び驚愕の声をあげ、差し出されたネオンの左足を確かめる。それもやはり、とくに傷はふさがって、治りかけている状態であった。

テルルは、溜め息まじりに感心の声を上げる。

「いいなあ…回復魔法、使えるんだ」

「なく、お前、そういうの使えるようにならねえの?」

「う…」

「お前の攻撃魔法ってば、実戦で全然役に立たねえもんな。回復魔法の方が絶対使えると思うけどな」

「う、うるさいなあ! ちょっとは役に立ってるでしょー!？」

ネオンのもつともな注文に、テルルは顔を赤らめながらなり返した。

テルルの職種は『魔法士』だが、センスが無いのか幼い頃から修行をし続けてきたにもかかわらず、強度は低いままだ。

だから、攻撃魔法はたいまつ程度の火を出すとか小さなつむじ風を起こすとか、基本的なことしか出来ないし、

運用も成功したりしなかったりで、かなり不安定だ。

なのに、その上回復魔法なんて…覚えてる余裕が無いのだ。

それにである。

「あたしだって、使えるようになりたいよ！ 役に…立ちたいし。でも、覚えても使えないっていうか、出来ないっていうか…」

自信無さ気な声になり、テルルは恥ずかしそうにうつむいてしまった。ネオンも言い過ぎたかな、と思ったのか、それ以上は口をつぐんだ。しかし疑問は残る。

「？ 使えないって…どういうこと？」

「回復魔法はね、魔法使いによっても向き不向きがあるんだよ」

とそこへ、『回復魔法』使いのシドが割って入って来た。テルルもネオンも、シドの方へ向く。

「いや、全ての魔法には、その魔法士が元から持つ能力に応じて、覚え易さが大体決まってるらしいんだ。

だから、俺みたいに回復魔法しか覚えられない奴もいれば」

シドはテルルを見て、

「君のように、攻撃魔法に長けている人もいる。でも君ならこの先、使いこなせるようになる可能性はいくらでもあると思うよ。素質がちゃんと備わっているんだから」

「…そっか…うん、そう思えば、楽になるな…」

シドにやさしく笑い掛けられたテルルは、少しはにかんだ表情を見せ、つられて笑った。

ネオンも、素直に感心したよう。

「なるほどね」

「博識なんだね。職種は学者か何か？」

テルルの質問に、シドはまた、ちよつと困ったような笑顔をする。

「学者じゃないよ！ 昔よく本を読んでいただけ」

「じゃー『魔法剣士』とでもしとけば？」

「…そっかあ」

「…聞こえが良過ぎるけどね。そういう風にしとこうか」

ネオンが珍しく綺麗にまとめたので、そういうことでシドもテルルも納得した。

「――なあ、シドのこと、いくつか聞かせてよ。今までの旅のこととか…生い立ちとかさ」

段々と、シドのことがあらわになってきた所で、緑色の瞳を一段と輝かせながらネオンはこう切り出した。

「…ああ、いいよ」

溢れんばかりの好奇心のあらかたを向けてくるネオンに、幾分か気負いたシドだったが、すぐ了承した。

四つん這いになったままのネオンをなだめるようにしゃがませ、自分はテルルの治療に身を投じた。

シド・レーン、18歳。

10歳頃親きょうだいと生き別れ、そのころから一人で各地を点々と旅し、適当かつ気ままに時を過ごしてきたという。

旅は続けているものの、目的は特に無い。そろそろどこかの土地に落ち着いてもいいとは思っているが、

何しろ先立つものが常に不足しているゆえ、腰を据えるふんぎりがなかなか付かないでいるらしい。

ネオンは、シドが言葉をつなげる度に“ふんふん”とうなずき、すっかり彼の話に聞き入った。

「へええ…すつげえなあ。ちびの頃からずっと一人旅なあ」

「うん、まあ。不自由なこともあるけど、気楽だよ。他には？」

「うえ？ あ、うーんと、ね…」

質問を促され、ネオンは首をひねって二の句を接げようとする。眉をしかめ、上目遣いに言葉を搜した。

「うーん…だめだ、こう、いざって時に出て来ねえんだよな。聞きたいことはいっぱいあったはずなんだけどなあ」

「そういうもんだよ」

考え込んだもののなかなか浮かばず、口をひん曲げて苦悩するネオ

ンの表情を見て、シドは笑ってとりなす。

自分の頭の無さに、不甲斐なさそうにしているネオンだったが……すぐ、思いついたように顔を上げた。

シドの方へ体を向けたまま、後方へ振り返る。

ネオンの真後ろには、電報などを執筆するためにあるのだろう、木製の小さなデスクが一つあった。その椅子には、

ネオン達がさっき部屋に入ってから来た時からずっと、クロムが座っていた。テルルがシドの介抱をし、ネオンが彼へ矢継ぎ早に

質問を浴びせていた間もずっと、彼は後方から、静かにその場を見届けていたのである。

最初部屋に入った途端、彼・クロムから一言くらい叱責を食らうだろうと、体で悲鳴をあげながら覚悟していたのに、

何事も無いまま彼が沈黙してしまったことを、ネオンは少々疑問に思っていた。

そんな不自然なまでに押し黙っているクロムに、ネオンは下から覗き込むように声を掛ける。

「……ねえ、クロムはシドに、何か聞きたいこと、ない？」

不意にネオンに振られ、クロムは片眉を少し上げてネオンに視線をやった。今までどこを見ていたのか……何となく、やはりシドの方だろうと察しはつくが。

「……」

そのまま視線をシドへ移し、軽く息をついてから、クロムはいくつか、彼に問い掛けていった――

あまり時間を掛けずに、クロムのシドに対する質問は終わった。

頃合いも良く、テルルも一通りシドの具合を診終える。

「すごい、ほとんど治りかけてる。消毒のしようもないくらい」
ふうっと一息つき、テルルはシドを見上げ、それからネオンへと振り返った。今まで入っていた力みを抜いたように、
穏やかな表情を浮かべる。

「お湯、いただいて来れば？ さっききれいにしておいたから、気持ち良いと思うよ」

テルルはシドの血まみれの全身を見、こう提案した。もちろん、怪我がそれほどひどくない状態なら、清潔にしておいた方が
衛生上良いだろう、と考えてのことだ。

「そうだな、そうする」

シドも、テルルの勧めに二つ返事でうなずいた。

「手当てありがとう、テルル」

「ううん、やるところが無くて困ったくらい」

苦笑するテルルに笑いかけ、シドは軽く会釈しながら部屋を後にし

た。

「……」

シドが出て行ってから、部屋には一抹の沈黙が流れた。

質問し終わってからクロムは、相変わらずだんまりだったし、テルルも彼の方を伺ってはいたが、自分の手元に残ったシドの血の染みたタオルにはたと気付き、そのまま足早に、部屋の隅に備え付けてある小さな流し場へと消えていった。

ネオンはそんなテルルの動きを目で追い、彼女の姿が見えなくなると、いよいよ困惑した顔をする。視線も定まらず、何かきっかけが無いかと落ち着きなく動き回る。

そんな彼の目が結局行き着いた先は、クロムであった。

クロムは口元に手の甲を当てる格好で杖をつき、目を閉じていた。普段部屋の中にいようがいまいがはしゃぎ、言葉の絶えないネオンに比べ、クロムのこんな姿はそう珍しくはない。

大体ブレードの手入れをしていたり、宿にある本を読んでいたたり、単にくつろいだり（寝てる？）しているのだが、

いずれにしても何かを口にする場面は少ない。しかし、頬杖をついて目を閉じている時は、単に物思いにふけて

いるのではなく、何かを考えている。周囲からの声掛けに対しても、気付かなくなることが多くなる。

なのでそういう時はネオン以下パーティ一同、彼に話し掛けることはせず、そっとしておくようにしていた。

しかし…今はそれではネオンが困るのだ。

やはりネオンが、この沈黙を破った。

「…ね、クロム…」

「…駄目だ」

せっかく話し掛けるきっかけをつかめた所なのに、話を切り出した途端、早くもその目的の相手・クロムに一掃された。

見事に出鼻をくじかれたネオンは、幾分面食らう。

「な…な、まだ何も言ってねえじゃねーかよお!!」

「いや、お前の言おうとしていることくらい、予想つく」

閉じていた目を片方、うつすらと見開き、クロムはネオンへ視線をやった。その小さいながらも鋭い視線に、

ネオンは身をすくませる。

クロムが続ける。

「大方、あのシドという奴をパーティに加えたい、などと言い出すつもりだったのだろうか？」

「うつ…」

どうやら、ドンピシャだったようだ。何も言えずにひるんでいるネオンを見、クロムは視線をそらして息をつく。

目に見えて、呆れた様子で。

しかし、負けず嫌いなネオンは、何とか彼に言い返す言葉を捜す。

「だってっ…あいつ、怪我人だし」

「見たところ、明日には完治していそうだが」

「一人で旅してるよか、生活だって助かると思うっ…」

「『一人の方が気楽だ』、と言っていたな」

「っ…」

しかし…思案し、ひねり出した反論も、ことごとくクロムにはね返された。

ネオンは悔しそうな今にも泣きそうな、何とも言えない表情で沈黙した…が、すぐに今度は立ち上がり、デスクに座ったままの彼の前につかつかと歩み寄り、仁王立ちした。

「何で駄目なんだよ、納得いかない!!」

突然の大声に、タオルを洗い終わって部屋へ戻りかけていたテルルは数センチ飛び上がった。蒼い目を見開かせ、戻りかけていた部屋の端で足を止める。

いつの間にか一触即発の距離にまで縮めていたネオンとクロムの様子を、背後から恐々と見守った。

しかしてクロムは、感情をあらわにしているネオンを、ただ落ち着いていた様子で見据えていた。

「…あの男と、“お前の”ためだ」

「…どおいうこと？」

予想していなかったクロムの返答に、虚を突かれたネオンは、いぶかし気な表情を作る。

クロムはただ無機質に、細く開かれた視線を静かに、ネオンの両の瞳に注ぐだけだったが…その口元からは

決して無感情ではない、何かを感じ取ったような言葉が、ネオンの耳へと滑り落ちていた。

「恐らくあいつは、俺達と行動を共にすることはできない」

クロムはその一言だけ、ボソリとつぶやいた。

1日目…宿屋(1)(後書き)

2011／1／2 一部改変

1日目：宿屋（2）

——『恐らくあいつは、俺達と行動を共にすることはできない』——

ネオンにはさっぱり、クロムが何を言わんとしているのかわからなかった。

言い返す言葉も浮かばず、ネオンは黙り込んでしまった。

クロムもすぐそれに気付き、視線は変えないままに片眉だけ少し上げる。

「お前：あの男の容姿を見て、何も思うところはないのか？」

「……」

すっかり眉をしかめて、ネオンは首を横に振った。

クロムは更に、自分の視線から見てネオンの斜め後ろに控えていたテルルに視線を向ける。黙ったまま、彼女にも同じ質問を投げかけた。

なんとなく張りつめていた空気の部屋の中で、緊張した面持ちであったテルルは、急に自分に振られて必要以上にビクつき、激しく細かく首を横に振った。

彼女のそんな様子も見て、クロムはそれなりに意表を突かれたようだ。

「：お前達は、あの手の輩に遭ったことが無かったのか。：そういえば、旅に出る前はずっと村にいたんだっただな」

「う、うん…」

そしてテルルの回答を聞き、彼は一人で納得し始める。

対するネオンは、いまだ頭をねじりながら苦悩していた。

「急にそんなこと言われても、わっかんねえよ…ただ、シドを最初見た時に、髪の毛が白くなって思った…くらいかなあ」

「理解った。もういい」

「ええ!？」

自信無さ気な口調でコメントするネオンだったが、クロムはあっさり話を切った。

折角無い頭で必死に考えを出したのに…、呆気無くクロムに蹴飛ばされ、ネオンは拍子抜けしたような声を返す。

が、そのまま“まあ座れ”と言いたげに首を振るクロムに促され、ネオンは手近にあった椅子を後ろ向きにまたぐように腰掛け、その背もたれに腕をもたせ掛けた。

テルルも立ったままじゃ落ち着かないので、その場のフローリングにペトンと腰を落とす。

クロムはゆるく腕を組み、やや背を丸めるような姿勢で落ち着いていた。

そしてそのまま、感情を殺したように抑揚の無い口調で話し始めた。

「…あのシドという男の特徴からして、あいつは『アルビノ』だ」

「…あ？」

「あ…あるある——」

「アルビノ」

初めて耳にする言葉に、目をパチクリさせるテルルとネオンだった。そんな二人に、クロムは無表情で繰り返す。言い繰り返されても意味を測り知れない状況の彼らを前に、引き続きクロムは、経でも唱えるように淡々と続けた。

「大体の特徴は身体の色が薄く、髪の毛が生来白髪。身体能力や回復力も低く、病に弱い。個々に差はあるだろうが、どこかしらの色素が薄いことは確かだろう。…俺が知っているのはこれくらいだ」

「…へえ…！！ クロムは、シドみたいな髪した奴を今まで見たことあったのか？」

ネオンが興奮を隠せない表情で、目を輝かせながらクロムに尋ねる。恐らく、彼の言う『アルビノ』の人間を、新たに認識した『新種人間』のように思った…いや、勘違いしたのかもしれない。

そんな彼とのテンションに差は見られるものの、クロムは軽く頷く。

「…俺も一度しか目にしたことが無い。元々そう多く産まれる輩でも無いし、彼ら自身も人目を避ける傾向にあるからな」

「？」

「産まれ出ることを望まれない存在、ということだ」

説明が理解できず再び首をひねるネオンに、うんざりした表情も見せずに、クロムの『対ネオン用わかり易い説明』が続く。

「…ネオン、つい最近まで『術狩り』が行われていたことは知っているな？」

「――」

不意に言い出したクロムの言葉に、ネオンの大きく澄んだ目が少し見開かれ、その視線はそのまま後方へと向けられる。

後ろで同じく聞いていたテルルは、瞬時身体をこわばらせ、見開かれた蒼い双眼を固まらせたままに、クロムを凝視した。

――『術狩り』――

ネオンが生まれ、現在旅して巡っている国・「アトミATOMIA」で、数十年にも渡って行われてきた国の政策だ。

行われた当時の国王が魔術師の持つ力を恐れ、国に内在する術という術を、片っ端から排除しようとしたのだ。

国を挙げての一斉搜索に、最初の10年足らずで国中の魔術師や魔法士が捕えられ、その力を奪われた…

…否、ほとんどが殺された。

各地に眠っていた魔法杖、宝玉等、魔術に関わる物品も搜索し尽さ

れ、炎の中に消えた。その後もしつこく政策は続き、今の「ATOMIA」には、『術』に関連するものはほとんど残っていない。

魔法士一家であったテルルやテルルの両親も、長いことその恐怖におびえて生活し続けた。しかし何のことはない、国の最も外れにあったテルルとネオンの故郷・ローレン村は、その存在さえも知れ渡っていなかったため、搜索の手が伸びることは無かったのだ。

かくして政策の最後まで、彼らについては手つかずのままであった。そして『術狩り』は、国王の代替わりに伴って政策中止となる。それが、今からたった数年前のことだ。

元々多くの機関やもちろん旅パティーにおいても必要不可欠な存在であった魔術師、魔法士は、復帰するに何の障害も無く、むしろ希少な存在となってしまうと、必要なところからはしつこく勧誘されるなど、有難迷惑気味に温かく迎えられている。

『アルビノ』排除は、『術狩り』が軌道に乗ってから行われ始めた。『アルビノ』は、世界全体的に古くよりその存在が忌まわれており、彼らの産まれた家庭には不幸が起こる、という言葉があったのだ。それが理由で、術と同じく危惧すべき存在に当たるとして、何の関連性も無いのに弾圧対象となってしまった。

そういう訳で、半ば『術狩り』に便乗して行われたこちらの政策は、おおよその当たりや方法も固まらないうま見切り発車状態で始められたせいか、開始から一年も続かないまま自然消滅的に終息した。

魔法士、魔術師達に比べ、圧倒的にその数が少なかったのが、直接の原因かもしれない。

「…『術狩り』の概念は、『ATOMIA』独自の物だったが…『アルビノ』は元来どこの国でも忌まれる存在だ。

他国には、その不吉さから生まれ出たら即殺めるか、人のいない土地に捨て置かしなければならぬ法規があると、

聞いたことがある」

最初のうちは興味の色だけだったネオンの顔も、『術狩り』の話が出たくらいから、段々と曇っていつていた。

「…ってことはさ、おれ達がその、『アルビノ』って奴らを今まで見たことがなかったのも…」

やや核心をついたネオンだったが、クロムは首を気持ち横に振った。

「いや…他国はどうあれ、『ATOMIA』ではほとんど『アルビノ』排除政策は進んでいなかったらしい。言ったらう、

彼らは元々産まれる確率が極めて低い。…ただそのことが、彼らの存在を『不幸の証』とすることを助長したようだな」

もともと有する希少価値が、マイナスの方向に一般概念として植え付けられた典型的な例である、とクロムは言う。

ネオンは眉をひそめた。

「じゃあ、クロムは『アルビノ』の奴が不幸を呼ぶっていう『いわれ』があるから、シドを仲間にするなって言うのか？」

「いや」

若干クロムを疑うような質問をしたネオンだったが、彼に再び一掃され：なんとなく安堵したような表情を見せる。

クロムは極めて現実的な思考を持ち、確証の無いことは視野に入れない人間だった。もちろん、神の類でさえも

信じていない。そのことは、ネオンもよく理解していた。

よって、彼が『アルビノ』に否定的なのには、別の理由がある。

「これも先に言ったことだが、『アルビノ』の人間は、一般に身体能力が低い：要するに、ひ弱だ。今の俺達にとって、足手まといになり得る人員は、必ずこれから先の障害になる」

これが究極、クロムの反対論であった。あくまでパーティ全体を考えた、やはりリーダーらしい意見であった。

言い終わると、クロムは座り直してネオンに視線をやった。

「……」

ネオンは少々ふてくされたような顔をして、彼を見返すだけだった。言い返そうにも、あまりに正論過ぎて付け入る隙が無い。

「――でも：あの人は、本当に身体が弱いのかな」

しかしふと、ネオンとは別の方向から声が聞こえる。

足を両の手で抱いた格好で床に縮こまったままに、今までの会話を黙って聞いていたテルルが、遠慮がちにもらした

ものであった。ネオンは顔だけ振り返り、クロムも視線を投げ、双方彼女に注目する。

「だって、あれだけの回復魔法を使えるんだよ？　かなりの短時間でほとんど治ってしまうくらいいの」

「…あゝ…」

「ネオンの傷まで治しちゃってたし。体力が無いんだったら…きつと魔法はそう何回も使えないと思う」

「成程お」

ネオンは妙に納得していた。

確かに、シドの今さっき使った魔力は相当量のはずだ。テルルいわく、魔法を使うのにだって体力は使うのだという。

全身傷だらけだったシドに、体力があり余っていたとは到底思えない。

つまり、

「あの男に体力面での問題は無い、ということか」

「そうならない？」

テルルは、魔法の方はということからつきしであったが、頭の方は意外でもないが、切れる娘であった。戦力には

ならないけど、戦略はよく思いつき、その発想の鋭さは戦術に滅法長けたクロムをも、時にはうならせるほどだった。

なので、

「俺も、そこに引っかかっていた…あれほどの魔力は、『アルビノ』のいわれを感じさせない能力だ」

テルルの意見に、クロムはさほど驚きもせずに相槌した。

彼女からではなくとも、いずれこのような反論がもち上がることをおおよそ予測していたからかもしれない。

クロムはそれきり元の、何かを思案するような格好に戻ってしまった。

ネオンの方はというと、少し頭の中が混乱してしまっているようだ。テルルとクロムの会話が進む度に双方の顔を交互に見、内容に全くついていけない。

…ん〜で、結局、どういうことなの？

そんなネオンの心情を察するように、テルルは自分なりの結論に至った。

「もしかしたら、あの人は『アルビノ』じゃないんじゃないかなあ？」

「うんにゃ、あれは間違いなく『アルビノ』だわね」

不意に後ろの部屋戸の付近から声がして、中にいた三人全員が顔を向ける。

開けたドアの淵に掛けた手に体重を預けるようにして、彼女はそこに立っていた。

三者三様の反応で迎えられるながらも、特にそれを気にする様子も無

く軽く片手を上げて、ポーズをとって見せる。

「リン…！ いつからそこにいたの？」

「のぞき見なんて、趣味悪いことはしないわよっ。ついさっき、いまさっき！」

リンはわざとらしくも、“心外だわ”と言いた気な顔をした。

その視線のまま、自分と真反対側の奥に位置していたクロムと目が合う。

特に気にしていた訳でもなかったけど…クロムから、一応声を掛けた。

「…遅かったな。どこへ行っていた？」

「酔い醒ましてたのよ。どこぞの誰かさんには縁が無いでしょうけどっ」

リンはクロムからそっぽ向いて答え、それから彼に向かってとびきりの渋面をつくり、舌を出した。

そんな顔をされ、表情はあまり変わらないように見えたが、クロムは幾分面食らっているようだった。

…やっぱり、酒場で何かあったんだ…

おおよその予想がついたのか、テルルは一人ひそかに苦笑した。

実際、この二人のいさかいは普段から少なくなく、大体いつもこんな風に、リンの側が一方的にクロムに当たって

いく雰囲気なのだ。もう見慣れた風景で、いまさら心配することではない、ということである。

「まあ、それはともかく」

と言いながら、リンは実に自然に、ネオンのそばにひらりと身を置き、やはりそばにあった椅子に横座りした。

数秒前の渋面はどこへやら、何事もなかったかのように話の輪に加わっていく。

「あんた達の話題の人って、背がこれくらいなの、白髪眼鏡の兄さんでしょ？ さっきそこですれ違ったわ」

そう言いながら、リンは自分の腕を真上に精一杯、伸ばしてみせる。

「うん：多分、その人。どうしてわかったの？」

「そりゃあ、あんた達の話してる人で思いつくったら、あの人しかないわよ。あんな綺麗な白髪、そうは会えないわよねえ：普通隠してたりするんじゃないかしら？」

「リンも、ああいう奴に会ったことあるのか？」

一人で納得するかのように、うんうんうなずいているリンに、ネオンが尋ねる。

「まーねー。私が会った：正確に言えば、見ただけよ？ 女の子で、ひどく病弱なコだったの。やっぱ寒さとか病気とか、太陽にも弱くて：昼間は外に出られないみたいでさ。モヤシみたいに全身真っ白で。」

見た時にはもう、長くない感じだったけどねー…」

「…そっかー…」

斜め上を見ながら話すリンの横顔が、なんだかもの悲しげに見えて、つられたネオンは自然と辛そうな表情になる。

「ごめんな…思い出させた？」

「えっ…」

リンはそんなことを言うネオンに、かえって驚いた。

「…や、やだ、私そんな顔してた？ 違うの、違うの！ ただ、あんな娘もいたなあって、思い出してただけよお！！」

ネオンを手荒くドついて、リンは一転して恥ずかしそうに笑ってとりなした。危うくネオンは、椅子ごと横倒しにされるところであった。こぢんまりとした背格好してるくせ、リンは意外と力が強かった。

リンの話に戻る。

「さっきすれ違った限りでは、良い人そうな感じしたけどなー。なりが血だらけだったから、一瞬引いたけどね。

てか、結構イケてるし？ こっちに会釈してきた時の感じも、物腰柔らかさそうでさあ…」

「『アルビノ』ってのは、確かなのか？」

リンは嬉々として語るが、その対象の容姿他はともかく、早く核心を知りたいところのネオンが横から話を挟む。

「そおね。目の色も薄いし、やけに色白だしね。何と言っても、あの髪色」

「でもあいつは、お前の言うような弱々しい奴じゃあないぜ。けっこうタフ」

「『アルビノ』だったって、全員が全員軟弱ってわけでもないんじゃない？ ひそかに筋トレ積んでたとか、そんなの個人で様々よ、きっと」

「…ふーん…」

「…そっかぁー」

性格よろしく、アバウトな推論を唱えるリンであった。それでも、ネオンなりに納得できたらしい。テルルも、感心したようにうなずきながら、リンの説を聞いていた。

「……」

約一名、沈黙のままの様だが。

「何なに、あの兄さんあんたたちの知り合いだったの？」

そのリンの問いには、いまだ床にねばっていたテルルが答える。

「ネオンがね、北の森で会って連れて来たの。ひどい傷負ってたら

しいんだけど、もうだいぶ平気みたい」

それからテルルは、ネオンも交えて簡単に、これまでのいきさつを話し始めた。リンは話の節々で感嘆の声を上げながら、興味深げに聞き入っていた。

「…なるほどねえ…魔法の使える『アルビノ』君か。それで…ネオンはパーティに加えたいわけね」

「…うん」

そう言い、なんだか頼りなさ気なネオンの反応を確認すると、リンは今度は、テルルの方へ顔を向けた。

「テルルは？」

「…ええっ？ あ、あたしは…」

急に振られたテルルは、ややどもったような口調になってしまっていた。

「ど、どっちでもいいよ。みんなに任せるから…」

そう言いながらも、彼女の視線は明らかにリンとは違う方向に泳いでいた。その視線の先には…相変わらずの無表情で、微動だにしない男が一人。

…はっはぁん。また、ヤツか。

全てを悟ったリンは横目だけで、この場の調和を乱しているであろ

う張本人・クロムを一瞥した。

「で…あんたは、嫌なの」

そうあからさまに言われ、やはり黙って会話を聞き続けていたクロムは、軽く息をつく。

「このパーティに入れるのに、あの男は不向きだ、と言っている」

同じようなモンよ！ と吼えたいところだったが、ここはとりあえず、こらえる。

「世間一般の常識が通じないあんたのことだから、『アルビノは縁起が悪い』ってのが理由じゃないでしょうねえ。

でも、身体的な問題はクリアしてと思うんだけど？」

「……」

リンに皮肉めいた言葉をぶつけられても、クロムはそれに答えることなく沈黙し、斜め下を凝視する。

まだ何か、考えるところがあるのだろうか。

やがて、クロムが独り言のように口を開く。

「あの男には、不可解な点が多い」

「……はあ??」

彼のその、飲み込もうとしても到底飲み込めそうにないような回答に、他三人が口を揃え、首を傾げた。

「俺はさっき、あの男にいくつか質問をした。だがあいつは、それに半分もまともに答えていない」

クロムはネオンに促され：シドが風呂へ行く直前に、彼にいくつか質問していたのだ。

その時の内容は、出身地や元の家族構成など、ごく基本的で、考えなくともすぐ答えられるようなものばかりであった。そんな質問に、シドは曖昧な回答を返すことが多かった。確かに『出身は』と聞かれて、『ちよつと忘れちゃった』では、信憑性あるとは言い難いだろう。

「それから、あの男の回復魔法だが：どんな術をかけたにしても、怪我の治り具合が異常だ」

まあ、通例どんな高等な魔術師でも、怪我の完治に丸一日は掛かると言われれば、数時間というのはやはり、通例外だろう。

「知る限りの知識で全てを片付けるのは安易かもしれないが、回復魔法しか扱えない者に常識外の力が備わっていると認めてしまうのは、無理があるように思うがな」

一連の考察を淡々と述べた上で、クロムは再び、ネオンに視線を向けた。

「俺は、あの男が“危険だ”と言いたい訳ではない。“疑わしい”と言っているんだ」

クロムの表情には今までと違い、無感情に見える中に少しだけ、ネ

オンの心情を氣遣うような気持ちが込められて
いるようだった。

「……」

ネオンはクロムに視線を当てられても、彼の足許を見つめたまま、
うつむいているだけだった。

——お前のためだ——

シドを信用するか、パーティ、いや…自分を守るか。深い葛藤の中
に、彼の思考は居た。

ネオンの代わりに啖呵をきったのは、リンであった。

「クロム。あんたって、どうしてそんなに疑り深いのかしら？」

苛立って彼にくい掛かっていきそうな心持ちを押さえるように、押
し殺した低い声で、クロムへ凄んだ視線を向ける。

「身元不明なくらい、何だったのよ。話せない過去なんて、誰にだ
ってあるもんじゃない…!？」

私の時だって、そうだったわよね…はなから疑ってかかってさ。人
間不信にも、程があるわ」

リンの口調は段々と、激しくなっていた。

リンは、シドに自分を投影しているようだった。

過去を…ネオン達と自分が出会った時や、それ以前の過去を思い返
すと…リンはたまらなくなる。

自分を認めてもらいたくても叶わず、心が空っぽになったまま、顔にだけは笑顔を貼り付けていた過去。

普通に振舞っても明るく愛想を振りまいても、笑われ、蔑まれるだけの自分。

そんな壊れるくらいの辛さを味わう毎日に、隣で慰めてくれる存在がない、孤独。

ネオンは少しびっくりした風に彼女へ振り返り…テルルは何も言えず、ただ心配そうに、黙って彼女を見守った。

「ていうか、あんたに言われたくないのよ。あんたの方が、充分疑わしいじゃないっ…自分の過去話なんか、ほとんどしたこと無いくせに、他人のこととやかく言える立場なの！？」

リンの高ぶった感情から吐き出される怒号は、八つ当たりにも似ていた。でも、そうでもしなければ、自分の気持ち収まりつきそうにない。やり場の無い怒りを、ただ都合のいい誰かに浴びせる。こうやることでしか、自我を保ってられない。

そんな震える彼女を前にして、クロムは無表情に黙って、ただその激情を受け止めていた。

そして、リンは一線を越えてしまった。

「…そりゃ、言えないわよね。あんたの暗くて、おぞましい過去なんか。『人斬り（マードー）』やってたなんてね…!!」

……

深い沈黙が、部屋にたちこめていた。
誰も、会話の先を続けようとはしなかった。

「…どうやら俺は、君達パーティを混乱させてしまったみたいだね」
やがて沈黙が、部屋外の者の声によって打ち破られた。

部屋戸の方へ振り返ると、部屋の外にある廊下の明かりを受け、ぼんやりと瘦躯のシルエットが浮かび上がっている。
逆光に当たってもなお透き通るように白い、問題のシドその人であった。

かすれた声で、ネオンが口を開く。

「シド…」

「悪かったな、ネオン。こんなことになるなんて、思いもしなかったんだ」

柔らかい口調で言い、シドはネオンに頭を振って見せた。ついで、他パーティ全員に顔を向ける。

「でも…何だか、久し振りに身体が休まった気がするよ。楽しかった」

「えっ？ それって、どうい…」

ネオンは尋ねようとして、シドの恰好を見て言葉を詰まらせた。
シドはもう、すっかり身支度を整えてしまっていたのだ。これからまたすぐに、旅に出る『身支度』を。

「色々と、世話になりました。ありがとう」

そう言い、シドはうっすらと笑うと、すぐにきびすを翻し、四人の視界から消えた。

「シド！！」

次の瞬間、ネオンは座っていた椅子が倒れんばかりに勢いよく腰をあげ、ドアに張り付く。

廊下に思いっきり駆け出すと、そこで彼の動きはぴたりと止まった。

後には、放心したような、気の抜けたような表情があった。

部屋の外に見渡せた景色には、もう彼：シド・レーンの姿は無くなっていた。

1日目…宿屋(2)(後書き)

2011／1／4 一部改変

1日目：宿屋（3）

夕方から夜に差しかかる時間帯は、パークに数か所ある宿屋がひと際賑わう頃であった。

街中にある小規模な宿屋は、単に『食事処』としても機能している場合が多い。ネオンら若年四人組パーティの泊まる

この宿も例にもれず、食事にあいついている大半が、夕飯目当ての外来客のようであった。

宿食では定番のバイキング形式で、盛った取り皿の枚数によって値段が決められる。小さなカウンターには、匂いも色合いも鮮やかなディッシュの数々が一品ずつ大皿に盛られ、ひしめくように並べられている。

時間的に、山になっていたはずのものが、食欲旺盛な客共によってその大半が、既に皿の底を覗ける様相を呈していたが。

ネオン達も、食事時からやや遅くなったものの、テーブル席に就いていた。

しかし、いつもならたわいもない会話で盛り上がっているその席が、今日はいつになく陰鬱な雰囲気であった。

四人の誰もが押し黙り、食事をのろのろと口に運ぶ食器音だけが、不味そうに響いていた。

…カタン

やがてカウンターに一番近い席——それだけは通例譲れないところとしておさまっていたが——のネオンが、小さく音を立てて席を立った。ぱつさと伸びた前髪に隠れ、やや

うつむき加減の彼からは、その表情が
覗い知れない。

斜め向かいに座っていたテルルが、彼のそんな“信じがたい”行動
に複雑な顔をして、彼を見上げた。

「ネオン：もう、いいの？」

ネオンはただ、無言で頷く。

「いくら食べてないじゃない：お腹空いてるんでしょ？」

引き留めるように声を掛けるテルルだったが、その甲斐なく、ネオ
ンは彼女に反応を返すこと無くあっさり席を
離れ、宿部屋へ続く階段へと歩き去ってしまった。

テルルは彼を追うように立ち上がろうと腰を浮かしたが、ふんざり
が付かなかったのか、また席に座り直した。

同じように、心配そうにネオンを見上げていた向かいの席のリンと
目が合う。彼女もネオンの異常な行動に、
かなり動揺しているようであった。

ネオンは、何をおいても三度の飯を愛しており、通常なら人の4、
5倍は軽くだいらげる、典型的な『痩せの大食い』

少年であった。風邪をひこうが大怪我を負ってようが、飯を食うこ
とだけは怠らない。

そんな奴が、自分の取り皿にはなっからカス程度のご馳走しか盛ら
ず、あろうことかそれすらにも、ろくに手を
付けないまま食事の席を立つとは。

彼をよく知る誰が考えても『重症』である。

いつもはそんな彼の食いっぷりに泣かされている『パーティの財布』担当のテルルも、食費が浮いたからといって、とても手放しで喜べるような状況ではないことはわかっていた。

だからって…何て声を掛けたいの？

テルルが内で考えていると、斜め隣の席が、ゆっくりと立ち上がった。

やはり黙って、ネオンを視線で追いかけていたクロムだった。

「クロム……」

テルルの、何かを言わんとするような表情に、彼は目だけを向けて軽くうなずき、するりと人の合間を抜けて、ネオンの後を追うように消えていった。

クロムの後ろ姿が見えなくなるのを確認してから、向き直ったテルルは小さく溜め息をつく。

リンの方を見ると、彼女はとうに食事を口に運ぶ手を止めてしまっていたようで、こめかみに手をつき、食べかけのトマトソースのかかった鶏肉のかけらをフォークで突っついていた。疲れている訳ではないだろうに、憔悴しきったような表情をさらけ出している。

「ネオン、こんなに食べないで…大丈夫かしら」

「適当に盛って残しておくよ。きっと、後でお腹空くから」

リンはまるで自分が大丈夫そうでないくせ、立ち去ったネオン（の

腹）のことを心配していた。

テルルの言葉に首を揺らすように一振りし、かがんでいる姿勢から息を吐きながら、どっと背もたれに身を落とす。

いつもならばっちり見開いているつり上がった猫目も、横に細くしぼんでしまっていた。

テルルは首を少し傾げ、彼女の顔を覗き込む。

「…リン…さっきのこと、気にしてるの？」

「だって…ネオンがあんなになってるの、私のせいでもあるじゃない」

そう小さくつぶやくリンに、『そんなことないよ』、とは言えなかった。

ネオンやリンが、これほど元気の無い理由は全て、先程の『アルビノ男・シド』の一件にあった。

ネオンはきつと、彼を仲間にしたいと考えていたはずだ。でもそれが叶わず、加えてあの別れ際に彼に何も言うことが出来ないまま、追い出すような形になってしまったことに、気を落としているのだろう。

そしてリンは…

「もっと、冷静になるべきだった。頭ではわかってたんだけどさ…このパーティーに、軽はずみに誰かを加えちゃいけないってこと」

「……」

「でもさ。前…ネオンが私を誘ってくれた時、すっごく救われた気がしたの…やっと仲間が出来たって。すっごく嬉しかったの」

「うん…」

「だから、シドが否定されてるのが、自分もそうされてるように思えて…我慢できなくなっちゃってさ…」

「うん…うん」

うつむき加減に、自分の内をぼつぼつとこぼしていくリンに、テルは頷き返すことしかできなかった。

このパーティに加わる前は、その身軽な身体を使って旅芸人みたいなことをしていたと…彼女はたった一度だけ、テルルに話明かしたことがある。何年もの間、ずっと独りで。柄の良くもない見物人や、通りすがっただけの冷やかしを相手に。

リンが味わってきた孤独も、それでもいつもパーティを明るく盛り上げている彼女の底力も、同じような経験の無いテルルの想像では計り知れない。

でも…

「…でも、あの時リンの気持ちを一番理解できたのは、クロムだったと思うよ」

「……」

表情を覆うリンの髪が、少し揺れた。

クロムだって、何の考えも無しにリンを拒んだ訳ではない。パーティや、何よりリン自身の身を案じてのことだった。

ただの旅パーティじゃない。仲間に囲まれる楽しさの代償に、常に気の置けない状況と隣合わせの生活になる。

もちろん、命の危険にさらされることも…

「クロムは、ああいう人だから…多分、感情とかより現実を優先しちゃうんだろうけど…それって結局は、相手のことを考えてるってことじゃないかな」

「…まあね」

「リンだって、考えたから…だから怒ったんでしょ？」

「……」

同じように、シドの境遇を身近なところで理解できたはずのクロムが、なぜ彼を拒んだのか。それは結論を出した先が、単純に違っただけに過ぎない。どちらが正しいとは言えないけど、それはそれぞれ、尊重されるべき意見なのだ。

ネオンやテルルは経験が少ない分、『気持ちかわかる』なんて片手間では言えない立場にある。
だからこそ…

「リンとクロムって、あたしやネオンなんかよりずっと、わかり合えるから…ね？」

そう首を傾ぐと、テルルは照れているような、でもなんとなく寂しそうな笑顔を見せた。

いつの間にか顔を上げていたリンは、ぼーっと思いにふけるような顔つきで彼女を見ていたが…やがてつられるように薄く笑った。

「…そんなことない。あんたやネオンには、すごく助けられてる」

「そうかな」

「だって、今話してたら、結構スッキリしてきたからさ！」

「ほんと？ 元気出た？」

「でたでた！！」

急にリンは立ち上がった。

まだ少し無理しているようであったが、それでも素直に、テルルに向かって笑顔を見せた。

「よっしゃ、いっちょケジメつけるわ！！」

テルルが、リンをなだめている時を同じくして、クロムは宿部屋の前に立っていた。

入り口で少しばかり躊躇して、それからとりあえず、足の中へ踏み

入れた。

「…ネオン」

部屋の中は、さっき夕食をとる際ににした状態のままだった。見渡せる視界の中に人の気配は無く、中へと足を進めると共に視線を流していくと、部屋の一番奥に置かれた二段ベッドの下段から、若葉色の毛に覆われたつむじがこちらを向いているのが目に入った。

「明かりくらい点けろ。眼を悪くする」

クロムは、その後頭部に向けて言葉を投げかけながら、薄暗い部屋の明かりを灯し、ベッドの縁に窮屈そうに腰掛けた。

：傍に寄ってみた手前、何かしら言葉を掛けてやるべきなのであろうが…普段から多くを語らない性分ゆえ、どこから何から切り出したらいいのか見当がつかない。クロムはしばらく黙ったまま、ネオンの様子を後ろ目から見守ることにした。

「……」

しかし、いくら待ってもネオンが何かを言い出す気配は伝わってこない。

少しだけ業を煮やしたクロムは、ネオンの真後ろから、そっと顔を覗きこんだ。

すると、沈黙を守っていた彼と、ばっちり目が合ってしまった。ネオンもまた、クロムの様子を窺っていたのだ。

クロムにしては珍しい、駆け引きの敗北であった。

ネオンはその仰向け姿勢のまま、上目遣いにクロムを見つめる。仕方がないので、クロムから口を割った。

「…怒っているのか？」

「ううん」

ネオンはむくりと起き上がり、やっとクロムの側に、きちんと顔を向けた。少し伏し目がちに、ぼつりと言葉を漏らす。

「ただ…あの時、シドを追い出しちゃったみたいで…」

「結果的にはそうなるな」

「でも、多分…仲間にはしない方がいいんだよな」

「そうだな。俺はそう思っているが」

「おれも、…そうだと思う」

そういうネオンの物言いに、クロムは少し首を傾げる。

「…本当にそう思っているのか？」

そう言われて、ネオンはクロムへと見上げ…また眼を伏せる。

「…うん。だって、クロムの言うことだし…おれはいつもクロムの言うことが一番正しいと思ってるから」

そのコメントに今度はクロムが、わずかに眉を寄せる。

「…それはお前の意見ではないだろう」

「う…」

「確かに俺は、俺自身が正しいと思ったことを言っている。だがそれが、世間的に正しいことだとは限らんぞ」

「そんな…」

「例えそうだとしても、お前の中にきちんと考えがあって俺に同調しているのなら構わないが、“俺が言うから”
同調する…それは違うな」

淡々と述べる彼の言葉に、ネオンは少したじろいだ。

「でも…クロムはおれらのリーダーだから――」

「ネオン」

クロムはやや強い調子で、ネオンの言葉を切った。

「俺は、『年齢が最年長』という名目上のリーダーなだけであって、あくまでパーティの一員にすぎない」

「……」

黙ったまま、何かを言いかねているような表情を浮かべるネオンに、

クロムは鋭く射抜くような視線を与えた。

「更に言えば、このパーティの目的は『お前』であって、お前が中心だ。忘れるな」

「！ それはっ…そんなこと…言われても」

ネオンの大きな緑の瞳が、わずかに揺らぎ、じっとクロムを見ていた視線を、下方にそらす。

そんな彼の様子を見、クロムは視線から鋭さを消す。

「ネオン、自分に“正しく”いろ。自分の譲れない考えは、相手に『押し付ける』のではなく、『納得』させればいい。そうすれば、人は必ずお前の行く方向に動く」

「…正しく…」

「どうすれば納得させられるのかは、お前自身で考えろ」

「……」

「その上でなら、余程の非道で無い限り、俺はお前の意見を否定はしない」

「……」

やや光ある論を述べるクロムだったが、難題を突きつけられて萎縮してしまったのか、ネオンは言を返すことなく、無言のままうつむいていた。

クロムは、ネオンの表情をやや覗き込むように首を傾げる。

「自信を無くしたか」

「…わかんない」

「……」

ネオンの曖昧な回答は、さほど期待外れでもなかったらしく、クロムは軽く息をついた。そのまま視線をネオンから外し、おもむろに立ち上がる。

「いくら食べていないだろう、まだ残っているぞ」

ネオンの腹の心配をするクロムだったが、ネオンはゆっくり首を横に振る。

「ここにいる。本当に腹減ってないんだ」

「そうか」

そう返すと、クロムはあっさりと戸口へと向かっていった。

「…なあ、クロム…」

そのまま部屋から出ていこうとするクロムに、ネオンは引き留めるように声をかける。

「何だ」

「…っ…リンの言ったこと…気にしてる…？」

「……」

ネオンは言いためらう様子を見せてから…上目使いにクロムを見上げ、ポツリとつぶやく。

そんなネオンの質問に、クロムはふと止まった。振り返って戸の横の壁に寄り掛かり、やや下方を向いたまま、腕を組む。

「…どう言われようと、『人斬り』だったことは事実だ。無かったことには出来ない。

今の俺があるのは『過去』があるからだ。だから俺は『やっていたこと』を後悔はしていないし、隠すつもりも無い」

クロムは淡々と語る。まるで、聞かれもしないことはいちいち明かさない、とても言いたげな口振りだ。

「じゃあ、そうリンに言い返せばよかったのに」

ネオンの言葉に、クロムは思わず目を剥いて…わずかに口角を上げた。

「あいつにとって俺は、鼻にかかる奴らしいからな」

「…!! ちっ…違うだろおっ!? …もういいよ」

期待外れな返答にネオンは思わずがなったが、すぐに後悔したらしく、ただ不満げにぼやきを付け足して終わった。

「…寝るのなら、着替えてからにしろよ」

ネオンの言いたいことがわかっているのか否か…クロムはそれ以上何も語らず、部屋を後にした。

「――…」

クロムがいなくなると、ネオンはベッドに仰向けに転がった。目を閉じ、大の字に落ち着いた状態で、頭に浮かんでくる言葉を、何度も繰り返してみる。

「自分に正しく、かあ…」

…おれは、どうしたいんだろう。どうすればいいのかな…

そう思いながら、ネオンは無意識に呟いていた。

「シド…ちゃんと食ってるかな…」

「…リン」

部屋を後にしたクロムが階段の踊り場に差し掛かると、目の前に小柄な少女が仁王立ちで待ち構えていた。存在に気付いた時には少し眉を動かしたものの、依然無表情で自分を見やる彼を、リンは険しい顔つきで睨んでいた。

「…正直、すくすく気が乗らないけど…さっきは悪かったわ」

クロムはやはり無言のまま、リンの言葉を受け止める。

「言つとくけど、私個人的な気持ちとしては、不本意なんだからっ…それでもあんたに謝る気になったのは、

全部テルルのお蔭なんだからねっ！ 感謝するならテルルにするのとね…！」

「…リン」

「なによ!?!」

「無理に謝らなくてもいいぞ。俺は気にしていない」

「……………!!」

一方的にまくしたてるリンに、クロムは一定して涼やかな対応を見せた。

さらっと自分の努力を無に帰され…リンは恥ずかしさから一気に顔を赤らめ、そこからまたしても怒りの形相に変わった。

「…あんたって人は…っ… もーっ、やっぱり氣い遣って損した! 今言ったこと全部無し、帳消しよ、無神経男!!」

ガーンと怒鳴り散らし、クロムからプイッと背を向け、リンは肩を怒らせて階段を下がっていく。

「……………」

罵声を浴びせられ、一人取り残されたクロムは、リンの消えていった方をしばらく眺めていたが…やがて長い息をつきながら、踊り場の出窓に身を預けた。

「…理解らん」

1日目…宿屋(3)(後書き)

2011／1／4 一部改変

2日目：パーティ（1）

翌日は雨だった。

雨は朝からしとしとと、地面を覆う様に静かに降り続けた。陽はほとんど照らず、薄暗い朝を迎えてからほとんど明るさが変わらずに、時間が経っていた。

宿泊して一夜明けた朝は決まって、パーティ全員が積極的に寝坊した。長いこと歩いてきた疲れからというよりも、久し振りに草の上に薄い布を敷いただけの野宿ではなく、簡素ながらも屋根のある寢床にありつけたから、という方が本音の所かもしれない。

いつもは一足先に起き出して、他の三人の目覚めの原動力となっているテルルも、宿に泊まっている限りは何も支度する必要が無いため、余裕で寝息をたてていた。しかし、耳の遠くで段々大きくなる音に、彼女の意識は眠りから徐々に現実へ引き戻された。

「…んゝゝ…」

まだ寝ぼけまなこなテルルの耳に一番に届いたのは、しつこく降り続ける雨の音であった。

ひとつベッドの隣でこちら向きにうずまっているリンを横目で確認し、宿先の街道が見渡せる窓へと足を運ぶ。

「雨：降ってたんだ」

半目のままの呆けた表情で薄暗い空を見上げ、それから舗装されていないせいで、ところどころに土色の水溜りが出来上がっている地面へと、目を落とした。

そこで初めて、先ほど自分を起こした本当の音の存在に気付く。

「…何、やってるんだろ」

外の通りは一見にぎわっているように見えたが、よく注視すると何かちよつとした騒ぎが起きているようだった。

上から見渡せる町の人が、誰かを呼びに行ったり、呼んで来たりして、段々人が増えていく。そして、その人ばかりは確実に、この宿の正面に溜まりつつあるようだった。

何気無しに見下ろしていたテルルにも、次第に好奇と不安の気が入り混じっていく。すっかり覚めた目で、真下にある宿入り口を食い入るように見つめる。

…なにになにつ、何なの!?

やがて、宿を正面にしてまっすぐ伸びる大きめの街道から、ひときわ密集した人の一団が現れ…一気に宿の中へと

滑り込んだ。それは一瞬の出来事だったが、テルルははっきりと見届けていた。

その一団が、何かを担いで来ていたこと。

その何かが、確かに見覚えのあるものだったこと。

澄んだ蒼の瞳を見開いて、驚愕の中小さくつぶやいた。

「…シド…!?!」

シドが宿内に運び込まれてから直後、テルルはパーティー一同を片っ端から叩き起こした。

彼らの、まだ現実と夢とを行き来したままの頭に事情を説明すると、案外全員が速やかに覚醒していた。

中でもネオンの目覚めの良さは人一倍で、驚きと興奮が入り混じった心持ちからか、階段をほとんど転げ落ちるように駆け下り、他面々もそれに続く。

食堂に入ると、そこは既に人で一杯になり、雨と土で濡れ汚れた男達が、何やら宿主と言いつ揉めている最中であつた。

「冗談じゃない、うちは病院じゃないんだ！」

「旅人を泊めるのが宿の仕事だろうが。それに、この男に見覚えがあるんだろ？」

「確かに昨日見たし宿に入ったが…すぐ出てったんだ、客じゃない！」

「とにかくこの状態なんだ、ひとまず引き取ってくれよ！」

「あいにくと満室だよ、そっちが引き取れ！！！」

双方勝手な言い分を並べていがみ合っているのを横目に、店内を見回したネオンは、ほどなくシドを確認した。

問題の渦中の人は、食堂の隅の方の席に預けられていた。

昨日一度目に会った時のような、全身傷だらけという状態ではなかった。その代わり、長いこと雨ざらしのまま

だったのか上から下まですぶ濡れで、身体から滴る雨水がとめどなく床に落ち、辺りに水たまりを作り上げていた。

顔も唇も、昨日よりなお一層、透けて消えてしまうかのように青白くなっていた。

ネオンは、荒れている場から気付かれないように、こっそりとシドに近づく。

「…シド…！」

小声で呼んでみたが、昨日と同様気を失っているのか、シドは目を閉じたまま動かない。

頬に手をあてると、ひんやりと冷えきっていた。このまま放っておいたら、風邪をひいてしまうかもしれない。

「本当に意地っ張りなオヤジだな、人で無し！」

「て、てめえらっ…！ 毎日飯食わせてやってる恩も忘れたか!？」

「おいおい、ちょっと落ちつけよ大将！」

ネオンが振り返ると、運んできた男達と宿主側とで場は既に混戦と化しており、間に割って止めようとする宿客らも

加わって、壮絶な景色が広がっていた。

声を掛けるチャンスを伺うネオンだったが：一向に騒ぎが収まる気配は無い。

ネオンは宿主らの塊をじっと睨み、やがてすうっと大きく息を吸っ

た。

「あのおっ！！！」

突然のネオンの大音声に、揉めていた場の動きがぴたりと止まった。そして掴みあい、殴り合う寸前であった男共の興奮した顔が、一気にネオンへと集中する。

「…なんだよボーズ」

気が立っている宿主から刺すような怒気に向けられ、ネオンはたじろいだが…負けじとまっすぐに視線を返す。

「あのっ…あの人、おれが泊ってる部屋に引き取ってもいいかな？」

「はあ？ お前の連れか？ そういや昨日お前、あの男と一緒にいたような…」

「うんっ、あ、いや…連れじゃないんだけど…連れ…みたいな」

「なんだあそりゃ！？ はっきりしろよ！！」

「っ…」

まだ興奮冷めやらず、不快と苛立ちの色があらさまに露出している宿主に向かって、ネオンは懸命に言葉を続けた。

「泊める部屋無いなら…なら、相部屋だったら問題無いだろ？」

「ああ？ …ん、まあ…無いが…」

「後始末はちゃんとこっちでやるから、宿には迷惑かけないよ…お願い」

「……」

必死に訴えるネオンに、連れて来た男連中と掴み合っていた手を振りほども、宿主は腕組みをして唸る。

「本当に任せていいんだな？」

「うん！」

「…よしわかった。運んでいきな」

「いいの！？ やったー、ありがとう！」

洩々ながらも承諾した宿主の言葉を受けて、ネオンはその場で飛び上がって喜んだ。

周りの輩も、その様子を見て万事解決したと解釈し、宿主に悪態をつきながらもあっさり宿を後にしていった。

緊迫した空気を、かたずを飲んで見守っていたテルルだったが、ネオンがいつもの調子に戻っているようで、少しだけ胸をなで下ろした。

「クロム、シド運ぶの手伝って！」

そして、急きたてるネオンに普段通り無言で応じているクロムも確認する。

昨日、あのまま食堂に戻ってこなかったネオンや、どういう訳か怒りを振りまきながら戻ってきたリンを気がかりにはしていたが、クロムにはあえて何も聞かなかった。

しかし、一連の様子を見ると…ひとまず安心して良さそうだった。

でもそれも束の間、テルルの頭の中には、また新たな問題が浮上する。

…シド、パーティに入るのかな？

ネオンとクロムの手によって二階の宿部屋へ運ばれたシドは、すぐさま部屋の奥にあった、ネオンの寝腐っていたベッドに寝かされた。そしてネオンが濡れた服を着替えさせ、テルルとリンが炭で熱した石で簡易の懐炉を作り、肩口や足元を温めた。

…そうこうしている内、青白かった顔色にもわずかだが血の気が戻り…熱も出ていなさそうなので、とりあえず一同手を休める。腰を落とした途端、起きがけのひと騒動だっただけにどっと疲れが押し寄せて、揃って深い溜息が出てしまっていた。

少し暖かくなり過ぎた室内で、リンが顔を手で仰ぎながら、ネオンへと振り返った。

「——なんかまた連れて来ちゃったけどお、どおすんのよ？」

「！ うん…」

同じように、袖口で顔の汗を拭いていたネオンは、リンの方へ振り返り、少しだけ考え込むように沈黙すると…
ぽつりと言葉を漏らす。

「おれ、こいつ…シドを、パーティに加えたいんだ」

うつむき加減に言うと、部屋の中にいたパーティメンバーを見回す。
ネオンのその、いつにない真剣な表情に、
全員が注目する。

「本当は、昨日…連れて来た時にはもう、仲間になりたいと思ってたんだ。で、その時は…ただ、シドのことを
もっと知りたいからって、それだけが理由だったんだけど…もう少し色々考えてみた。シドが加わった場合と
そうならなかった場合とで、色々想像してさ」

ネオンはちらりと、静かに横たわっているシドを見やりながら、話し続ける。

「おれさ、いっつも皆に助けられてばかりじゃん？ 迷惑掛けてばかりなのに、何も出来てないよなあって。

でも…おれでも、シドになら何かしてやれるんじゃないかって…思っ
て。

昨日会った時も、今日も…どうしてこいつがこんなになってるのか、よくわからないけど…

何か、放っておけなく

なっちゃったっていうかさ。シドのことが、頭から離れなくなっちゃって…」

必死に考えた胸の内を吐露するネオンの言葉を、三人が黙って聞いていた。

「おれ、ここでこのままシドと離れちゃったら…きっと後悔すると思うんだ。正直何が出来るか、全然わかんないんだけど…力になりたいんだ。そういうのって、駄目…かな？」

沈黙が下りる中、ネオンがおずおずと、上目遣いにメンバーを見回す。

「…それが、一晩考えた、あなたの理由？」

しばしの沈黙の後…最初にそれを破ったのは、テルルだった。

「…うん」

「わかった。あたしはいいよ」

その返答に、ネオンがテルルの方へ顔をあげると、幾分か呆れたような彼女の表情があった。

「あたしもね、本音はちょっと心配な所があるんだけど…でも、多分ネオンよりは手が掛からないんじゃないかなって思ってる」

「うん…ん、ええ!？」

「元々みんな好き勝手にやってるもの。今さら一人くらい増えたって、どうってことないよ」

いつもこのパーティの面々には、事ある度に振り回されているテルルであった。

加えてネオンの幼馴染でもある彼女は、ネオンの行動パターンを嫌というほど間近にし、常に辛酸を嘗めさせられてきていた。彼女にしてみれば、これしきのことは既にアクシデントにも数えられないのかもしれない。

ネオンが、何も言えずにきまり悪そうにしている横で、リングがプツと吹き出した。

「そおねー、とりあえずネオンよりは聞き分け良さそうだし、問題無いかもね。食費もかからないだろうしさ♪」

「寝起きの悪さもね」

「っ…ひでー！！ 何だかおれがすげえ問題児みたいじゃねえ！？」

「え、違うの？」

「自覚無さ過ぎ〜」

笑いながら茶化すリンと、つられて笑っているテルルを見て、ややふくれてみせるネオンだったが、その表情には内の安心感が表れていた。

「――で、OKなのか、な？」

と、笑い止んだリングが、視線をクロムにやる。

そういえば、彼はさっきから黙ったままだ。ネオンの緩みかけてい

た緊張感が、再び引き締まった。

バチッと、クロムと目が合った。その圧倒的な威圧感に、ネオンは本音のところ視線をそらしたかったが、

ここで引き下がったら全てが無駄になってしまう。

ネオンは、昨日のクロムとのやり取りを思い出した。彼が本当の所どう思っているのかはわからないが…彼が

否定しない何らかの糸口が必ずあると、ネオンは感じ取っていた。

クロムを説得出来るとは思ってない。でも、自分の意思は伝えたのだ。後は彼が、どう認めるかだ。

いつまで続くか視線勝負は、クロムが自然にそらしたことで、一応収拾がついたようだ。

テルルが、押し黙ったままのクロムをうかがう。

「クロムは…いいの？」

「いいのも何も、ここまでまとまってきたって話、今さらいちやモンつける隙は無いと思うけどねぇ？」

「リン…っ」

微妙にケンカ腰になっているリンを制し、テルルはネオンに振り返る。

「ちゃんと面倒見れるんだよね？ 大丈夫だよな？」

テルルに助言してもらい、ネオンは懸命に首を縦に振った。

「うんっ…大丈夫！！ 多分」

……頼りねえ……！

せっかく彼のフォロー側に徹していたのに、女性陣は揃って脱力する。

そんな不安の残るネオンの決意に、クロムは軽く息をついた。全員が、彼の一言を息を呑んで待った。

「言い分はわかった。…お前の好きにすればいい」

冷やかかながらも脈のある彼の反応に、ネオンの顔がぱあっと明るくなる。

「じゃあっ…」

「だが、昨日から言っているように、俺はその男を信用していない。それは今でも変わらない」

「うっ」

困ったように言葉を詰まらせるネオンを見、テルルがもうひと押し突っ込む。

「…それって、結局反対ってこと？」

「少なくとも『賛成』では無いな」

「えー、どういことっ?」

クロムの言葉の意図が理解できず、ネオンは首を傾げていたが…テルルは何となく、彼の真意を感じ取った。

リンも呆れたように頬杖をついて、クロムをじっと睨んでいた。

反対しない。でも、歓迎はしない。

「…後は、本人に進退を問うことだ。加わろうが拒否しようが、俺は一切関知しない」

全員が何かを言いたげに黙っている中、クロムはにわかに立ち上がり…そのまま部屋から出て行こうとする。

「ちょっ…どこ行くのよ？」

「朝飯」

「っ…」

リンの問いかけに、ちらとだけ振り返り、当然の事のように返してきた。

「こんな時によく――」

ぐううううう

更に啖呵を切りかけたリンだったが、すぐ横で巨大な腹の音が。

「……ネオン…」

「…わり、なんかおれも腹減ってきちゃった」

「…ま、昨日全然食べてなかったしね…」

申し訳なさそうにしているネオンに、テルルは苦笑する。

「いいよ、行ってきたよ。シドはあたしが看てるから」

「わりーな！ 食い終わったら、なんか部屋に持っていくよ」

テルルに促され、ネオンは心底嬉しそうな表情を浮かべつつ、足早にクロムを追って部屋を後にした。

溜息をつきつつ、テルルはリンへと振り返る。

「リンは？ 食べてくれば」

「…いー。二度寝、ってかフテ寝！ 私が起きるまで起こさないでいいわよ」

しかし声をかけた時には、彼女は頭を振りつつ、ベッドの方へと向かっていた。

「…リン…」

テルルは困惑した顔を浮かべ、リンを視線で追う。

疲れ切ったようにリンはベッドへ倒れこみ、昏々と眠り続けているシドの方を見やる。

「私だって、ハナからその人信じてる訳じゃないけどね。実はすごい重罪人なんじゃないかとか、何かに追われて

るんじゃないかとか、考えちゃうけど」

「うん…」

「でも仲間は増えた方が、問答無用で楽しいじゃん？ 誰だって、最初はよく理解んないんだし。信用なんて、そこから作ってくモンなんだからさー…」

「うん」

テルルは頷きながら、リンの側へ座り込んだ。

「リンのそういう性格、好きだな」

「へへ、惚れるなよ。とにかくま、これから益々あんたは大変だろうけど、頑張ってちょうだいね」

「…やっぱり、そうなるんだ…」

折角の幸せそうだったテルルの顔が、ニヤつくリンの追い打ちを受けて、再び落胆した。

……暖かい…

「——気がついた？」

うつすらと霞む視界の向こうに、黄色めいた明るい景色が見えた。

それが、目の前にいる金髪の娘のものだと
気付くまで、それほど時間は掛からなかった。

「…ああ……」

「良かったっ…なかなか起きないから、心配しちゃった」

緩慢な動作で起き上がろうとするシドを支えながら、テルルは彼へ
笑いかけた。

「熱は出てないみたいだけど…具合はどう？」

「…ええっと…」

しかしシドは、まだ今の自分の状況を解っていないようだ。一方的
に話を進めてしまいそうになって、テルルも
はっと気付いた。

「あ、えっとね、ここはあたし達が泊まっている宿屋で…昨日、い
たところね？ 覚えてる？」

ときり出し、テルルは彼がここにいるまでの経緯をかいつまんで説
明し始める。シドもテルルの話を聞くごとに、
自分が気絶する前のことを思い出したようだ。

「…そうか、俺、気を失って…」

「覚えてないの？」

「ああ、記憶があやふやだ」

「…何があったの…?」

明るい調子で言葉をかけていたテルルが、ふと怪訝な表情になる。彼女に顔を覗き込まれ、シドは自分の手元に視線を落としたまま、一時沈黙し…

「…たいしたことはないよ」

「…そっか」

そう言葉を切り、笑顔でテルルに振り返ったので、テルルはそれ以上何も聞けなくなってしまった。

「ありがとう、また世話になっちゃったみたいだな」

「お礼なら、ネオンに言えば? ってーも今本人、席外してるけど」

ふいに後ろから声が聞こえ、振り返ると今度は紫色の髪をした娘が、ベッドの縁に腕枕をする格好で、こちらを眺めていた。

「覚えてる? 私のこと。白い髪のお兄さんっ♪」

「覚えてるよ。えっと、名前が…」

「リンよ。よろしくね、シド」

「ああ。…? よろしくって…?」

「…あっ、あのね」

いきなり“よろしく”扱いされて戸惑っているシドに、テルルが遅ればせながら説明する。

「ネオンがね、あなたをこのパーティに加えようって持ちかけたんだ。もちろん、あなたさえ良ければ、の話だけどね！
あたし達も、喜んで歓迎するよ」

「それは…それは、『あの彼』も平気ってことなのか？」

…クロムだ！！

これまでの経緯からすれば当然の質問に、リンは眉根を寄せ、テルルは焦りの表情を見せる。

「う、うん、大丈夫なの、その辺も…！ さっきね、説得したからっ」

「気にしないでいいわよ。多分あいつは、ネオンを独り占めしたいだけなんだろうーしい」

「…ひとりじめ…???」

「あーっ！！ ちがうの、クロムは心配症なだけってこと！」

リンの爆弾発言を受け、明らかに不可解な顔をするシドに、テルルはすぐさま言葉を改めた。

「ああ、そういうことか…」

それなりに納得したシドだったが、リンは不満そうだ。

「なにようく、心配ってただけなら私だって同じよ」

「…リンっ…お願いだから言葉を選んでっ…」

「へーへー、わかったわよ、もう何も申しません」

もう一息で怒髪天をつきそうなテルルに、リンもしぶしぶ従った。そんな二人の掛け合いを見て、シドはクスクスと笑い出した。

「面白いね、君達みんな…ごめん、笑い堪えられなくて…。ありがとう、誘ってくれて」

「じゃ、パーティに入る？」

「ああ、是非お願いしたいな。…ネオンにもお礼を言わなきゃな」

「さっき朝食食べに行ったところなの。様子見に行く？」

「ダメよ、無駄無駄」

すっかりノリ気なテルルとシドを、リンは冷めた表情で止める。

「あのコ、食べてる時は他のこと考えられないもの」

「そういえば、昨日は怖いほど食欲不振だったし…そうだね、多分夢中だ」

「きっと、いつもの5倍は食べてるわね」

「…それは…大変そうだな」

三人は、今まさに階下で繰り広げられているだろう、パーティー最大の問題児の様子を思い浮かべていた。

2日目…パーティ(1)(後書き)

2011/1/9 一部改変

2日目：パーティ（2）

本降りに近い調子で降り続けていた雨は、いつの間にか勢いを弱め、よどんでいた空模様も、夕方近くには紅い夕日を拝めるくらいに晴れ渡っていた。

今朝の騒ぎを受けて、事態を聞きつけた近所の野次馬連中が、宿を覗きに來たり宿主に伺いをたててきたりと落ち着かない状態が続いていた。しかしそれも時間が経つにつれて、いつもと変わらない様子を取り戻していた。それでもやはり多少の影響を被ってか、夕飯時の宿の食堂内はいつもより3割増しくらいの客入りで、嬉しい悲鳴をあげながら稼動していた。

結果的にはそれなりのメリットももたらした騒動の当事者・シドは、そんな外界を知ってか知らずか、その日は一日中ネオンらの泊まる部屋にくつろいでいた。体力は既に問題無く回復していたが、旅で疲れて來たであろう彼を氣遣ったのだった。

“ 実際、金が無かった ” と話すシドは、この町に着く前まで野宿生活之余儀なくされていたらしく、久々のクッションの効いたベッドに喜んでいようだった。

「服、乾いたからここに置いておくわね」

「ありがとう」

昨日と同じく忙しい宿の手伝いに出ているテルルに代わって、今日はリンがシドの面倒を見ていた。『面倒』とは

言っても、ベッドで長いこと横になって退屈であろう彼の、もっぱら話相手程度のものであったが。リンにとっても、金を使わなくて済む良い暇つぶしになっていた。

話の大半は、リンがこのパーティに加わった時の前後に終始していた。

「そうか、三ヶ月前から…」

「そー。その時、“これからもずっと、こんなことしていけるのかなー”なんて思ってたから、ネオンが誘ってくれて助かった。マジで」

リンは、粗暴な両親からは幼くして早々に縁を切り、身軽な身体と冴える運動神経を生かしてジャグリングのようなものをしながら、たった一人で「ATOMIA」国内を転々とし、何年もその日暮らしを送っていた。

『芸人』は、この世界では一般人から見ればずっと低い位置にある者として見られており、人を笑わせて金を集めるという行為が労働者からは差別的に見られ、一部の人間からは『物乞い』と変わらない扱いを受けていた。

しかしリンは、持ち前の明るさとプラス思考で乗り切っていた。立場的には辛いけど、ただ働いたり、戦って金を稼ぐよりずっと自分の気性に合っているし、面白いと思っていた。

しかしそんな生活にも、三ヶ月前にピリオドを打つ。

声を掛けたのは、リンの方からだった。立ち寄った町の川辺に一人

座っていたネオンに、後ろからちよっかいを出して、思ったより動揺した彼のしぐさが可愛く思えたのが、リンの記憶に今も鮮明に残っている。

三ヶ月前。

いつものように街道でささやかながらの見世物をして、その日食べれるくらいのチップを稼ぎ、数週間程度過ごしてまた別の町へと出発する。

そんな時分に、町外れに流れる川の近くで荷物をまとめていたリンの目に入ってきた、緑色の髪をした後ろ姿。

川原に広がる砂利の中、方々に生える雑草に隠れるようにうずまっていた、そんな少年にふと声を掛けたく

なったのは、単なる偶然だったのだろうか。

そのまま普通に近寄っていてもつまらないと思ったリンは、得物である長棒を手に忍び足で近付き、ピタリと棒を目標の背中当て、出せる限りの低音調で話し掛けた。

「…お前、ここで何をしている？」

「!!　っひえ…っ…あ、あう」

リンの思惑では、彼がそれなりにびっくりして、すぐに振り返ってくるだろうという算段だったのだが、少年は恐怖にも似た叫び声をあげて、振り返ることもできずにそのまま固まってしまった。

幾分見当違いだったリアクションにリンは首を傾げたが、その反応がかえってリンの悪戯心をくすぐった。
顔ではニヤニヤしながらも、口調は変えずに演じ続ける。

「お前、この土地の者か？」

「…ええっ！？ い、あ、ちが…」

「そうか。ではこの町の掟で、余所者は処刑する！！！」

「なっ！！！？ なん…いやっ、待って、やめっ……」

何とも陳腐な脅し文句だったが、リンの悪ふざけに疑うことなく騙される少年は、声を裏返させて頭を抱え…
そのまま体を小さく丸め、ガタガタ震えだしてしまった。

「……」

リンはそのあまりの様子に、しばらく口をあけたままポカンとしてしまったが…すぐにプーッと吹き出した。
少年の方も、後方の変化にさすがに気付いたらしい。

「……?..?」

「…うっそっぴーん♪」

「……えっ！！!?」

さっきまでの堅い言い回しから急にフザけ口調に変わったことで、少年が驚いて振り返ると…視界に、可笑しそうに

ニヤつく小柄なリンの姿が入って、彼は更に驚いたように目を点にする。

「……」

「へへ、ビックリした？」

「えっ…あ？ ……今の、お前…!？」

「他に誰が？ ……ってあんた、もしかして泣いてんの!？」

そう言われ、少年ははたと目に手をやる。しかしその次の瞬間、リンは糸が切れたようにゲラゲラ笑い出した。

「ウー——ソ！ 単っ純——!!」

立て続けに騙され、呆然とする彼をよそに、リンはヒーヒー言いながら川原を笑い転げる。

「なっ…じゃあ、さっきのも全部ウソなのか!？」

「当ったり前じゃない、あんな三文芝居、普通気付くってー!!！ほらよく見てよ、こんな棒で人殺せるところうう？」

「……」

目をパチクリさせる少年に言われ、リンは手に持っていた長棒を、クルクル振り回して見せた。
ようやく状況が飲み込めてきた少年は、恥ずかしさと悔しさをにじませた表情をリンに向ける。

「あーでも、打ち所悪きゃあ死んじゃうかな？ やってみる？？」

「…あのさあ」

ひたすら軽い口調で続けるリンの態度に、少年は懽然とした顔で立ち上がる。しかしそんな判り易い

怒りオーラを見せても、リンのテンションは全く変わらない。

何かを言いたげな彼を黙らせるがごとく、更にマシンガントークを繰り広げる。

「で、あんたどこから来たの？」

「っ…、…ローレン村」

「ローレン？ …知らない！」

「……」

リンは再び笑い出した。しかし少年にはいまいち今の、自分の言葉の笑いのツボがわからなかったらしく、ころころと笑う
リンを無表情で見やっていた。

「この国にそんな村、あったっけ？ ま、いいわ。私はねえ、テルビ町！ つつても、もう5年も前の話——！！」

「……」

「まあATOMIAから出たことは無いんだけどさ！ でもあんたの村は、自称旅通の私の情報を持ってしても

知らないわあ。それにしてもあんたさあ、いくら田舎者だからって、ちよつと騙され過ぎじゃない？

ちよつとは疑ってかかることを覚えないうさあ、世の中私みたいに、善い人ばかりじゃないんだからね？」

そんな彼を置いて、ひたすらしゃべり続けるリンであつた。

怒るタイミングをつかめず、少年はただ黙りこくっていたが…ふとリンは下からのアングルで、彼の顔を上目遣いに覗き込む。

「…ふん」

「な、なんだよ…」

「んー？ 可愛い顔してるなーって思つて♪」

「…はあ!？」

「んふ、冗談よ♪ いや、ちよつとね、何か悩みでもあるんじゃないかって」

単なる偶然であろうリンの勘ぐりに、彼は少し顔を強張らせた。彼女の視線から逃れるように、目をそらす。

「……別に」

「なあにそれ？ …あ、もしかして、恋の悩み？ 得意よ、私♪」

「ちっげーよ!?!?!」

とうとう少年は怒りをあらわにした。

「何なんだよ、お前！？ いきなりおれ騙すし、笑うし！！ おれに何の用！？ てかお前、誰！！？」

怒りに任せて、自分に主導権を持つてくるべく、一気にリンをまくし立てた。思いのたけをわめき散らし、言い切ってハアハアと息を切らす。

いきなりの彼のキレモードに、さすがのリンも目を丸くして口をつぐむ。が、すぐにフフ、と笑った。

「…私の名前？ そーねー、教えてあげてもいいけど」

そう言うと、リンはひらっと少年から距離を置いた。

「私の体に触れることができれば、言ってもいいわよ」

「…は？」

「指一本でもいいわ。もちろん、殺さない程度にね♪」

「……？？」

訳がわからない、という顔をしている少年に、リンはニヤツと笑って見せる。そして彼の背に下がっているミドルソードを、顎で示した。

「あんた、剣士なんでしょ？ その剣抜いてさ」

「……」

リンは、あからさまに挑発していた。

この目の前にいる彼が、一体どの程度の實力を持っているのか、好奇心を掻き立てられていた。どこことなく

田舎臭く、ひよろつとしていかにも頼りない風体を晒す少年剣士が剣を振るう姿を、見てみたいと思っていた。

しかし少年は、何かを思いつめるように沈黙し…自分の足元へとうつむく。

「…今、剣を使う気になれない」

「…ふうん？」

彼の言動に若干期待が外れたリンだったが、

「じゃ、これ使って！」

「えっ、うつわ」

そう言ってリンはいきなり、自分の持っていた長棒を少年に投げて渡した。彼は思わず条件反射的にそれを受け止める。

リンが彼に渡した長棒——普段は見世物に使う小道具の一つであったが、その実は護身用に造った戦闘用スティックだ。

リンの背丈くらいの長さがあるそれは、小柄な彼女に扱いやすいように細く軽量で、両端には鉄製の鉾が仕込まれており、柄をひねると鉾が出し入れする仕掛けが施されている。

鉾はさほど鋭くないが、使い方次第ではそれなりの殺傷力が期待できそうな代物だ。

そんな一物を受け取った少年は、それとリンの顔とを見比べる。

「…ほら、かかって来なさいよ」

その時既に、リンは表情を一変させていた。

声色はお調子付いたままだったが…口元で不敵な笑みを浮かべつつ、目は笑っていなかった。

そんな彼女に、少年は少しばかり躊躇したが…意を決したのか、リンと同じように表情を変え、ゆっくりと身構えた――

「おれ、素早さには一応自信があったんだぜ？　でもさ、全然かすりもしねえの」

「ホホホ、残念だったわね。それは私の方が専売特許なの！！」

いつの間にか、リンとシドの（否、リンの一方的な）会話にネオンが加わっていた。

リンの自慢気発言に言い返しのできないネオンは、ふくれっ面を見せる。

「それで結局、ネオンはリンに負けたんだ？」

シドの追い討ちのような問いに、リンは誇らしげに笑い、ネオンは悔しそうに口を尖らせた。

「反則だよ、あんなの。最初っからお前が勝つように出来てたんじゃなか」

「剣士のクセに、ウジウジ文句たれない!!」

ブツクサ言い始めたネオンを、リンは手ひどく小突いた。
あぐらをかいていたネオンの体が、後ろへふっ飛んだ。
そんな二人のやり取りを見、シドは可笑しそうに笑った。

「…あつれ、もう終わりい？」

荒い息遣いをさせて砂利に倒れこんだ少年を、リンは真上から覗き込む。

「…無理、お前…すげえ…素早っ……スギ」

しばらくやり合った二人だったが、終始リンの優勢ペースは崩れなかった。

使い慣れない得物ではあったものの、いつものミドルソードよりは数倍も軽いスティックが少年の動きを鈍らせる

要因になることは無かった。しかし、リンの敏捷性は異常なほど高かった。

リンは常時、ジャンプや空中回転を織り交ぜながらヒラヒラと飛び回り、それでいて全く息を切らさない。

時たま少年の頭上を飛んで、彼のおでこをピシャッと叩くなど、完全に遊んでいる様子だ。

逆に、そんな彼女のトリッキーな動きに翻弄されることとなった少年は、あっという間に体力を消耗させていく。

正味20分程度。元々持久力に欠けていたらしい少年は、結局リン

の髪の毛一本にすらかすることができないまま、
早々に音をあげてしまった。

仰向けに転がって、肩で息を切らす少年の傍らにしゃがみ、リンは
頬杖をつく。

「あんた、名前は？」

「…ネオン…ネオン・エドラー…」

「そー。私はリン・ライムよ」

「…なんで、名前…、言わねえ…んだろ…？」

少年——ネオンがリンを見上げると、リンはニツコリと笑った。

「いーの！ 面白かったから♪ あんたも面白かったでしょ？」

「…？」

リンの言動の意図が掴めないでいるネオンの手を取り、リンはてん
てんと指差す。

「豆」

「……」

「あんた、剣が好きなんでしょ？ 好きなこと思いつきりやれば、
何だって面白いわ」

「あ…」

リンに悪戯っぽく笑いかけられ、ネオンは何となく気付いたようだ。

「スツキリした？」

「…うん」

少し息が落ち着いてきたネオンが、ぴよこつと起き上がる。そのまま丁度目線に合う高さにあったリンの顔に、ニカッと笑い掛けた。

「リン、ありがとう。お前いい奴だな！」

「――」

リンは突然のネオンの笑顔に、はたと注視してしまったが…思いついたようにその顔を平手ではね退けた。

「あいつて！ 何すんだよ！？」

「…ネオンあんた…そういう顔、無防備にしない方がいいわ」

2日…パーティ(2) (後書き)

2011/1/9 一部改変

2日目：パーティ（3）

「――そんな流れで、パーティに入ることになったんだけどさ」

嬉々としてネオンとの出会いを語るリンだったが、ここで一変して険しい表情に変わる。

一瞬キョトンとしたネオンが、ああと気付く。

「そういや、クロムは反対したんだったよな」

「そーよ。あのカタブツを黙らせるのに工夫が要った訳」

「…そうだったんだ」

「あんたの時もひどかったけど、私の時も結構なものだったわよ。

結局、あいつを押し切って仲間に入っちゃった感じだしねえ」

「賛成はしないまま、パーティに入ったのか？」

「すーる訳ないじゃない、あいつが！ いまだに嫌がってるんじゃない？」

気遣うような表情を向けるシドに、リンはそらを見て、鼻で笑いながら続けた。

「えっ…、あんたパーティー組んでるの？」

「うん。半年くらい前から旅してるんだ」

「いいな…私ずっと一人で旅してるの。気楽だけどさあ、もう飽き飽きしちゃって。何か刺激が欲しいな―って
思う毎日よ」

「そりゃそうだろうなあ。…じゃさ、おれらとパーティー組んでみる？」

「うーん、私もそれ考えたんだけどさあ…いきなりじゃさすがに迷惑だと思っし、ちょっと保留ね。とりあえず、
あんたの仲間も見してみたいな」

「そだなー。おれもあいつらに聞いてみないと…」

思いつきやりあった経緯からか、すっかり意気投合したネオンとリンは、揃ってネオンの泊まる宿屋に向かっていた。

そして、宿部屋にいたテルとクロムに対面し…簡単に自己紹介し、事の経過を話してみる。

いい感じで話が盛り上がり、テルも久し振りの同年代の同性との会話に、嬉しそうな表情を見せていた。

しかし、その和やかな雰囲気破るのはやはり、クロムだった。

「…ネオン、お前まさかその女をパーティーに加える気ではないだろうな」

「えっ!？ うん、実はそうしようかなって思ってるんだけど…だ

め？」

クロムの問いにしれっと言つてのけるネオンだったが、彼は無言で首を振る。

「えー、何で…」

「このパーティに、これ以上数は要らない」

少しごねて見せたネオンだったが、いつも通りの無表情で、当然のことのように返答してくるクロムに、虚を突かれたのか口を開けたまま固まってしまった。彼らのやり取りに、テルルはただおろおろと、二人を交互に見守っている。

当事者であるものの外野だったリンは、ひとまずは黙って応酬を眺めていたが…ふと口を開く。

「…クロムだっけ？ あんたの言い分は、“足手まといは要らない” ってことになるのよね？」

「…そう取るなら、それでいい」

「そう。じゃあ、“あんた”の足手まといにならないんだったら、入っていいってことよね」

「……」

リンの問いかけにも、何事も無くやり過ごそうと思っていたのだろうか、思いがけない彼女からの応戦に、クロムは

閉口し：視線をそらして息をつく。
彼のその顔を確認すると、リンはしてやったりという表情を浮かべた。

「商談成立ね！ 安心なさいな、少なくとも、腕吊ってるあんたの世話にはならないわよ。あんたこそ、私の手を
焼かせる羽目にならないように気をつけることね」

「あっ：あのね、これは：」

クロムの、包帯の巻かれた左腕を見て言うリンに、テルルが何かを言いかけたが、既に彼女は勝ち誇ってしまったようだ。
事の成り行きについていけてなかったネオンを見やると、ニカツと笑う。

「決めた。私、あんたらのパーティに入るわ。：楽しくやりましょ
♪」

「なんとなくね、“負けたくない”って思ったの。だって、最初から全否定じゃない？ 何とか見返してやりたくなっちゃったのよ。まあ：とんだ思い違いだった訳だけどさ」

当時を思い出しながら話すリンは、ペロツと舌を出しながら、恥ずかしそうに肩をすくめた。

ネオンとの偶然の出会いを経て：リンは半ば強引にこのパーティの一員となった。

パーティに入ったことで、リンが望んだ『戦いのない生活』は立ち消えてしまったが、リンはそれに勝る『仲間』という存在を得ることができた。

結局あの後早々に、クロムが反対した理由が見えてくる訳だが…それでもリンは、このパーティに加わったことに後悔は全くしていない。

「あの時、ネオンに声を掛けてなかったら…私今頃何やってるんだろうって。そう考えると少し怖くなるの。それぐらい、このパーティに救われたと思ってる」

そらを見上げながらぽつぽつと話すリンが、ふとネオンに振り返る。

「ネオンにはね、ホントに感謝してる。出会ったことにもだし、もちろんあんた自体にもね。今も、これからもずっと、よ」

「…リン…」

リンはベッドの端にもたれ掛かりながら、ネオンに流し目をした。

「……」

言葉が見つからず、少し顔を赤らめているネオンを置いて、リンはひらっと立ち上がる。

「テルルの様子、見てくるわ」

そして軽やかに手を振りながら、リンは部屋を後にした。

シドはリンを見送り、そして、うつむき加減のネオンをうかがう。それに気付いたネオンは、パッと顔を上げた。

「うち、違うんだ、別に、おれそういうんじゃない…」

「…俺、何も言っていないけど？」

慌てふためくネオンに、シドは可笑しそうに笑う。

「シド！！ おれ、本当につ……」

「わかったよ、悪かった。 …ネオン？」

むきになってがなるネオンを、笑っていなしたシドだったが、ネオンは再びうつむいた。シドはやや焦った風に、彼の顔を覗き込もうとする。

「ネオン？ 気に障ったなら——」

「…違うんだ、感謝してるのは……」

「…え？」

ネオンが、うつすらと顔を上げた。その顔を見て…シドはわずかに眉根を寄せる。

赤くなっている訳でもなく、怒っている訳でもなく……ネオンの顔に浮かぶ表情は、『苦悩』だった。

「……おれなんだ。あの時、助けられたのは…おれの方なんだ…」

「……」

誰に言うでもなく、ネオンは独り言のようにつぶやいた。

そしてそのままネオンは、ただうつろげに床に視線を落とし……シドはその様子を黙って見守っていた。

そんな姿勢がしばらく続き……ふいにネオンは顔を上げる。その時には既に、表情が元の明るい調子に戻っていた。

「……もうすぐ夕飯だな！」

「え？ あ、ああ……」

「もう起きれる？」

「ああ、大丈夫だ。みんなのお陰だ」

急にネオンが元に戻ったので、シドはやや面食らったが……彼に合わせるように相槌を打つ。

ネオンが、ニカッと笑った。

「そっか！ じゃあ今日は、5人で食べよっ！」

「ああ」

「一足先にメニュー見てくる！！ あ、あとクロム呼んで来なきゃな！ ったく、どこ行っただんだかな！！」

あははと笑いながら、ネオンはぎこちない動作で足早に部屋を出て

いった。明らかに、カラ元気だった。

「……」

そんな彼を見送ったシドは、何事かを考えふけるようにその場に沈黙する。

「…あんたが気に病むことじゃないわ。ネオンが勝手に悩んでるだけよ」

すると、どこに潜んでいたのか、ネオンと入れ替わりにリンが部屋へ入ってきた。気付いたシドが顔を上げると、彼女は緩やかに笑った。

「でも、君が…」

シドが言いかけると、リンは彼の前を過ぎり、ベッドに腰掛けた。

「…軽率だったな…あんなこと、言うんじゃないかった…」

聞こえるか聞こえないかの声でそうつぶやき、リンはシドに振り向いた。

「ネオンにはね、いつも笑って欲しいのよ。パーティに入ろうと思ったのも、単純にあのコの笑顔を見ていたかったからっていうのがきっかけだったし。だからこうして、剣から離れてる間くらいは…何も考えないでいて欲しいの」

リンは、自分の変化に気付いていないようだった。が、シドから見

た彼女の表情は、言葉を重ねることに険しさを増していていた。

「忘れさせてあげたい。過去も、今も、ネオンの……、あっ」

そこまで口から流れると、リンは自分の言動にハッと気づき、我に返ったようにシドへ焦点を合わせた。

シドが、心配そうに彼女を窺っていた。

「…リン？」

「え、ごめんっ…何でもない。今の話、忘れちゃって」

「…ああ」

「…っあー、えと…」

「……」

リンがシドから視線をそらしたのを最後に、二人の間にしばらく沈黙が起こった。すっかり動揺したリンは、努めて何か別の話を考え出そうとする。

「…コートも洗ってくれたんだな、ありがとう」

「えっ？ あ、うん…どういたしまして」

しかし気を遣ったのか、ここはシドのほうから話題を移した。リンは、あからさまにホッとした表情を見せる。

シドは、リンがたたんでおいたコートを探った。

「…あれ？」

「何？　どうしたの？」

探っていた手を止め、シドはリンに振り返る。

「リン、このコートに入れてあったガラス瓶、覚えないか？」

「ガラス？　…あゝゝ」

リンは一瞬動きが止まり、すぐに理解したようだ。ベッドの脇にあった小さめのドレッサーの引き出しを開け、数本の小さな透明瓶を手取る。

「コレ？　洗濯する時に抜いて、そのままだったわね」

「ありがとう」

シドはリンから小瓶を受け取り、コートの胸ポケットにしまった。リンは何となく、彼の仕草を眺めていた。

「…大事なものだった？」

「うん…まあね」

そう言うと、シドはリンにニコリと微笑んだ。その柔らかな笑顔に、彼女もつられて笑う。

「夕飯、だろ？」

「あ！ そうだったわ、忘れてた」

その時にはもう、リンも普段と変わらない様子に戻っていた。
あまり力の出し具合に手加減を知らないリンが、シドの腕をグイグイ引っ張っていった。

「行こ行こ」

「っリンっ…痛い」

…その夜、シドは再び、宿から姿を消した。

2日…パーティ(3)(後書き)

2011/10 一部改変

3日目…パーク街(1)

「――テルル…テルル、」

「…んゝ…?」

次の日の早朝、テルルは珍しく起こされた。

決まっていたも目覚まし役の彼女が、しかもこの、自由奔放・寝坊助パーティのメンバーに、である。

安物の薄いカーテンから透ける、窓の外の朝の日差しに眩みながら、テルルは目をこする。

「…リン…?」

なんとか覚ました景色には、これまたまさに起きしなであろう、リンの姿があった。ふわふわのパープルヘアを

無造作に顔に垂らし、緩やかな寝まき姿で四つん這いになっている彼女の姿は、同性のテルルから見ても艶かしい。

そんな女豹は、どこか気鬱そうな表情を浮かべていた。

「どうしたの? あたし、寝坊した?」

「違って! ねえ、昨日の夜中、起きたりしなかった?」

「しないけど…どうして?」

どうやら、寝坊した訳ではないようだ。ドレッサーに置かれた時計を見ると、まだ6時前だった。

いくら宿の手伝いに出ようと考えていたにしろ、さすがにこれほど早くは起きない。

「…そうよねえ」

「昨日の夜、何かあったの？」

すっかり覚醒したテルルは、改めてリンに問う。彼女が何かに気を揉めているような、落ち着きのない様子だったので、テルルはかえって冷静になっていた。

「うん…私も、寝ぼけてたかもしれないんだけど」

「うん？」

「シドがね…いなくなってた気がするのよ」

「――」

テルルは隣のベッドを確認する。そこにははっきりと、白髪の頭が静かに寝息をたてている姿があった。

「いなかったの？」

「うん…そうだと思うんだけど」

テルルに問われると、リンは返答するものの、曖昧に言葉を濁す。何だか自信無さ気だ。

「よく覚えてないのよ。一度、喉が渴いて起きて…またすぐ寝ちゃ

って。その間に、ベッドが空だったような…」

「戻って来たってこと？」

「…わかんない。見間違いないかなかったかとも思うんだけど…でも…」

「……」

言葉が徐々に尻すぼまりになり、リンは塞ぎ込むように眼を伏せた。そんな彼女を見ながら、テルルも何かを考える

ように押し黙る。何か、彼女を一押しできるような言葉をかけてやりたいところだが、リンの気がかりである問題の

時間に熟睡していたテルルが、事の真相を知るはずもない。

しかし、今の気落ちしたリンを放って置く訳にもいかず…彼女の顔に垂れ下がった髪を、優しく掻き上げてやった。

「でも、まあ…今無事でここにいるんだから、そんなに深く考え込むことはないよ」

「…うん」

「いなくなってたとしても、眠れなかったから少し出歩いてたとか、そんなもんじゃないかな」

「そ…ね」

根拠の無い説得だが、なんとなくリンが納得してくれたので、テルルも少しほっとした表情をする。

「びっくりしちゃった、リンがあたしを起こすなんて」

「あっ…そういえば！　げ、まだ6時前！？　ごめん、何か早く目が覚めちゃって」

「いいよ、もう起きる。多分おかみさん起きてるだろうし」

テルルは、思い出したように伸びをした。

「リンは、二度寝する？」

「うん、そーするかな…あ、」

テルルが振ると、リンはふと思いついてテルルの腕を掴む。懇願するようなまなざしで、テルルを上目遣いに見つめた。
彼女の耳に、小声でささやく。

「――今の話…ネオンとクロムには、言わないで」

「！」

テルルははっと、ベッド横のラグソファへ目を移す。そこはシドが新たに加わった関係で、クロムの寢床となっており、
2人のいる側からはソファの長さに収まりきらない長身の脚だけが、肘かけから突き出しているのが伺えた。
ベッドに背を向けた格好で配置されているため、様子は伺い知れないが…起きている気配は無いように感じられた。

振り返ると、リンはいまだ、スがるような目でテルルへ訴え続けた。
いた。

「…うん、わかった」

一抹の沈黙の後——思い悩むような表情のまま、テルルは小さく頷いた。

それから、何事も無かったかのように朝は始まった。

あまりにいつもと変わらない日常に、テルルは明け方に起きたことが、まるで夢の中であったことのように錯覚しかけたが、パーティメンバーを起こす時にリンから目配せされ、やはり現実のことだったと認めさせられた。

心の内に曇ったものを抱えたまま、テルルは寝起きの悪いネオンを叩き起こす。

「ネオン、いい加減にしなよ！」

「むう… し、しどは…？」

「もうみんな起きてるよ、あんたなんかよりずっと先に！！」

テルルに寢床から引きずり出され、ネオンはのろのろと階下へ降りる。

宿の食堂はほどよくピークを過ぎていた頃らしく、まばらに塞がった席と、食べ終わった皿が無造作に置き去りにされている席とが混在して、食堂の回転が間に合っていなかったこ

とを物語っているようだ。

「片付かないから、早く食べちゃってよ」

「へいへーい」

ネオンを起こしたテルルは、やはり今まで食堂の手伝いをしていたようで、そのまま足早に厨房の方へと消えていった。

彼女を見送ったネオンは、階段を下がりきったところで大きく伸びをし、朝の空気をいっぱいに吸い込む。

「とりあえず、ミートペンネにしようかな♪」

空気と一緒に食べ物の匂いを嗅いで、一気に覚醒したようだ。

トレーとトングを手に、鼻歌交じりでごちそうの楽園へと入っていく。

「よっくもまあ、起きがけでそんなに食べれるもんだわね、ホント感心しちゃう」

手持ちの皿に溢れるほどのペンネを盛り付けていると、横からリンが呆れ顔をしつつ皿の中身を覗き込んできた。

「お、リンおはよー」

「おはよ。なんだかあんたの皿見ただけで、もうお腹一杯だわ…」

オニオンスープ入りのカップを片手に、リンはうんざりしたようにぼやいた。

どうやらリンも、今しがた食堂へ入ってきたようだ。ある程度身支度は整っているが、いつも大きく見開かれている猫目が、どこことなく冴えない。

「…テンション低いね」

「そもそも、朝からそんな上げてられないし」

「まあね。シドとクロムは？」

「あそこ」

リンが顔を向けた方を同じように見ると、隅っこのテーブルで男2人が向かい合ってコーヒーをすすっていた。

会話をしている様子は無い。シドは、時たまクロムの様子を伺うように顔を上げているが、クロムは椅子に横座りし、

宿に置いてあったのだろうニュースペーパーを眺めていた。視線を介そうとする素振りは見せず…はなからシドを

相手にしていないようである。

そんなよそよそしい空気で、まるで相席のように黙りこくっている彼らの様子に、ネオンは内心ハラハラする。

リンが深く溜息をついた。

「ずっとあの調子よ。気まずいっただけじゃないわ」

「…そうなんだ」

ネオンにはなんとなく、リンのローテンションな原因の一端が見えた気がした。

「それでいて、あの2人かなり目立ってるのよね…居心地悪過ぎて、一緒に座ってらんない」

リンは心底迷惑そうに、眉根を寄せながらつぶやいた。

ネオンは首を傾げ、すぐに“ああ”と合点がいく。

当の2人、陰気な雰囲気とは裏腹に揃って容姿が目を惹くだけに、妙に存在感があるのだ。よく見ると、周囲に座る

客の視線が、チラチラと彼らに注がれているのがわかる。

ネオンは、つい先ほどまで張り詰めたような表情で見つめていたのが一転して、可笑しそうに吹き出した。

「なんかおもしろーな」

「なあにが面白いのよ！ 私もう部屋戻るわ、あゝ不愉快っ」

すっかり機嫌を悪くしたリンは、その場でスープをぐいっと飲み干し、奥へ引っ込んでしまった。

頭を掻きながらリンを見送って、ネオンは皿の御馳走ピラミッドを更に大きくしていった。

ネオンは山盛りの皿を両手に、問題のテーブルへと近付いていく。

「おっはよー。よく寝れたか？」

彼の元気の良い声に、シドは振り向いて笑顔を見せた。

「おはよう。うん、ぐっすり眠れたよ」

「そかそか」

と、笑顔を返しつつ、ネオンは横目でクロムを確認する。ネオンが来た時に少し視線を向けたようだが、彼は依然姿勢をそむけたままだった。

ネオンは少し息をついて、会話を続けた。

「なあ、今日暇ならどこか出掛けないか？　ブラブラっとさ」

「街中を？」

ネオンは2人に投げかけたつもりだったが、シドだけ反応を返す。

「うんうん、リンも多分予定無いだろうしさ。テルルは…どうかわかんねえけど」

「テルルはずっと宿の手伝いをするつもりなのか？」

「んー、あいつ家事と金が好きだからさ。あ、今のは内緒だからな！」

ネオンが慌てた様子を見せると、シドはクスリと笑った。

「働き者なんだね」

「まあなー…おっと」

突っ立ったまましゃべり続けていたせいで、手元がおろそかになり、皿がグラッと傾く。

山盛りになったペンネのミートソースが、ネオンの顎に付いた。

「あう」

「あゝ」

ネオンとシドが同時に声をあげる。慌てたネオンは、顎を袖で拭きうとする。

「あ…」

「台拭きを使い」

シドが腰を浮かしかけたところ、横からポイツと台拭きが飛んできた。

「むやみに服を汚すな」

ネオンの様子を視界の端で捉えていたクロムによるものであった。

「だって手が…」

「まず皿をテーブルに置け」

「ううう」

「……」

手順を掴めなくなってしまったネオンに、業を煮やしたクロムがため息混じりに席を立つ。台拭きを手に、ネオンの顎を拭ってやる。

ネオンは恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべた。

「へへ、サンキュー」

「……」

一連の様子を、シドは少し驚いた感じで見ていた。ネオンとクロムが、その視線に気付く。

「何？ シド」

「いや…なんだか、親子みたいだなあって…」

「ええっ!？」

「うん、なんかこう…クロムがネオンにしてる仕草が、ね」

予想だにしないことを言われ、慌てるネオンがクロムへ振り返ると、クロムは既に席を立ち、何も言わずにテーブルから離れていった。

「え、ちょっと…」

「ごめん、機嫌損ねることを言ってしまったみたいだ」

クロムを見送ると、シドは困ったような笑顔を見せる。
ネオンはきちんと席に座ると、シドに向かって首を傾げた。

「親子って…」

「『親子』は言い過ぎたかもしれない。でも、彼は君のことをとても気に掛けているように見えるね」

「…！」

ネオンが理解できたのを把握すると、シドは少し視線を落とし加減にして続ける。

「彼だけじゃない、リンもそうみたいだ」

「う、うん…」

「君は、とても大切にされている」

ネオンは返答に困り、自分の手元へと視線をずらした。

普段はあまり自分では気にしないことだけど、第三者から改めて言われると、自分の置かれている状況が人と違うように思えてくる。

自分は何故『大切』にされているんだろう。

無鉄砲だから？ 剣が弱いから？ もちろんそれらも一因ではあるけど…避けては考えることのできない大きな理由が、ネオンの胸中に影を落とす。

「いや、だからどうだと言うことじゃないんだけどね」

何も言えずにネオンがうつむいていると、シドがあっさり話を切った。

「良いパーティーだって、ね」

「あ…」

ネオンが顔を上げると、シドは笑顔を見せた。

「うん…うん、良い奴ばかりだよ!!」

「そうだな」

「もちろん、シドも良い奴!」

「ありがとう」

すっかり気分を良くしたネオンは、ペンをものすごい早さで食べ始めた。

「で、さっきのどうする? どっか行こうって」

口いっぱいに頬張りながら、ネオンは改めてシドに問う。

「うん、いいよ。何もすることが無いんだ」

「やったー! じゃ、リンも連れてこー。クロムは…多分ダメだろうな」

ネオンは残念そうに溜息を吐き出し、シドは困ったような笑顔を作

つ
た。

3日目：パーク街（1）（後書き）

次回更新予定日：2010/2/1

ユニーク500人を記録しました。ご訪問誠にありがとうございます。

亀更新ではありますが、何卒お付き合い下さい。

3日目：パーク街（2）

ネオンが朝食を済ませると、早速街中散策パーティが組まれた。当初の予想通りクロムとテルルが不参加、残りの暇組3人で町へ繰り出す。

ウィンドウショッピングをしつつ、ランダムにブラつき歩いていたが、朝食をまともにとっていなかったリンが小腹を気にし始め、3人は一旦パーク町のメイン・ストリートにある大衆酒場へ落ち着くことにした。

酒場は200人以上は収容できると見える広さがあったが、『昼間』という時間帯からか、奥まで見渡しても客はまばらだった。

リンは2人を適当に座らせると、手早くメニューをめくり始める。

「何か頼むう？ 私、お腹空いちやったわ」

「あ、俺はいいよ」

「ええ？ 何よ、遠慮することないのよ？」

リンが把握している限り、シドは朝からコーヒ一杯しか口にしていないはずだ。ただ気兼ねしているだけと思ったリンは、彼に強引にメニューを押し付けた。

「この中から、なんでも好きなもの頼んで！ 最低一品！」

すると、隣からメニューを眺めていたネオンが、シドの代わりに指

差した。

「おれね、これ！ 『海と山のミックスピザ』」

「ネオンには聞いてないの！ しかも高…っ！」

「いいじゃんいいじゃん、美味そうじゃん」

「いや理由になってないし…てかあんた、朝食食べたばっかじゃない
！！」

「えー、でもおれも腹減った」

「…ありえない」

呆れ顔のリンに、早くも空腹を訴え始めたネオンが駄々をこねる。

「ねー、リンお願い」

「仕方ないわね… テルルには内緒よ？」

「やったー」

泣く子をあやすには、欲しがるものを与えてしまうのが一番早い。
が、教育上良くないし、ジリ貧パーティーの財政担当
であるテルルなら、絶対許さないだろう。常に強気のリンだったが、
ネオンには甘いのだ。

「で？ シドはどうする？」

「…じゃあ、ネオンのから少しもらうよ」

「…悪いわね」

結局、ネオンセレクトのミックスピザを、3人で分け合うことになった。

ほどなく運ばれてきたそれに、ネオンが真っ先に手を伸ばす。

「うめー!!」

「…それは良かったわ」

勢いよくピザを口に運ぶネオンを見やりながら、シドが感慨深げな顔をする。

「ピザなんて、何年振りかな」

「そうなの？」

「ああ。小さい頃は何度か食べたけど」

「ピザつつたら、定番メニューじゃん？」

当然のことのように言うネオンに、シドは小さく笑った。

「『ATOMIA』ではそうかもしれないけど、俺は少し前まで
オリザORIGA』にいたんだ。こういう食べ物は無くてね」

「…おりざっ。」

「国名よ。『ATOMIA』の南にあるの」

首を傾げるネオンに、リンが助け船を出すと、ネオンは感嘆の声を上げた。

「ほえー、そんな国あったんだあ」

「うん。『ATOMIA』に来たのは、つい最近だよ。この町が、この国で初めて着いたところなんだ」

「…へ」

「他にもいくつか国に入ったことがあるよ。…一か所にとどまっているのがあまり好きじゃなくてね」

「これじゃあ出身地がはっきりしない訳よね…まさに根無し草って感じ？」

リンは頬杖をついて納得する。シドは苦笑いを浮かべた。

「君たちは、ずっと『ATOMIA』に？」

シドの問いに、ネオンは大きく頷いた。

「おれローレンって村出身なんだけど、ついこないだまでそこにずっといたんだ。だから…16年くらい？」

「いわゆる『田舎者』よね」

「うっ…別にいいじゃんかー、それにテルルだって同じだぞっ」

からかうようにニヤつくリンに、ネオンは少しむくれてみせる。シドはそれをなだめつつ、リンの方へ視線を向けた。

「リンも、ずっと『ATOMIA』にいたのか？ 旅芸者だったって話だけど」

「うんそうよ。『通国証』発行しなきゃならないでしょう？」

「…そうか」

相槌を入れるシドを見て、ネオンが横から首を突っ込む。

「何で？ 『ツーククショー』って、面倒なのか？」

「面倒って言うか…お金が掛かるの。手続き自体にも一日は拘束されちゃうしね。退屈するわ」

「ふーん」

「でもねー、前々から『ORIGA』は行ってみたいと思ってるのよね！ 海がそこら中から見えるって聞いたの。」

「ATOMIA」はほとんど内陸だから、風景が飽きるのよね」

「確かに、『ORIGA』は海が多い国だね。リンは海が好きなもの？」

「んー、故郷から海が見えたからね、懐かしい感じがするの」

「そうなんだ」

「テルビって小さな町なんだけどね、綺麗なところだったわ」

リンが思い出にふけるようにやや上を向きながら説明し、シドは興味深げに聞き入る。

「そういえば、『ORIGA』は統治者がいないから自由都市が多いみたいね」

「うん：ただそれが原因で、都市間の権力闘争がそこかしこで始まってしまつて。段々と『ORIGA』全域で紛争が激しくなつて、いられなくなつてしまつたんだ」

「：：そうだったの：：荒れてるのね」

「うん。それもあつて、『ATOMIA』へ来たつてところかな：」

「なるほどお」

ネオンやリンには、正直『ATOMIA』外の国の内省はどうでもいい話だったが、

「なあなあ、他の国は？」

「うん、私も聞きたいわ」

少し沈んだ空気の中で話を戻したネオンに、リンが表情を再び明るくして、同調する。

「そうだね、この近辺だと：」

ファウンデニア

「『FOUNDIA』は？ 近いし、行ったことあるでしょ？」

しばらくそらを見て考え込んでいたシドに、リンが勢いよく切り出した。

「……ああ、あるよ」

「あそこは王権国家で、治安は良いみたいじゃない？」

「…そうだね」

「オウケンって？」

再び首を傾げるネオンに、またすかさずリンが注釈を入れる。

「王様がいる国ってことよ」

「そう。国で定められた法と規律が絶対なんだ」

「そんなの、『ATOMIA』には無いよな？？」

「『ATOMIA』も一応王権国家みたいよ。…ほとんど無法状態だと思うけど。あって無いようなものかしら」

「…へえ…」

リンの返答に心底感心したような声をあげるネオンに、リンは溜息をついてみせる。

「ネオン：あんたいくら国外れ育ちだからって、自分の生まれた国のこと知らな過ぎよ」

「だあって、興味ねえもん。知らなくても生きていけるじゃん」

「そう言われちゃ、話が続かないわね…」

呆れたような表情を向けるリンと、なかば他人事のようにそっぽ向くネオンの掛け合いに、シドは笑った。

「でもね、『FOUNDIA』も一度は行きたい国なの。城と城下の街並が、すごく綺麗なんだって…見てみたいわ」

「へー、そうなのか？」

ネオンとリンが、揃ってシドを見た。

「……うん。綺麗だよ」

シドは、少し間を置いて——微かに笑って頷いた。

ネオンらが宿を後にして小一時間後。

朝のモーニングラッシュにてんてこまいだった宿の食堂も、ようやく鎮火し、もちろんネオンの誘いを断ったテルルは、フロアとキッチンの後片付けに追われていた。

しかしテルルは、朝起きてから今に至るまで、始終上の空だった。

身支度をして、一人で早めの朝食を摂って、例のごとく宿の手伝いをしている間もずっと、今朝のことが頭から離れなかった。

シドは、どこへ行っていたんだろうか。

リンが起きていた時間はほんのわずかだろうし、朝はきちんと居た訳だし、特に気に掛けることでもないような気はする。

しかし、最後にリンがテルルに言った言葉がやけに印象に残って、それがかえって、普通なら気にならないようなシドの行動を、なんだか重大なことのよう to 思わせていた。

——ネオンとクロムには、言わないで——

リンは、あの2人に余計な心配をかけたくないから、黙っていてくれと頼んだのだ。

しかし、このまま知らせないで平気だろうか。もし、自分が言わなかったことで何かあったら——

「…っ！」

ふいに軽く肩に手を置かれただけだったが、テルルは上半身を飛び上がらせた。振り向くと、宿主のおかみさんが怪訝な面持ちでテルルの顔を覗いていた。

「大丈夫かい？ あんた」

「あっ…ごめんなさい」

傍目から見ても、テルルの様子は普通じゃなかったらしい。テルル

は初めて、自分が上の空だったことに気付く。

「長旅で、疲れてるんじゃないのかい？」

「いえっ…違います」

「いいから！ あんた元々この客人なんだから。休んでたらい
よ」

「…あ…はい」

おかみさんに気を遣わせてしまい、テルルは半ば強制的に手伝いを
中断させられた。弁解しようと思ったテル
ルだったが、やはり忙しそうに動き回る彼女に、声を掛けるのは気が
引けてしまった。おかみさんの後姿を目で
追いながら、その場に立ち尽くす。

しかして急にやる事が無くなって、テルルはかえって困った。出
来れば何かに従事していた方が、まだ気が
紛れていいのだけど…

行き場を無くし、とりあえず部屋に戻ろうかと考え始めた時である。

「――どうした」

「！ クロム」

ふいに後ろから聞こえた声に振り返ると、階下に降りてきたクロム
が立っていた。テルルは、自分の立ち位置が
彼の行き先を塞ぐ格好になっていたのに気付き、あわてて横にずれ
る。

「ごめんっ…どこか、出掛けるの？」

「ああ」

「そっか。いってらっしゃい」

「お前は。まだ宿の仕事か」

「うん、そのつもりだったんだけど…」

テルルは言葉に詰まり、つい視線をそらす。

「…今日は、もういいの」

何故か、クロムを直視できない。今朝の件で――彼に隠し事をして
いる形になっているからだろうか。

2人に向けてとは言っていたものの、リンは確実に、クロムに知ら
れることの方を懸念していたはずだ。

テルルも、リンのその意味を理解はしている。でもだからこそ、話
すべきだとも思っていた。

そんなことを内で考え、不自然さが表に出ている彼女に、クロムも
気に留めた。テルルの顔を確認するように、
やや首を傾げる。

「具合でも悪いのか」

「ううん、そんなんじゃないから」

しかしテルルは、引きつったような笑顔で誤魔化する。

彼女は、内心焦れていた。本当のことを言いたいのは山々だし、その上で勘違いされることは決して望んでない。

加えて、元来テルルは嘘が下手な性格だった。どうしても表情に出してしまう。それを自分でもわかつているから、

早くこの場を立ち去りたい、そんな気持ちがある。

「…じゃ、あたし部屋に…」

「出るか」

クロムを通り過ぎて部屋へ行こうとしたテルルの言葉を切るように、クロムが言葉を漏らした。

「…え？」

「戻ったところで、暇を持て余すだけだろう」

「えっ…えっ、クロムと、一緒に？」

突然の彼の言葉に動揺するテルルだったが、クロムは無表情で頷いた。

「外に出れば、気が晴れるぞ」

「――」

明らかにいつもと違うテルルの様子に、彼なりに気を遣っているのだろう。

テルルは、自分の顔が熱くなっていくのを感じていた。うつむき加

減に、コクリと頷く。

「…行きます」

「支度は」

「いい！　このままで平気だから！」

エプロンをまごつきながら外し、スカートの埃をパンパンとはたく。そして、テルルの返答を受けて既に宿の外に出かけている彼の後を、慌てて追った。

テルルは、自分の頬にきつく手を当てていた。

…えーい、おさまれっ！！

15歳の純情乙女は、こんな些細なことにも幸せを感じていた。

3日目…パーク街(2) (後書き)

次回更新予定日…2010/3/1

◆登場人物設定 を若干更新しました。

3日目：パーク街（3）

「…うゝん」

テルルは、頭上に広がる雲ひとつ無い青空を見上げ、伸びをした。
この日は昨日の雨で浄化されたのか、空気も澄んで何ともすがすがしい。

「やっぱり、晴れてる日は外に出なきゃだね！ 気持ちいい」

天気よろしく晴れやかな笑顔を浮かべて見せるテルルに、クロムも無言で頷いた。

彼女を外に誘ったものの、クロムが主に用がある所は武具店か酒場かしかない。しかし、どちらもテルルの興味

あるものでは無かったし、かといって彼女の趣味嗜好を知っている訳でもなかった。

よって向かう所は、テルルに一任された。

「じゃあ、町を一通り歩いてみようか！ 何度か来たことあるクロムにも、新しい発見があるかもよ？」

そして、いかにも儉約家の彼女らしい言葉に従って、二人は現在文字通りブラブラ歩いている。

テルルにしてみれば、こうしてクロムと一緒にいることだけで十分満足だった。今朝のことをおざなりにする

訳ではないけど…突然自身へまい込んできたこの状況を逃すという選択肢は、テルルの内には無かった。

それほどに、基本単独行動を好むクロムが、誰かを誘って共にすることは珍しかった。

ついさっきまでウジウジと悩んでいたというのに、現金だなあと、テルルは自分に嘲笑した。

――約半年前に出会った時から、ひた隠しにしているテルルの想いは、常に事件や問題が絶えないパーティーで生活している現状があることで、進展も後退も見せずに一定のラインで保たれていた。

逆に言えば、他にかまけることが無ければ、自分の気持ちがどこまでエスカレートするか計り知れなくもある。

それだけ、クロムに対する気持ちは、テルルの中で占める割合が大きい。

生まれた時から一度も故郷・ローレンから出たことが無かったテルルにとって、生来流浪の旅人だったクロムという

人物との出会いは、衝撃的だった。

生まれた時から根なし草の生活、幼くして両親を亡くし、ずっと一人で旅してきていた故の自立心や自由奔放さ、

野性味、荒々しさ、闘争心。その全てが、家族に囲まれてぬくぬくと、温室の果物のように育てられてきた

テルルにはやり得ない経験が必要で、こと野外生活の術に関しては、今でも真似のできないスキルばかりだ。

彼自身の人柄もあって、出会ってからしばらくは畏怖を感じるだけの存在だった。しかし生活を共にするにつれ、

彼の持つものの全てが無いものねだりの憧れとなり、徐々にそれは別の感情へと形を変え、テルルを支配していった。

はつきりと、“恋しい”と感じたことは無い。常に『尊敬』や『憧憬』が入り混じっていて、自分でも彼をどう思っているのかよく解っていない。

でも…きつと、『彼に見合う自分』になりたいんじゃないかと思っている。

二人の足が、町のメイン・ストリートにある大衆酒場の前に差し掛かった。

「あの三人は、どこかの酒場に入ってるだろうね」

「恐らくな」

「それで、ネオンは絶対、リンに食事をねだってると思うの。リン、あいつに甘いから」

「…だろうな」

概ね、テルルの勘は的中していた。今まさに目の前にする酒場内で、ネオンのランチが繰り広げられている。そんな事とはつゆ知らず、テルルはうなりながら眉を寄せる。

「ねえ、クロムからもネオンに注意してもらえないかなあ？ クロムから言われるのが、一番効くと思うんだよね」

「……」

「駄目か。もう、みんなしてネオン甘やかしすぎ」

落胆の表情でふくれるテルルだったが、クロムはそれきり黙り、街道の方へと視線を巡らせていた。

「お、その若いお二人さん、喉乾かないかい？」

と、ふと横から聞こえた声に二人が振り向くと、いかにもな商人面を晒す店主らしき男が、ニヤニヤしながらこちらへと手招きしていた。

「えと、あたしたちのこと…かな？」

「そうそう、可愛いお嬢ちゃんにはこれはどうかな？ 林檎、葡萄、桜桃…」

「美味しそう」

店主の手にするジュースらしきコップの甘い匂いにつられ、テルルはフラフラと近寄っていく。

「クロムは、何か飲まない？」

興味無さ気に後ろから眺めていたクロムの方へ、既にコップを手渡されたテルルは振り返った。

「えーと、何がいいかなあ、…葡萄？」

「いやいや、駄目だよそんなじゃ！ そっちの兄ちゃんにはコレだね」

テルルの勧めに首を振りながらダメ出しし、店主は代わりにズイツ

とクロムの前に小さなグラスを差し出す。

目の端でその濁った液体を見るクロムに、店主はニヤツと笑った。
テルルは、キョトンとした目でグラスを見つめる。

「…それは、何？」

「『ニンジン』という、異国の根菜をふんだんに使ってあるのさ。
…あとの成分は企業秘密」

「…へえ… …美味しいの？」

「……」

テルルの問いには答えず、ただただ不敵な笑みを浮かべてくる店主に、クロムはあからさまに呆れたような表情を見せ、溜息をついた。

「――！！！」

瞬時、クロムの双眼が大きく見開かれた。全身に緊張が走る。
横目でテルルを確認する。彼女には何も変化が無い。
がしかし、クロムの察知能力は依然、確かな信号を発している。

「――テルル」

ふいにクロムから声をかけられ、呼ばれたテルルは不思議そうに振り返る。

「何？ どうしたの？」

「…用が出来た」

「用？ 買い物なら付き合うよ？」

のん気に笑顔で返すテルルだったが、クロムは首を振る。

「いや、いい。お前はここにいろ。…それか宿に戻れ」

「…え…っ」

真っ直ぐ自分を見る彼の無表情な顔を見て、テルルの顔色が少し変わる。どうやら彼女にも、クロムの意図が見えたようだ。

「…「彼ら」…なの？」

しかし、不安そうに見上げるテルルには返答せず、クロムは既にきびすを元来た道の方へ返していた。
軽く振りかえると、テルルを一瞥する。

「…人のいるところにいろ。一人にはなるな」

「う、うん…あっ…」

何かを言いかけたテルルだったが、クロムは彼女の返答を待たずに、足早に歩き去っていった。人が溢れる
メイン・ストリートの中で、彼の後ろ姿はあっという間にテルルの視界から消える。

「……」

その場に残されたテルルは、呆然と立ち尽くすしかなかった。同じように、先ほどの店主も彼を見送り、フンと息をつきながらテルルを覗う。

「つまんねえ男だなあ、こんな可愛い娘を置き去りにして…大丈夫かい？」

「…うん、ありがとう」

適当に取り繕うテルルだったが…何かを思い詰めるような表情は変わらなかった。そのままクロムの消えていった方を見続け…やがて瞼を足許へ落とす。

…あたし、何て言おうとした？

『…あたしも、一緒に…』

“一緒に”なんて…行けるはずない。行っちゃって…足手まといになるだけ。察することができたって、力にはなれない。そんなの…そんなの…、空しいだけ。

『見合う存在』なんて…今のままじゃ…否、今より進展があったとしても、この先ずっと、そんなものにはなれない気がしていた。

戦う術を何一つ持っていないテルルが、クロムに必要とされる日なんて、いくら待ったって来てくれそうにない。ネオンなら、リンなら…そう思うと、自分の無能さがひたすら情け

なく思えてくる。

いざという時、守られてばかりの自分。頭数には数えられない自分。

それでも、テルルは思う。

パートナーになりたい。

かつて：彼が共にした、あの魔法士のような存在に。

「ふー、腹いっぱい!!」

「もー、食べ過ぎ…」

腹をポンポンと叩き、ネオンは満足気な表情を浮かべる。

リンは依然呆れ、シドはおかしそうに笑いながら頬杖を付いていた。

「まったく：シドの分まで食べちゃうんだから、ねえ？」

「いや、ネオンの食べっぷり見てただけで、なんだか腹が膨れた気がするよ。あ：ほらネオン、口」

「あ、そうそう台拭きだよな、台拭き」

「うんうん、台拭き」

「えー、なあにそれ？」

男連中がクスクス笑いながら話しているのを見て、リンは首を傾げながらつられて笑う。少し酔いが回っているらしい。

「あー、あつつい。ネオン、水頂戴」

酔いを醒まそうと、リンが水のグラスに手を伸ばす。と、腕が手前のグラスに当たった。

コトンッ

「あっ」

倒れたグラスの酒が、シドの服に掛かった。

「ご、ごめーん！ あちやー…」

「あ、いいいい大丈夫」

慌ててリンがシドの服へ手を伸ばすと、シドは笑って手を振る。

「洗面室行ってくるよ。水で洗い流した方が早いから」

「うん」

シドは席を立ち、レストルームのある酒場の入り口近くへと向かった。

クロムは足早に、しかし視線には鋭さを込めて歩を進めていた。さっき一瞬感じた、ほんのわずかな気配。

感じ取るのも困難なほどだったが、既に身体が覚えている、おぞましいほど邪悪な気配。

「影」の、気配。

クロムは、相変わらず顔には無感情さをたたえていたが、内では心臓が高鳴り、さながら全力疾走後のような興奮状態であった。身体中から噴き出しそうになっているものを抑え込むように口を固く結び、平静を保ちながら全神経をその気配へと集中させる。

彼らを居所を掴んだところで、防具も剣も持たない丸腰の自分が、「彼ら」を相手にして何をできるかと問われれば返答に困るところだが、できることならパーティへの接触は自分の手前で留めたい。

何をおいても“ネオンに”接触させることだけは、絶対に避けなければならぬ。

今朝方シドには『親子のようだ』と評されたが…ネオンとクロムの間には、いわゆる師弟関係のようなものができる。

同じ『剣士』という職において、ネオンとはかけ離れた位置にいるクロムは、ネオンの常の目標であった。

加えて、性格などに関しても対照的な面を見せる二人だったので、ネオンは自分に無いものを持つクロムを尊敬し、絶大な信頼を寄せていた。

それは、普段のネオンの行動からも容易に見て取れる。テルルやりンに対しては文句を垂れたり駄々をこねたり

しても、クロムにはほとんど従順である。

しかし、クロム自身はネオンを弟子としてみてはいない。もちろん、ネオンからはそのような位置付けで接して

くるので、彼に合わせる形ではいる。実際、経験も知識も自分より劣るネオンに教えることは多い。しかしそれは

必要に迫られてのことであって、決して望んで『師』の立場にいる訳じゃない。

でもそれ自体を、クロムが利用している部分もある。テルルやリンも『師弟』とみなしている現状、『自分の本心』を隠すのには好都合なのだ。演じていると言ってもいい。

クロムにとってのネオンの位置付けは、実は全く違うところにあった。

ネオンと初めて出会った時：

まだ慣れない剣をがむしゃらに振り回して、危なっかしく立ち回る田舎育ちの少年。人と対峙したことも無い

ド素人の癖、どこからくる自信なのか威勢だけは良く、ひたすら無鉄砲。それでいて、「平気、平気」と大口開けてあっけらかんと笑ってみせる。

『相容れない人間』

クロムは初見で、ネオンをこう評価していた。

毛頭、パーティを組むなんて考えには及びもしなかった。

にもかかわらず、ネオンと一緒に旅をしようと持ちかけたのは、クロムだった。

何年もの間他人との慣れ合いを避け、独りを選んできた彼が、初めて自分から仲間を誘ったのが、ネオンだ。

それだけの理由が、ネオンという人間にはある。

「彼ら」の気配に導かれるように歩き回っている内に、クロムは町の外れに近い、薄寂れた路地裏付近に辿り着いていた。

「――」

主要な通りから大きく離れているせいか、道も十分に舗装されておらず、建物も半壊し、周囲に人が居る気配は全く無い。真昼間だというのに、路地の背後にこんもりとそびえる街境の林が陽を遮り、景色もなんとなく薄暗く感じられた。

クロムは眼光の鋭さを一層研ぎ澄ませ、辺りを隈なく見渡す。

「……」

しかし、感じ取れていた気配はいつの間にか、霧散するようにかき消えていた。再びどこかへ潜伏したのか……

唯一の手掛かりが無くなった今では、それを探す手立ても無い。

――『「左の牙」、せいぜい命を賭するがいい。我らの刃が届かぬように』――

クロムはしばらく動きを止め……先ほどのメイン・ストリートへと戻っていた。

「――遅いね…」

シドが席を立て、どれくらい時間が経っただろうか。

「手間取ってるんじゃないの？　かかったのブランデーだろ？」

「うーん、そうだけど…もう20分は経つわよ？」

すっかり酔いが醒めたリンは酒場内に掛かる壁時計を確認しながら、落ち着きのないそぶりを見せ始める。

リンの気掛かりを流しかけたネオンだったが、全く気にならない訳でもないのか少し腰を浮かして、酒場内を見回す。

しかし見渡せる範囲には、シドの姿は確認できない。まだレストルームに籠っているのだろうか。

「おれ、ちょっと見てくるよ」

「うん、お願い」

ネオンは席を立ち、レストルームへと向かう。

レストルームはフロント脇の奥まったところに位置し、フロントとレストルームへ続く通路の間に、目の粗い格子状のついたてが造られていた。真っ直ぐ通路へと折れたネオンだったが、不意に聞こえてきた大声に立ち止まる。

「聞け！！　それができぬからお主に頼んでいるのだから！！」

…なんだ？

荒ぶるような大声は、フロントから聞こえた。ネオンはついたて越しに声のする方を窺う。

フロントに見える光景——10人くらいの団体が固まっているようだったが、なんとも異様なたたずまいだった。

全員が全員、頭のとっぺんからつま先まで、すっぽりとくすんだ茶色いフードコートで覆われ、フードが深くて顔もよく見えないといういでたち。

「——!!」

ネオンは半ば条件反射的に、ついたてから身を隠した。瞳孔が見開かれ、冷や汗が流れる。

手足がガクガクと震え、鼓動が一気に高鳴る。

まさか…まさか

「——おやめなさい」

そこへ、再び不意に耳に届いた声に、ネオンの緊張の糸がやや緩んだ。

「その者の言うことも、もったもです。我々は事を密にしすぎました…もう時が迫っています、話して差し上げなさい」

聞こえたのは、若い女性の声。心地よいトーンで柔らかく、それでいてしつかり通る、凜とした声。

どうやらフード連中の中に一人だけ女性が混じっているようで、それを取り囲むように、周りのフードが位置しているようだった。

まだ警戒しつつも、ネオンは再びついたての向こうを窺うことにした。

制された一人のフード男が、女性と思わしき人物の方へ恭しくお辞儀をすると、話し相手だったらしいカウンター内の
マスターに向かって話を続け始める。

「…我々は、ある人物を探している。調べでは、今はこの街に滞在していると」

「旅人かい？」

「そのようだ。各地を転々としている。『ATOMIA』へは最近入ったらしいが」

「名前は？」

「それは…極秘だ。そもそも偽名を使っている可能性が高い」

「なるほどね。じゃあ、何か特徴とかはないのかい？」

「…なんだ、ただの人探しか。『奴ら』が探すのに、誰かに尋ねるなんてことはないだろうしな。」

そこまで聞くと、ネオンはやっと安堵する。と、ふとフロントから目を離すと、酒場の外の街道に白い頭が通るのが見えた。

「へ、シド？　なんで外に？」

慌ててネオンはフロントを通り過ぎ、外へ出る。見渡した先の視界

の中で、白い頭がどんどん小さくなっていく。

「…っおいシド、どこ行くんだよ!？」

「――？」

フードの一人…中心に位置していた女性が、外から聞こえてきた大声に、コートを揺らす。

「どうなさいました、イレーナ様」

「…いいえ、なんでもないわ」

「ふーん…そういう特徴の奴なら、あそこの宿に泊まってる若造かなあ」

女性を取りなしたところで、マスターがそらを見上げながら言葉を漏らす。女性の方を見ていた男が、再びずっとマスターに詰め寄った。

「! 思い当たる者がいるのか!？」

「そう興奮するなよ…そこまで珍しい奴だと、そうそういないしな。昨日、雨の朝に野垂れ死にしそうだった

ところを担ぎ込まれてたらしくてな。大騒ぎだったもんで俺も見に行っただってところよ」

3日目…パーク街(3) (後書き)

2011/11 一部改変

3日目：パーク街（4）

程なくしてテルルと分かれた場所まで戻ってきたクロムは、ゆるりと辺りを見渡す。

戻っては来たものの、彼女があの中の時のままここに留まっていることは、あまり期待していない。

彼女にも『異変』が伝わったようだったし、いち早く宿へ引き返しているかもしれない。

ひと通り目に見える景色を一巡し、やはり姿が無いことを確認する。

「——おい、この娘なんとかしてくれ！」

すると、戻ろうとしかけたところで、後ろから男の悲鳴が聞こえてきた。なんとなく振り返ってみると、声がした方向には小規模の人だかりができていて、何事かで取り込んでいるようだった。

「どうしたんだ、病人かい？」

「違うよ、何だか飲ませたら…急に倒れこんじゃってよ」

クロムの顔が、サッと青ざめる。 …まさか——

胸騒ぎを感じて足早に近付き、群衆の頭の隙間から中心を覗き込んでみる。

「……」

予想通りの光景に、クロムは軽い眩暈を覚えた。

人だかりの中心の、周囲の視線をめいっばいに浴びている人物は：クロムのよく知る者だった。

「――テルル」

テルルはまるで部屋のベッドに横たわっているように、実にリラックスした面持ちで地面に寝転がっていた。

群衆は彼女を取り囲んでいるものの、何か越えてはいけない線が引いてあるかのように、彼女から数歩分の距離を置いて綺麗な輪を作っていた。

本気で他人のふりをしたいと思ったクロムだが、まさかこのまま放って離れる訳にはいかず：諦めて群衆をかき分け、中心へと足を運ぶ。

この喧騒の中にいてもなお、テルルは顔を若干赤らめ、幸せそうに寝入っていた。クロムはそんな仰向けに転がる彼女の傍らに片膝を付き、息のにおいを嗅ぐ。

：微かにだが酒臭い：

「つと：兄ちゃんどこ行ってたんだよ、こっちは大変だったんだぜ？」

そこへ、悲鳴の主である男が近寄ってきた。見るとそれはテルルと分かれた時にいた、あの飲料店の店主であった。どうやら彼が、事の当事者であるらしい。

「：何があった？」

「俺は何もしてないさ！ この娘が、さっき渡したジュース飲んだだけだよ」

「酒だったんだな」

「そ、そうだけど…こんなもの子供の飲み物だぜ。数滴リキュールを垂らして入れたただけだ、酒と言えるか!？」

「…言えんな」

店主が声を荒げるのはもつともだが、テルルの下戸っぷりは彼ら一般人の常識を遥かに逸脱するものだった。

酒と名の付くものなら、飲めば例外無くその場に突っ伏してしまうし、そも酒の匂いだけで目を回し、酔いを訴える。

そうとは知らずに飲ませた店主は、予想だにしない展開に焦り、苛立ちの矛先をクロムに向けるしかなかった。

「とにかく、今すぐ何とかしてくれ！これじゃ商売にならない！」

クロムは迫る男をいなして、テルルの頬を軽く叩く。が、完全に寝こけた彼女が起きる気配は一向に感じられない。

何よりもまずこの場からすぐに立ち去りたいクロムは、テルルを担いでいくしかなかった。

「…すまん、少し道をあけてくれ——」

「おい、邪魔だ！往来でゴミが群れてんじゃねえぞ!!」

と、クロムが群衆を撒こうとしたのとはほぼ同時に、外側からそれらを片っ端から崩す者達が現れたようだ。

しかし助かったと思ったのも束の間、人だかりを蹴散らして、クロ

ムと鉢合わせになった者共は、見覚えのある顔だった。

「あ！ てめえ！！」

「忘れもしねえこのスカした顔っ…」

クロムも一応記憶の片隅に残していた彼らは、いつぞやかリンに絡んでいた粗野な男連中だった。

災難は重なるものである。

抱き起そうとしていたテルルを再び寝かせ、クロムは息をつきながら男達を見上げる。

「…今立て込んでいる。お前達の相手をしている暇は無いんだが」

「うるせえ！ 今度は逃がさねえぞ、きっちり落とし前付けてやる」

「ああん？ 何だこいつ、こないだと別の女連れてやがるぜ」

「け、見せつけてくれやがるじゃねえの…！」

何事も無くかわそうと思ったのに、クロムの意図しないところで一方的に男達の方が息巻いてしまったようだ。

初めに逃げていったのは、彼らの方だったような覚えもあるが…今はそんな揚げ足を取っている場合ではない。

よくよく彼らの顔ぶれを眺めみると、最初に会った時の覚えのある顔は面子の一部に過ぎないようで、それなりに大きなグループを作っていたようだ。最終的には、十数人がクロムに対するように頭を連ね、囲いを作っていた。

厄介な輩と面識をつくってしまったと、リンを恨めしく思う。

しかしどんな形であれ、彼らの相手をしなければこの場は収まりそうにない。

…やるしかないのか…

クロムは重い腰を上げる。

「待てよ、こいつは俺が相手になるわ」

すると、囲う男達の間から、クロムへ向かって真正面から立ちはだかる者が現れた。クロムより2回りくらい縦横に

大きく、人足なのだろうか、日に焼けて黒光りした筋肉が隆々としている。明らかに他の男連中とは一線を画す

風体のその男に、クロムも少し気を止める。

男は品定めでもするかのように、彼の頭から足先までを眺めると、フンと鼻を鳴らす。

「お前、見たところ商人や人足じゃ無さそうだな…さしずめ剣士か？」

「…ああ」

「…ふーん」

男の顔が、若干歪んだ。

「『剣士』ってのは、どうもいけ好かねえ。大した働きもしないのに、人の上に立った気にいるような屑ばかりいやがる」

言いながら男は、クロムへと数歩詰め寄る。話しながら、自分の射

程内に収めようとしているようだ。

「得物無しか…丁度いい。前々から一人や二人ねじ伏せてやりたい
思ってたが、絶好のチャンスが来たってところだなっ」

「！」

しゃべり終わると同時に、男は拳をクロムに繰り出して来た。ある
程度予想をつけていたクロムは、眼前に迫る
それを一段上回る素早さでかわす。が、間髪入れずに男が二撃目の
蹴りを振るった。

「！　っ…」

クロムはそれも、間一髪でかわし…体勢を整えた彼のこめかみに、
かすかに血がにじむ。

「おおおー！」

周りの男共は、一斉に沸き立った。どうも個人的な感情があるらし
い筋肉男は、黒い肌から妙に白い歯を覗かせ、
ニタリと嘲笑う。

「……」

つくづく理不尽な恨みを向けられているような気がしてならないが
…クロムの眼にも、ようやく鋭さが込められる。

いつの間にか、一旦蹴散らされた群集が再び集まり、クロムらを囲
むギャラリーと化していた。いけだのやれだのと、

好き勝手に盛り上がりを見せる。

クロムは内で舌打ちをする。今の自分は、あまりにも目立ち過ぎている。避けられないならせめて、場所を変えたい。

「――ドーって…あれ？　クロム何してんの？」

が、クロムが口を開きかけた時を同じくして、背後から聞き知ったトーンが不必要に良く通る大声で乱入してきた。

先ほどからシドを探し歩いていたネオンが鉢合わせたのである。

もう溜息しか出ない。クロムは幾分か肩を落しながら、振り返る。

「…お前こそ、ここで何を…」

「あ、おれ？　シド探してるんだよ。見なかった？」

「…知らん」

「ちょっと待て。お前ら仲間か？」

と、そこに筋肉男が会話へ割って入る。

「？　…そーだけど」

空気が読めず、状況がよくわからないネオンだったが、クロムと男連中を交互に見、何かトラブルが起きていることだけは理解できたようだ。

声をかけてきた男を睨む。

「じゃ、お前も剣士か？」

「だったら何だよ」

ネオンの回答を聞くと、他の周りにいた仲間らと顔を見合わせ、大口開けて笑い飛ばした。

「最近の剣士ってのは、随分と貧弱なんだな？ どこをどう鍛えてるんだか、こんな奴らが俺達より高給取りたあ、怒り通り越して笑えるわ！」

「んだと!？」

「ネオン！」

あからさまな男の挑発に、ネオンは一瞬で啖呵を切った。クロムの静止を押し切って、両者の中心へと躍り出る。

「貧弱かどうか、思い知らせてやる！ 後悔すんなよ」

「上等だ。おい、お前らでこのガキの相手してやれよ！ こっちは俺一人で充分だ」

筋肉男のひと声で、後方にいた仲間十数人が一斉にネオンへ襲い掛かる。ギャラリーが喚声と悲鳴と共に沸き立った。

「ガキじゃねえ!!」

ネオンは怯みもせず、手近にあった支え棒を手に、真っ向から相手の群れへ突っ込んでいく。

手のつけられない鉄砲玉と化したネオンを、最早見送るしかないク

ロムだったが…

「おい、こっちはもう始まってんだぞ」

その後方で、やる気満々な巨男が、バチンと拳を鳴らす。

…どうとでもなれ。

「…んー……？」

テルルの霞んだ視界に、青い空と大勢の群集が映った。と、舞い上がる砂塵に、少しむせる。

「な、何…？」

テルルは目の前に広がる光景に、驚きつつ覚醒する。意識が戻ると同時に周囲の喧騒が次第に伝わってくるが、やはり状況は飲み込めない。

え、えーと…クロムと分かれて、とりあえず渡されたジュース飲んで、それから…、……

そこから先が思い出せない。そしてやっと、自分が地面に寝転がっていることに気付く。

「え…え、どういうこと…!?!」

気を動転させながら、砂煙の先を伺う。そこでまた驚愕する。

「ネオン…と、クロム!? 何してるの!!?」

「っんのガキ!!」

男連中は、概ねネオンに引っ掻き回されていた。

支え棒を振るい、ネオンはひしめく男共の群れの中で縦横無尽に飛び回っている。機敏な動きをなんとか目で

捉えることはできる。が、気付いた時には当てられた後だ。交える隙が見つからない。

連中は手出しもできず歯噛みするだけだったが、呻いている間にも仲間はどんどん沈んでいく。

ネオンは鼻を鳴らす。

「相手になるんじゃないのかよ」

軽量であるネオンの特技は、力技より瞬発力と脚力を生かした翻弄攻撃だった。とにかく残像を残すが如く、

動きが素早い。そして素早いだけでなく、多様な角度から相手を攻める。手を変え品を変え、常に相手が

先読みできない攻めを見せる。

これらは、クロムとパーティを組んでからこっち半年で鍛え続けている技である。力量に欠けるが瞬発力はある

というネオンの性質を生かし、クロムが教え込んだ。

ネオンは当初、クロムのような大剣を遣う剣技に憧れ、彼の指南に

不満することもあった。しかしクロムの根気強い説得と、度重なる危機的状况を経験する中で、今では自身の特性を理解し認め、それらを伸ばす方向へと考えを見定めている。

リンと会った時の段階では、まだ実戦には程遠い完成度だったが、今ではそれなりに対人戦でも使いこなせるレベルになっている。彼らのような一般人が束でかかってきても、後れは取るようなことは無かった。

もちろん、素人相手に戦闘術を振るうことは暗黙のルール違反ではあったが：相手から挑発されたのなら話は別だ。

そんなネオンの指南役・クロムの方も、それなりの収束を見せていた。

仲間が一人また一人と倒されていくのを横目で見、筋肉男は唸る。

「くっそ！」

悔しがる間にも、クロムの蹴りが飛ぶ。男は憤怒の表情を彼へ向け、両腕を振り回して間合いを取る。

得物が無い今のクロムは、体術のみで巨男を相手していた。男の厚い筋肉の前では彼の打撃は致命打にこそ

なり得なかったが、その一つ一つのダメージは重く、且つ確実に男の隙を攻める。逆に男の方は、最初は威勢が

良かったものの、その動きは攻撃を受けるにつれて急激に鈍くなっていた。威力とそれなりの機敏さは

あったようだが、重い体が仇となり、戦闘が長引くにつれて精彩を欠いていく。既に力任せとなっている

男の攻撃はクロムに当たるはずもなく、ただ無駄に空を切る。

クロムは発狂しそうな男の様子を見て、一旦距離を置く。

「頭を冷やせ。…これ以上やっても無駄だ」

「うるせえ!!!」

「――ねえ」

ふと、怒声を吐く男の背後から、声が掛かる。

既に大量の仲間全員を地に伏せたネオンが、こちらを退屈気に見やっていた。

「もう諦めなよ。あんたじゃクロムに敵わねえって」

「じゃらくせえー!!!」

男がネオンへ勢いよく振り返り、雄叫びを上げながら迫る。

「ほら、よそ見してっと危ねーよ」

「!」

しかし男が気付いた時には、眼前に宙を飛ぶクロムの左足が迫っていた。そのまま、クロムは男の首に決定打を与える。

「――」

首の向く方向がおかしくなったまま、スローモーションのように、男の巨体が地面に崩れ落ちる。

……

ギャラリーはしばらく呆けたようにその場を見守っていたが…次の瞬間、突如湧き上がった。

割れんばかりの歓声と囃し声に囲まれながら、ネオンはクロムへ歩み寄り、上目遣いに彼の顔を窺った。

「…やっぱまずかった？」

クロムはやはり、眉根を寄せていた。

「当たり前だ。目立つ真似をするなど何度言えばわかる」

「わーかってるけどさーあ。…で、結局何してたの？」

「……」

「……」

テルルは寝かされた場所に座り込んだまま、一連の騒動を見守っていた。

気が遠くなりかけながらも、眼前で起こった事態を整理しようとする。

とにかく、ネオンとクロムが収束つけたみたいだけど…どうしてあの2人が暴れることになったの？

「――大丈夫？」

と、不意に後ろから肩に手を置かれる。テルルははっと振り返った。

「…シド！」

「強いんだね、2人共」

シドも一部始終を見守っていたようだ。テルルが驚いたような顔を向けると、にっこり笑う。

つられてはにかみ笑いをするものの、テルルは内心穏やかではなかった。

「立てる？」

「うん、ありがとう…」

シドに支えられながら立ち上がり、ほこりをはたく。

「テルルはここで倒れてたみたいだけど…どうしたの？」

「…う…わからない。何かあったとは思うんだけど…」

とりあえず、クロムは無事。ネオンも無事。でも、説明のつかない自身の状況。

「シド！ あたし…ここでどうしてたのかな！？」

テルルは切羽詰った表情で、シドを見上げた。突然の予想外な質問返しに、シドも虚を突かれる。

「えっ！？ お、俺もそれを聞いてるんだけど…」

「ああっ、そうか…そうだよね」

「テルル、落ち着いて？ あの二人なら何があったのかわかるかも…」

「あ、シド…！」

と、またしても場違いな大声と共に、ネオンが近付いてくる。

「どこ行ってたんだよ、探したんだぞ？」

ややご立腹なネオンに、シドははっと気付いて、それから少し困ったような笑顔を見せた。

「ああ…、すまない」

「あれ、テルルと一緒にだったの？」

ネオンが傍らにいたテルルへ視線を移すと、彼女はプルプルと首を横に振った。シドが慌てて訂正する。

「いや、違うんだ。その…落し物をした人がいて、届けようと追っていたんだよ」

「そーだったの？ 全然帰ってこないからよ…」

テルルは2人の会話を横目に、クロムへと近付く。彼は群集の視線を避けるように、街道の隅にとどまっていた。

「あ…の…クロム？」

クロムは視線だけをテルルへ向ける。テルルは視線を合わせず、やや下向き加減にしどろもどろ切り出す。

「この騒ぎって…もしかしてあたしが原因？」

「！ …いや、違う」

「…本当に！？ だってあたし、どうしてだか道に倒れてて…何があったかよく覚えてないし、起きたら…二人が…っ！」

「…落ち着け、テルル」

テルルは気を動転させ、思いつめた表情でクロムを見上げた。しかし混乱を極める彼女の頭に、クロムの落ちるような低い声が響く。

「あれは先日も絡んできた奴らで、さっきまた偶然会ったから相手せざるを得ない状況になっただけだ。

お前は一切関係無い」

クロムは表情こそ無かったが、テルルの目をしっかりと見て、言い切った。若干息を荒げていたテルルだったが、彼のロートーンが脳内を冷やし、徐々に興奮が収まっていく。

「…そ…れなら…いいんだけど」

しかして、テルルの疑問は消えない。

「…じゃあ、どうして倒れてたんだろ…」

「! ! つそれは…俺にもわからん。…怪我は無いんだろう?」

「うん」

「それならいい。気にするな」

ややしどろもどろに、苦しい物言いをするクロムだった。

「…わかった。それじゃあ、〔彼ら〕は…?」

「!」

冷静になったテルルは、先ほどのクロムの動向を思い出していた。

彼女の言葉に、クロムも一連の騒動で薄れかけていた記憶を戻す。

真っ直ぐな視線を向けるテルルを見返し、クロムは暫時黙っていたが…やがて息をつく。

「——気配が消えた。今は何も感じられない」

「そう…」

「この町付近に潜んでいることは確かだな。油断は出来ん」

そう言いながら、クロムは周囲を見渡す。テルルはそんな彼の仕草を見上げていたが…ふと手元に視線を落とした。

「…うん、わかった」

「ちょっとおゝ、何してんのよあんだ達？」

と、気だるそうなトーンにテルルとクロムが振り返ると、リンが腕を組み、不服そうな顔でこちらを睨んでいた。

シドが消え、ネオンが戻らず、そのまま店ですっかり待ちぼうけを食らって、仕方無しに探し回っていたようだ。

ネオンとシドははっとして振り返り、ばつが悪そうにする。

「あー、ごめん、リン…」

「シド追っかけてたらさ、クロムがおっさん達に絡まれてたんだもん！ 何でかは知らねーけど」

「はー？ って何こいつら、一昨日ナンパしてきた奴らじゃない！」

「…え！？」

リンの言葉にネオンとテルルが同時に驚き、双方クロムへと振り返る。クロムは苦い表情で、顔を背けていた。

「どういうこと…？」

「えー？ 酒場で声掛けられて、そのままくっついてきてさ。人相悪いし何かしつこかったから、丁度良かったクロムに追っ払ってもらったのよ」

リンはヘラっと言ってのけた。

「お陰で巻き添えを喰らったんだが」

クロムがじとつとリンを睨む。

「あ、何もしかしてあんた、因縁つけられちゃったの？　それは災難だったわね♪」

「ていうかさ、あれくらいの奴らならリンだけで十分じゃねえ？」

ふとしたネオンの横槍に、笑い飛ばしてたリンがキョトンとし、ついで溜息をついてみせた。

「っはあゝっ、ネオンわかってないわねー。　誘われた女は、夢げにしおらしくしてるモンなのよっ」

「??　…ふうん？」

リンの高度なご教授にひたすら首を傾げるネオンの横で、テルルは呆れたように脱力する。

「…これが理由というわけか…」

でもそれが原因であって、安堵した気持ちでもあった。しかし依然としてそれとは結びつかないだろう自分の行動に、やはり納得のできないテルルであった。

3日目…パーク街(4) (後書き)

2010/4/7 手直し再更新

次回更新予定日…2010/5/1

3日目夜…邂逅（1）

ガサツ…

その夜未明、宿の一室で、一つの影が動く。

おもむろに寢床を抜け出し、同じ部屋に眠る他パーティメンバーに気付かれないよう、静かに身支度を整える。

コートを羽織り、ソードを腰に差し…窓を開いて、ヒラツと階下の路面へと飛び降りた。

「――シド、どこ行くの…？」

そのまま街道へと足を進めようとしたところ、後ろから小さく声を掛けられた。

「！ ……ネオン…」

振り返ったシドの視界に、ネオンの姿が映る。頼りない街灯と月明かりだけが照らす暗がりの中、あまり夜目の

利かないシドにはぼやけてはつきりとは判らないが、こちらを見つめるネオンの顔は意外にも無表情で…

しかしどこか強張っているようにも見えた。

余程驚いたのか、シドはしばらく固まったまま沈黙していたが…やがて口を開く。

「…びっくりしたな、起きてたのか」

「うん」

「…そうか」

「昨日も、起きてた」

「……」

シドは何ごとかで誤魔化そうと考えていたようだが、ネオンの言葉を聞き…諦めたように息をつく。

「…このままどこかへ消えるつもりはないよ。ただ…俺には、どうしてもやらなければならないことがあるんだ」

「こんな時間に？」

「ああ」

「……」

努めて優しくなだめるように声をかけるシドだったが、ネオンの顔は段々と、思い詰めたような表情に歪んでいた。

「…朝には必ず戻ってくる。だから、ネオン…」

「おれも一緒に行く」

「え」

思いがけないネオンの返答に、シドは幾分面食らう。暗がりの中よく目を凝らすと、ネオンはソードを背負い、

いつでも出掛けられる身支度を済ませて、そこに立っていたのだ。
ネオンは決意を込めた眼で、シドを真っ直ぐに見上げていた。

「おれ、決めたんだ。シドの力になるって。このパーティにシドを入れたいってみんなに話した時、そう言ったんだ」

「…ネオン」

「事情はわからねーし、足手まといにしかならねえかもしれないけど、お前を一人にしておきたくねーんだ。

ホントは…止めたいけど…行かなきゃならねーんなら、おれもお前に付いてく」

「……」

二人はしばらく、互いに見合っていたが…やがてシドが、諦めたように首を振った。

「…わかったよ。でも、引き返すことはできない」

ネオンはゆっくり、でもしっかりと頷いた。

シドに導かれるようにしてネオンが行き着いたところは、例の北の森だった。

薄寂れ、単にだっ広いだけの冴えない昼間の様相は完全に形を潜め、夜の森は暗闇の中にあるように更に黒々しく、

入るものを飲みこむような佇まいで、眼前に静かに広がっていた。昼間は鳥らしき鳴き声も時たま聞こえていたのだが、今の森は全くの“静”で、耳鳴りがするくらい無音だ。

風も無く、じめつとした重たい空気が、身体にまとわりついてくる。

ネオンは、夜闇に浮かぶ森を見上げ、シドへと振り返った。カンテラの灯りに照らされたシドの顔が、柔らかに微笑う。

「お前と会った場所だな」

「うん…ここが…?」

「そう。あの時も、同じ目的でここに來ていた」

シドはそう返すと、ためらいも無く森に足を踏み入れる。ネオンは怖々と黒い森を見上げ…サクサク歩いていく
シドを慌てて追った。

「木の根に氣をつけて」

「うん」

シドの動作は慣れた風で、行く方角に少しの迷いも無かった。手に持つカンテラを足許に近付け、その灯りを頼りにネオンはやや下方を向き、彼の後をなぞるように歩く。

「…昨日、付いてこなかったのはどうして?」

「!」

ふと漏らしたシドの言葉に、ネオンは無言で顔を上げる。シドは前を向き、歩を進めたままネオンの返答を待っていた。

「…昨日は…シドがいなくなった後すぐに、リンが起きたみたいだったから。シドもすぐ戻ってきてたし…」

「そうか。うん…昨日は、途中で行くのを諦めたんだったな」

そう言うと、シドは自分の腕を引き寄せるように、固く抱いた。

ネオンはその彼の後姿が、何だか痛々しいように見えて、思わず視線を背ける。

「…お前が何してるのか…知りたかった。知りたい…けど、おれからは何も聞かない方がいいんじゃないかって、思った」

ネオンはその白い後頭部に、ぽつぽつと言葉を投げかけた。

これまでのシドの様子を見てきて…彼が普通の旅人じゃないことは理解できていた。何か、重大な問題を

抱えてるんじゃないかとも常に考えていた。

でも仲間に誘えば、意外にもこうしてすんなりパーティの一員になった。その彼の意図を、ネオンなりに

推し量っていたのだ。

そのまま黙ってしまったネオンに、シドは軽く振り返る。

「…隠しておきたい訳じゃないんだ。そういうものではないしね。ただ…関わらせてしまうと、必ず君達にまで

被害が及んでしまうから。…俺だけの問題では済まなくなってしまうから」

「……」

「でも…やっぱりどこかで、誰かの助けを求めていたのかもしれないな。自分に仲間を作るなんて、現状からしたらそんな立場じゃなかったのに…でも、パーティに誘われたあの時…嬉しさの中に、そんな期待が混じってしまっていたんだろうな」

「シド…」

「話すよ。いや…聞いて欲しい」

そう言うと、シドは立ち止まり…真っ直ぐな視線をネオンに向けた。

「一昨日——俺が怪我を負った“理由”を、お前は見たのか？」

「！ ……うん。野犬みたいなのが…沢山いた」

「正確に言うと、あれは野犬じゃない。『魔犬』だ」

「！？ ま…」

「犬とは言っても、生き物でも無いな。『魔法体』と呼ばれるもので…魔術元素の塊みたいなものかな」

「……」

いきなりシドの説明が始まり、聞いたことの無い単語をすらすらと羅列されたネオンは、目を丸くして閉口する。

「お前には馴染みが薄いかもしれないな。テルルは『魔法士』だったね：彼女と同じく魔法を使う者に、

『魔術師』がいるんだ。扱い方はだいぶ違うけどね」

「魔術師…」

「ああ。『魔法』と呼ばれるものを遣う者は、大まかには魔法士と魔術師に分けられる。

『魔法士』は空气中にただよう元素を集め、炎や水にして操る者。

『魔術師』は元となる物質と魔術によって

魔法体を造り出す者。自分で直接相手に働きかけることが出来る魔法士に対して、魔術師は魔法体を使い、間接的に相手に干渉する」

「……」

「先天的な力を持つ『魔法士』に比べて、『魔術師』はより学者に近いんだ。元素を操るには、血筋とか才能とか：

そういう持って生まれたセンスが必要なんだけど、魔術師にはそういうものは必要無いみたいだね。

ただ、専門的な知識とか、調合のセンスは必要だと思うけど」

「……」

「で、あの魔犬だけど：簡単に言えば、魔導師の使い魔みたいなものだな」

ネオンはただ黙って、シドの説明を聞いていた。途中で脳内がショートしかけたりもしたが、彼なりに結論を出す。

「……よくわかんねえけど……犬じゃないんだな」

「そう。俺はあれらを造り出した、魔術師を追ってるんだ」

「何で？」

「……そいつに、術を掛けられた」

そう言うと、シドは腰からショートソードを抜く。鞘から抜き取ると、コートの袖をまくり、腕を露出させた。そのまま腕に、ソードの刃を当てる。

「！　な、何する気！？」

ソードが横に引かれ、シドの腕からは鮮血があふれた。慌てるネオンだったが、シドはごく落ち着いた様子でネオンを制し、カンテラの灯りを患部に近付ける。

「見てて」

そう言うシドに促され、ネオンは恐々と腕を注視していたが……見る見るうちに、驚愕の表情に変わる。

「！！　……傷が……！！」

つい今出来たばかりの切り傷が、ネオンの目の前でたちまち塞がって、一本の線に傷跡が残る程度にまで

回復していった。シドは治癒を施していない。その経過は不自然なはずなのに、至極当たり前のように起こった。驚きを隠せないネオンを見て、シドは息をつく。

「あの時：お前は俺が自分で治したって思ったろ？ でも、実際は違う。“勝手に”治るんだ」

「…つまりこれが…魔術？」

「いや、これは多分『呪い』に近いものだ。魔術師に掛けられたものに変わりはないんだけど…魔術の他に、呪術の知識もある奴なんだろうね。物や道具を使う点で、運用面に似たところがあるから」

「“すげえ速さで回復する呪い”ってことか？」

「そんなところかな。傍目には怪我してもすぐに治るんだから、良い術みたいに見えるだろうけど…そんなことも無くてね。ちゃんと副作用もある」

「どんな？」

問うネオンに、シドはコートの胸ポケットから、細長い透明な瓶を取り出す。試験管のように見えるその中には、白い錠剤が半量ほど収められていた。

「これが何か、わかるか？」

「…飴？」

「…だったらいいんだけど」

単純ネオンの予想通りの回答に、シドは可笑しそうに笑う。

「これは、麻酔薬…一般には『鎮痛剤』と呼ばれる薬だ」

「…ちんつーざい？」

「身体の痛みを和らげる作用のある薬だよ。掛けられた呪いは、身体に負った傷を表面上は治すけど、

内側に届いた痛みはずっと消えないようになっていくみたいでね…」

「!!」

シドの言葉を受けて、突如ネオンの頭の中に、シドと出会った時の様子がフラッシュバックした。魔犬に噛まれ、

引き裂かれ、血溜まりが出来るほどに全身傷だらけになっていたシド。次の日の朝、どれだけ長いこと雨ざらし

だったのか、蒼白で気絶したまま運び込まれた…あの状態に至るまでに起きた惨劇も、想像に難くなかった。

あんなことが、日常的に起きていたとしたら…

物が言えず、驚愕の表情で目を見開かせたまま自分を凝視するネオンに…シドは至ってごく普通に、少し困ったような表情を向けて話し続ける。

「…自分でも、まずいなとは思ってるんだけど…これを使っているって、動いてもいられなくて。でもこれも、そろそろ使い納めかな…段々効きが悪くなってきてしまってる」

「！ それって…」

「現時点で、この手を使う他に有効な手段が見つかってないんだ。だから…一刻も早く魔術師に接触する必要がある」

「術を解かせるため？」

「そう。基本的に『術』は掛けた者にしか解けないし、それが一番安全だ。今のところ、そいつはこの森をねぐらにしているようなんだ。こんなところに何故って疑問もあるけど…ともかく動き回っていないだけでも幸運だったな。とは言っても…鉢合わせたことは、まだ一度も無いんだけどね」

「……」

「…これが、俺がここに来た目的だよ」

語り終わると、シドはネオンの様子を窺う。

カンテラの灯りに浮かぶネオンの表情は、シドの顔を見上げたまま固まっていた。

シドは彼を気遣うように、努めて優しく微笑いかけた。

「ネオン、これは俺の私情なんだ。お前や、他のパーティのみんなを巻き込むつもりはかけらも無い」

「…」

「悪い…ここまで話してしまったけど…やっぱり付いてきちゃ駄目

だ。このまま進んで、魔術師に接触してしまったら：俺と同じようになってしまいかもしれない。：考え直してくれないか」

「……」

「どうなってしまいか：俺にも保証できないんだ。もし、お前が無事に戻れなかったら：」

「シドは、無事じゃなくてもいいのか？」

再びネオンを説得し始めたシドだったが、ぼつりとつぶやいた彼の言葉に、口をつぐむ。

ネオンは何かをこらえるような、険しい顔でシドを睨んでいた。

「おれが無事でも、お前が無事じゃなかったら：もしも、戻ってこれなかったら：おれは全然無事じゃない！

絶対：自分を許さない」

「：ネオン：」

泣きそうになって、うつむきたい気持ちを抑えるように、ネオンは懸命な顔でシドに訴えかけていた。

そんな彼を見て：シドの顔にも今までおくびにも出さなかったような、やるせない表情が浮かび上がっていた。

「さっきも言っただろ？ 力になりたいんだって。助けたいんだ：！」

ネオンは背のミドルソードを抜き、シドのカンテラを取って前に立つ。

「話聞いても…やっぱりよくわかんねーし、何も出来ないかもしれないねーけど…でも、匣にくらいならなるかもしれないだろ？ 任せろ、そういうのは得意だぜ」

「……」

「早く片付けて帰ろう。こんなこと、今日で終わりだ」

そう意気込むと、ネオンはソードを片手に、シドに続くよう促した。その彼の様子に、シドは何も言えず…全てを思い限ったような表情を浮かべ、黙ってネオンの後を追った。

3日日夜…邂逅（1）（後書き）

次回更新予定日…2010／6／1

3日目夜…邂逅（2）

その時…二人が後にした宿にも、不穏な空気が近付いていた。

夜闇に紛れて、フードマントを被った十数名の集団が、宿の正面入り口近くに集まる。集団が動く度に、ガチャガチャと金属がこすれる音が漏れ、鎧のようなもので身を固めている様子を感じさせていた。

集団の一人が正面脇の頭上から、2階部屋に当たるであろう窓の下めがけて梯子を掛け置く。

そして集団の一人の合図で、先頭にいた大柄な男が梯子に手を掛けた。縦にも横にも張り出したその体軀で

木梯子をきしませながらも、音を控えつつ素早く登っていく。

窓をこじ開けようと懷からナイフを取り出したところ、窓にわずかな隙間が開いているのに気付いた男は、

そのままのそりと中へと降り立っていった。

下から見上げる集団の面々を待機させ、中に入った男が暗がりの中眼を凝らしながら、部屋の中を見渡す。

目の前に見えるラグソファを背にしてベッドが一つ、更に奥に二段ベッドが一つ。手前のベッドには

少女らしき2人の寝姿があり、男はそれを一瞥すると、奥の二段ベッドへと歩を進める。

男は注意深く、まず下段のベッドを探り…殻になっているものの、何者かが寝ていた痕跡があったことを確認する。

そして、次に上段へと身体を伸ばし――

「夜中に家捜しとは、随分不躰な連中だ」

ふいに背中から聞こえた声に、勢いよく振り返り、長い騎士剣をザラリと抜き構えた。

正面の窓から望める月に照らされて、部屋の中は注視しなくとも見渡せるようになっていた。

男は身構えながら、声のした方をギラツと睨む。

男が視線を向けた方——そこは部屋のドアの真反対に位置したところで、壁際に小さなデスクセットが置いてあった。その椅子には：いつからいたのだろう、瘦身の男が足を組み、肘掛に腕をもたせ掛けながら深々と腰を下ろしていた。

鎧姿の大男が長剣をちらつかせ、戦闘体勢を向けても、座る男に動じる様子は無い。

「貴様：この部屋に泊まる者か？」

「夜中に窓から上がり込むような輩に、答える必要は無い」

そう言うと、座っていた男はゆっくりと立ち上がり、鋭い視線で鎧男を見据える。

身構える男の方に対し変わらずリラックスした様子でその場に立ち、低いトーンは一定で抑揚の無い

調子であったが、眼光からはそれらにそぐわない感情を想像させた。

登ったきり戻らない先鋒の様子を確認しに来たのか、いつの間にか宿外で待機していた鎧集団数名が部屋の

中へ侵入してきていた。そして、何やら対峙したような雰囲気を見せている二人を確認すると、一斉に剣を抜き、

瘦身の男へ切っ先を向ける。

先に入っていた鎧男はそれに気付くと、慌てた風に片手を大きく振りながら、あわや飛びかかりそうになっっている仲間を制し始める。

しかし、これだけ多数の刃を向けられながらも、やはり男はその場にただ凝然として立ち、静かに鎧連中を見やっていた。

鎧男はひとまず剣を下ろし、他の者にも促す。そして、畏まった態度で瘦身の男に向き直った。

「聞け。これは宿改めである。極秘につき、このような未明時刻に相成り…」

「宿改めだと？　こんな時間に梯子で忍び入って寝床を探るとはな。許可は取っているのか」

「…許可は受領しておらん。故に、このような手筈を取るしか無く…」

「夜盗と変わらん」

「そっ…それはあまりに心外だ、我らはあるお方に使える、騎士位ある者なるぞ！　こ度は、致し方無く…」

夜盗まがいの失態を…」

「最近の騎士団は、夜盗の真似事もするのか。主も知れたものだ」

「…！　貴様っ…我らはいざ知らずとも、御館様を侮辱することは許さぬぞ！？」

「…話にならん。もとより、お前達の探す者はここにはいない、去れ」

何とか体裁を保とうとする“自称騎士”を名乗る鎧男の言葉を、瘦身の男はことごとく一蹴した。

はなから意を介そうとしない男の態度に、憤慨した鎧男は再び剣を振り上げ、切っ先を向ける。

「おのれ生意気な若造が…我が刃の錆にしてくれようかつ――」

「“ここにはいない”ということは、別の場所に向かったということ?」

と、鎧男が剣を振りかぶったと同時に、窓の方から女性のような、トーンの高い声が聞こえてきた。

鎧男はまたしても勢いよく振り返り、今度は一転して狼狽し始めた。

「おっ…御館様」

「おやめなさい、あなた方。このような真似、何を言われようと弁明できません」

慌てふためく鎧の巨体男達に囲まれながら、窓の前に立っていた声の主は部屋の中へと進む。茶色い

フードコートを目深に被り、小さく華奢な体型ながら妙な存在感を醸し出すその人物は、真っ直ぐに

部屋の中央へ歩み入り、瘦身の男の前に立つ。

「んう…」

「…クロ、ム…？　どしたの…？」

と、手前側のベッドから声が聞こえ、寝ていた少女二人も起き出してきた。

その様子を見て…フードの人物がゆっくりと被りを外す。フードの下から現れた、赤褐色の緩やかに伸びた髪と、ライトグリーンのやや切れ長の瞳――女性は男に向けて、自然な振舞いながらも、実に優雅にカーテシー（お辞儀）をした。

「この者達の非礼をお詫びします。生来の護衛付ゆえ、庶民の礼儀を知らないのです」

女性の方を見やっていた痩身の男…クロムは、溜息にも似た息をつき、視線をそらへと向けた。

闇の広がる森を歩き進んでいたネオンとシドは、やがてある場所へとたどり着いた。

そこは周りより若干開けていて、まばらに伸びる木々の間から、月の光がわずかながらに差し込んでいる。

「…ここは…シドが犬に襲われてた場所だよな」

ネオンが振り返ると、シドは頷いた。

「最初、呪いを掛けられたのは…ここをもう少し行った先だった。

この辺一帯から、魔術師によるだろう術がかけられているみたいだな」

「うん…ここに来ると、何かおかしい…妙に寒い」

ネオンはあの時と同じように、ブルツと身震いする。長袖でいながらも、冷たい空気が直接肌に当たって

いるかのように、周囲が冷え切っていた。この辺りを境に、空気が何か異様な雰囲気をもっているようだった。

ネオンはソードを構え、周囲を警戒する。

シドはそんなネオンの様子を見やり…小さく息をつく。

「実は、魔術師自体に遭ったことは今までに一度も無いんだ」

「…えっ」

「毎回…この辺りから先には、どうしても辿りつけないんだ。あの時みたいに魔犬に襲われたり、行きたい方向に歩けなくなって、いつの間にか森の外に出されてしまったり…どれも、森にかけられている術のせいだと思っただけど」

「…」

「でも、それが…この森に魔術師が居るって証拠だ。俺が近付いることにも、気付いてるはずなんだ」

「…うん、そうだな」

シドは至って普通に説明していたが：ネオンはそんな彼の様子を、少なめの相槌を返しながら、ただ見ていることで精一杯だった。

カンテラの炎に照らされて、シドの白い髪は、淡く金色に浮かび上がっていた。色の薄い瞳は炎の色に溶け、輪郭だけがうつすらとネオンの瞳に映る。

ネオンはしばらく沈黙し：ためらいながらも、シドの背中にぼつりと声を掛けた。

「：シド」

「ん？」

「おれ、クロムから：シドが『アルビノ』って奴なんだって、聞いたんだけど」

「……」

言ってしまったからうつむいて、おずおずと彼へと見上げる。

シドは暫時黙ってネオンへと振り向いていたが：すぐに、柔らかく笑う。

「：ああ。色素欠乏症：簡単に言えば、身体の色を作る物質が足りない。だから、髪も生まれた時から白い。

：俺のは完全なものでは無いらしいんだけどね。」

シドの返答に、ネオンは呆けたような表情を向ける。

「うんまあ、『アルビノ』であることには変わらないよ。クロムか

らは、何て聞いたんだ？」

「…陽の光が苦手とか…病気に弱いとか」

「うん、太陽の光とか熱は避けるようにしてる。一応眼鏡には、陽を遮るように細工してあるんだ。」

視力も弱いんだけど…これは『アルビノ』が原因なのかよくわからないな。ガキの頃は本ばかり読んでたから」

「そうなのか…」

「そう、免疫力が一般より低いとも言われてるね。でも、一番の特徴はやっぱり外見かな…良くも悪くも、かなり目立つし…この歳で白髪はないしな…！」

黙って聞くネオンに、シドは明るく笑って話す。

「『ATOMIA』ではどうなのか、詳しくは知らないけど…こういう外見があって、大抵『アルビノ』はあまり

良い存在として見られない。不幸や災いを呼ぶとか、そういう能力なんか持ってないんだけどね。

でも…古くから広がってる言い伝えって、簡単に覆るものじゃないから」

笑顔で話し続けるシドだったが、眼鏡の奥に見える翡翠色の瞳が、瞼の影で少しだけ曇る。

「…『アルビノ』だってことを隠すことは出来る。髪を染めたり…ね。実際にそういう人はいると思うんだ。

多分、『アルビノ』と思われたくない人は、みんな…。でも俺は、

それは嫌なんだ」

「……」

「…自分を否定することになると思ってたね。周囲から否定されても、俺だけは自分を受け入れていたい。

いや、受け入れていなくちゃいけない。…そう教えられたから」

一言一言を、まるで自分に言い聞かせているように話していたシドだったが、それきり口を閉じた。

ネオンも黙ったまま、シドの足許の方を見つめる。

「…なにもここで、こんな説明すること無かったな！」

一抹の沈黙の後、シドが明るく切り出した。うつむくネオンの顔を覗う。

「悪い、しんみりしちゃって…でも、だいぶ割り切ってるんだ。これと付き合ってきてもう18年にもなるんだし」

「……」

「こういう奴もいるってくらいに、思ってもらえればいい。お前が考え込む必要なんて無いんだから——」

「うん…、シド、あのさ」

少し慌てた風にネオンの顔を覗き込むシドの言葉を、ネオンがうつむいたまま遮った。

「うん？」

「…おれ、シドを初めてみた時…髪の毛が白くて、すげー綺麗だと思っただ」

「！」

「ごめんっ…でも本当に素直に、そう思っただ。白髪白髪って言うけどさ、じーさんばーさんのとは全然違うじゃんか。なんていうか、透き通った感じってか…つやつやしてるし」

「…」

「でも、あの後『アルビノ』ってことを聞いて、訳があってシドがそういう髪色をしてたんだって知って…何か、言っているのかわからなくなっちゃって…。だってシドにとっては、全然褒め言葉じゃないかもしれないじゃん？」

「ネオン…」

「おれは『アルビノ』なんて知らなかったし、色のないわれがあるってことも知らなかったけど…それを知っても、やっぱり綺麗だって思うんだ。…今はもっと違う意味でさ。そういう風に思われても、負けてないシドが、すごく…」

拳を固く握り、思い詰めたように話し続けるネオンの頭に、何か

被さった。

ふいなことに驚いてネオンが顔を上げると、頭に乗せられた手の奥に、シドの黄色めいた白い輪郭が見えた。

「：今までで一人だけ、俺の外見を『綺麗だ』って言ってくれた人がいたんだ。言われた時は、ガキだったからあまり実感無かったけど：今では感謝してる。こうして何も気にせず、生きていける気にさせてくれたんだから」

「！！」

シドは心底嬉しそうな表情を浮かべ、ネオンに笑いかけていた。

「お前で二人目だ。：ありがとう、ネオン」

と、顔を上げた二人の間を、湿気を含んだ風が通り抜けていった。

「！」

「何…！？」

その突如とした変化に気付くも、風の流れは止まらず、二人を足の向く先へと押し流す。冷たく、じつとりとまとわりつくような重い空気に足を取られ、じわりじわり前へと動かされていく。

「どーなってんだよ、これ…！？」

「！　まずい…」

フラフラと転びそうになっているネオンの横で、シドが前方を見て眉を顰めた。同じように彼の見る先へと

ネオンも視線を動かすと、暗闇の中2つ並ぶ小さな光が幾つも、こちらへ向けられているのが見えた。

言葉に出さなくとも、犬…いや、魔犬のものであると理解できた。

木々の間から縫うようにじりじりと

近付いてくるそれらは、眼の光が無ければ輪郭が到底判らないくらいに黒々しい。

ネオンは剣を構え、シドの前に出ようとするが、一向に止む気配の無い風が邪魔をして思うように体勢が

取れない。よろめく身体を立て直す度に、足が一步前へと出てしまう。双方の距離がみるみる縮まっていく。

「…っのやろ！！」

思うようにならず、業を煮やしたネオンが、風の流れに従って一気に前へと詰める。

「ネオン！」

「お前はそこにいろ！！」

前方へ飛び出して来たネオンに、黒い光達は一斉に反応する。闇に溶ける体躯から、白く光る牙を剥き出し、

速度を増してネオン一点へと集まり始める。

暗がりの中眼を凝らし、ネオンは目標を確実に捉える。そして先頭

に向かって来た一匹目を足で蹴倒し、
後続へ向けて剣を思いつ切り薙いだ。

「！」

確かな手応えを感じ、ネオンは体勢を整えつつ身構え、敵を窺う。
先ほどの攻撃を受けて、魔犬達は
彼から距離を置いて立ち止まり、絶えず唸り続けている。その前方
で、ネオンの剣を受けたであろう
一匹が横倒しになっていた。ネオンはそれを一瞥すると、奥へ向け
て間合いを詰めていく。

「……！！　ネオン、駄目だ！！」

「！？」

そこへふいに後ろからシドの叫び声が聞こえ、ネオンの視線が揺らぐ。

「なんだよっ…、……！！」

若干がなりながら返したネオンだったが、動いた視線の先に、思い
もよらぬ光景が映っていた。

たった今攻撃を当てた魔犬が、ゆっくりと立ち上がり始めたのだ。
腕に伝わった限り、かなり深く
切り込んだ手応えを感じていた。致命傷だと踏んでいた。

しかし…魔犬は手負った様子をおくびも見せず、ネオンの目の前で
鋭い牙を剥き出す。

困惑と驚愕が交錯する中、ネオンはその黒い身体を凝視する。
…傷はどこに出来たんだ？　おれは“本当に”斬ったのか——？

瞬間、シドが後方から飛び出す。硬直するネオンの腕を掴み、そのまま魔犬の頭上を飛び越え、真っ直ぐに風下へと駆け出した。

3日日夜…邂逅（2）（後書き）

次回更新予定日…2010／7／1

3日目夜…邂逅(3)

ネオンの頭の中は、混乱していた。どう上手く解釈しようとしても、納得の出来るものにはならなかった。

それほどに…今さっき目の前で起こったことは、不自然だった。

「――…ネオン」

彼の思考を察するように、傍らからシドが声を掛ける。

「多分…攻撃は当たってた。それは間違いないと思う」

「じゃあっ…一体どういうことなんだ!？ 当たったのに…確かに斬ったのに、傷が付いてないなんて…」

ネオンの喚きにシドは眼を伏せ、首を横に振る。

「俺にも…“さっき起こったこと”の理由はわからない。…情けない話だけど、奴らに剣で触れたことが無くてね」

「……『魔犬』だから、…ってことになるのか？」

「考えられるとしたら…そうなると思う」

ネオンとシドはあのまま真っ直ぐに、風下へと走り続けていた。夜闇に囲まれた森の中は、もうとつくに目が慣れてきている頃合いだろうに、すぐ近くより先はほとんど視界が開けないでいた。二人が走り抜ける周囲の葉や枝の擦れる音が、静寂とする闇の中やけに大きく耳に聞こえる。

湿気を含んだ冷たい風は依然として勢いを緩めること無く、周囲に吹き流れていた。それはじつとりと重く、二人の身体に不快にまとわりつく。かなりの距離を移動してきているはずなのに、さっきまでこれほど広範囲に流れていただろうか。

そして、二人の背後にぴたりと張り付くように、数多の獣の吐息が追いかけてきていた。一定の距離を保ち、追いつこうとも離れようともしていないようで、二人は引き離す隙が全く作れず、さながら“走らされて”いるようだ。その異様とも言える追跡に追い立てられるように、地面から浮き出る木の根に足を幾度となく取られながら、二人は走り続ける。

「…まずいことになってる気がする。何とかして森を出ないと」

「つつたつて、もうどこ走ってんだか全然わかんねえよっ…!!」

何かに追いやられるように――否、何かに手繰り寄せられているように、足が動いていた。

どちらへ方向を変えようとも、後ろから押すように流れる風の気配は変わらない。風が自分達の後を付いてきているのか、自然と風の向かう方へと軌道が修正されているのか、その判別さえつかない。

もう既に、方向感覚は無かった。

周囲の空気はどこまで走っても濁ったようによどみ、獣臭さを帯びた不快な臭いが漂っていた。

森一帯が、奇怪な様相をまとっているようだった。

「!!」

このまま永遠に走らされるのだろうか…という思いが過った折に、二人の足が突然止まる。

真っ黒な景色の中突如広がった、ほの明るい視界に一瞬目を眩ませた二人は、声を上げようとしてすぐに閉口した。

「…こうなる訳かよ…!」

一時沈黙し…ネオンは息を切らしながらつぶやいた。
立ち止まった二人の足先には、反り立った崖が広がっていた。眼下にあるだろう崖下は暗過ぎて、高低差が全く測り知れない。ただ啞然とした顔で崖下を見つめているネオンの横で、シドが後ろへと振り返る。

「…囲まれた」

我に返ったネオンが同じく振り返ると、魔犬達が唸りをあげながら、二人を半円形に取り囲んでいた。

二人の背後の薄明るい景色を受けて、姿をかなりはっきりと確認できるようになっていたが…その数は、さきほど遭遇した時よりも増えているように感じられた。今にも飛びかかってきそうな牙と鉤爪を剥き出しにし、じりじりと、二人への距離を詰めていく。

「っそ!」

吐き捨て、ネオンはソードを抜き、獣達を威嚇するように構え立つ。シドも同じくショートソードを抜くが…その顔には絶望感が浮かび上がっていた。

「…勝算が無い。せめて、奴らの弱点でも見つけることが出来れば…」

「んなこと言っただって…今ここでどうやって見つけるってんだよ！？」

そうがなりながらも、ネオンも彼なりに考えを巡らせる。

さっき当てた一振りで効かなかった。じゃあ無数に斬りつけたら？
身体を断てば？ 否…打撃なら？

ネオンは今までの戦歴をフラッシュバックするように辿り、幾つもの選択肢を思い浮かべた。しかし…

ネオンすぐさま

思考を頭から捨てる。どれも仮定に過ぎない。今の状況では、それらを一つ一つ試している余裕は皆無だろう。

これだけの多勢に囲まれた局面では、最初の一撃で決定的となる攻撃を確実に当てる必要がある。そうで

なければこれだけの多勢を相手にした時、当然かかってくるだろう相手からの二撃目、三撃目を攻略する
手立てが無くなってしまう。

彼の持つ知識から考え出せる可能性のどれをとっても、結果は相手任せの運試しだ。

ネオンは唇を噛む。どうして自分はいつも、こうも考え無しに動いてしまうんだろう。考えるよりまず体が

動いてしまい、道具や手段の準備が何一つ揃ってない。行き当たりばったりな行動では、いくら結果が上手く

まとまろうとも、運氣やタイミングに恵まれたからと言わざるを得ない。そんな顛末を今まで何度も繰り返して

来たにもかかわらず：今回もやっぱりそんな不安材料を抱えたまま、ここまで来てしまっていた。

確固とした見通しも無いまま相手に仕掛けたのは自分だし、結果として今の危機に陥ってしまったのは、

自分のせいになるのではないか。“守る”なんて言って、結局シドを巻き込み、引きずり回してしまっ

ているのではないか。

そして：シドを追いかけるのに、パーティメンバーには何も打ち明けずに来ていた。

元々シドを歓迎していなかったクロムが止めないはずは無かったし、テルルやリンだって、首を大きく縦に

振ることは無かったと思う。反対されると思ったから、打ち明けても叶わないと思ったから：完全にパーティを

出し抜く形で付いてきていたのだ。そんな結果が、予想通り目の前に転がっていた。

それでも：パーティがこの場にいてくれたらと、無意識に仮想してしまう自分がある。

：なんて自分勝手なんだろう。

ネオンの中に、どうしようもない無力感が広がっていた。

二人と魔犬達との間合いが詰まりきり、痺れを切らした獣達は一斉に襲いかかってきた。算段の取れないまま、

ネオンは無我夢中で剣を振るう。刃が当たった魔犬は一度地に落ちるが、案の定すぐにむくりと起き上がり、

攻撃態勢を取る。そして何事も無かったかのように、再び襲いかかる。

不遇なことに、ネオンの速度を主とする翻弄攻撃は、魔犬相手にはまるで効果を発揮できていなかった。

敵がある程度大柄で自分より動きが鈍く、自身のペースに嵌めることを前提とするそれは、小柄で動きも

俊敏な四足生物には同速度にしか映らないし、しかも相手は自らの被弾を全く恐れず、こちらを攻撃するという

本能だけで立ち向かって来る。

相性は最悪だった。

目まぐるしい衝突が続き、薙いでは起き、薙いでは起きる繰り返しの中、みるみるうちにネオンは劣勢を

強いられていった。シドへも攻撃の手は掛かっていたが、魔犬達のターゲットは概ねネオンへ集中していた。

彼らの内で、こちらを先に片付けようという魂胆があるようだ。

「――!!」

襲い来る無数の牙と爪を剣で振り払ううち、一匹がネオンの手首へ噛みついたのを口火にして、魔犬達は一斉に

ネオンに飛び掛かった。見る間に彼の身体が数多の獣で埋め尽くされていく。

その光景に、シドは血の気を失った。

「ネオン!! 首を…首を守れ!!」

しかし、シドの懸命の叫びにネオンが返すことは無かった。ネオンの身体は黒くうごめく者達で完全に覆われ、

その姿を表から確認することが出来ない。倒れこむことさえも許されず、なおも飛び掛かる獣の体当たりを受けて、その足許は一步ずつ背後の崖へと吸い込まれていく。

「――ネオン：！！」

シドは自らにまわりつく魔犬を振り切り、何とかネオンへ近付こうとするが、魔犬達はそれを阻止するかのように執拗に足に喰らいつく。

歯噛みし、苦悶の表情を浮き出すシドだったが――不意にその視界の端に、ぼんやりとしたシルエットがよぎった。

何となく視線を送った、その不鮮明な存在に、シドは瞬間時を止め：表情が固まり、眼を見開かせた。

「――」

魔犬達を背にした向こう側で、それは、口端を上げ：何かをつぶやいた。

シドは唇の動きを読み取りながら、ネオンと共に、崖下へと飲み込まれていった。

深夜、ひっそりと静まり返るパーク。

ぽつぽつと街灯がともり、全てが眠りにつく中で、とある宿の一室の灯りだけが煌々と街道へ漏れていた。

突然の未明の訪問者・甲冑の男連中は、最側近とみられる二名を残

し、他は戸外で待機していたが、外へ出てもおまるで拠点防衛をするような、ピリピリと張り詰めた様子であった。

『御館様』と呼ばれた女性はラグソファへと腰をおろし、甲冑の男達は彼女を守るように両側へ控えている。

まるで、彼女に触れようものなら容赦無く切捨御免にさせられそうな雰囲気だ。そんな女性は…余程の位ある

人物なのだろうか、取り去ったフードコートの下から現れた薄緑のワンピースは、一般女性が着るような

簡素なものであったが、耳と首に着く宝飾は、その服装にはおよそ似つかわしくない絢爛な作りで、緻密な

細工の間からのぞく色とりどりの宝石が、眩い輝きを放っていた。

先ほどの騒動で起こされたテルルとリンは、起き抜けの格好ではあまりに心もとないので、寝巻きの上から

上着をはおり、二人寄り添ってベッドの縁に縮こまっていた。いまだによく状況が飲み込めないままだったが、

とても寝ていられる様子では無いことだけは理解できた。

そして…彼女達の気がかりはそれだけに留まらなかった。二人はしきりに部屋を見渡す。

「やっぱり…いないみたいね」

「…うん」

シドに加えて…ネオンまで姿を消しているとは。

前日の不可解な出来事のはっきりと現実にはさらされ、テルルとリンは落胆の表情を浮かべていた。

クロムは先ほどと同じようにデスクの椅子に深く腰掛け、女性を無表情に眺めていた。彼女の方も凜とした姿勢を保ったままに、クロムを真っ直ぐに見つめ返す。

リンは眉を寄せながら、ひそりとテルルに耳打ちした。

「何なのかしら、この人達…こんな夜中に何の用だつてのよ」

「…わかんないよ…」

二人が事態を図りかね、今しばしの沈黙が続き…やがて女性が口を開く。

「このような時間に…失礼なことは重々承知です。私は、イレーナ・ランベルク。この者達は――」

「要件は何だ」

「……人を探しています。こちらの調査では、貴方がたに関わりがあると…白髪の者を知っていますね？」

「!!」

女性：イレーナの言葉を聞き、ぼんやりと会話に耳を傾けていたテルルとリンは目を見開かせ、互いに顔を見合わせた。

イレーナは視界の端で彼女達の様子を見、声色をやや強める。

「急な話にはなりますが――その者をこちらに引き取らせて頂きたいのです」

イレーナは、真剣な眼差しをクロムに向ける。クロムはその彼女の顔を無表情で見やっていたが…すぐに息をついた。

「ここにはいないと、先程言ったはずだ」

「行き先を知っているのではなくて？」

「見当はつくが、お前達に明かすつもりは無い」

「何故？」

「今時分顔を合わせたばかりの連中に、パーティの内情を軽々しく話せるほど神経太くないんでな」

「…では、どうすれば…何が望みなのか？」

「俺に言わせる気か？ 情報を知りたいのはお前達の方だろう」

「……」

クロムの物言いに、イレーナはやや顔を強張らせ…下方へうつむく。

「…我々の身は、まだ口外することはできません。ですが…この先必ず貴方がたに全てお話しします。

誓って、お約束します。ですから…」

イレーナはうつむきながらも徐々に言葉に力を込め、再び視線をクロムへと向ける。

「：我々には一切伝手がありません。何でもいいのです、知つてい
ることがあれば：貴方がたに是非協力
頂きたいのです。：お願いです」

「……」

しかしクロムは彼女を突き放すように、ただ黙ったまま、冷たい視
線を与えていた。

「き、貴様、黙って聞いていればっ：！！！」

二人の応酬をやきもきしながら見届けていた側近の男が、啖呵を切
ってクロムへ詰め寄った。

「無礼にもほどがあるぞ！！ さしずめそこらをほつつき歩いてる
だけであろう下級剣士のようだが、
態度といい、口の利き方といいっ：この場で無ければ貴様などすぐ
にでも極刑に処してくれるわ！！」

よく聞け、このお方は「F O U N D I A」東方領主、フレイマー公
御令室にして――」

声を張り上げかけた男だったが、すぐにイレーナに制され、男は興
奮を抑えきれずに歯噛みしながら、
膝をついた。テルルとリンは彼の怒声に体が凍りついてしたが、そ
んな様子を見届けながらも、クロムは
変わらず一定のトーンで続ける。

「確かに俺は“下級の”剣士だ。主もない。地位も名誉も無い。
：しかしお前達に従うべき立場でも無いし、
逆にお前達が俺に指図出来る権限を持つ訳でも無いな。武力をもつ

て従わせるつもりなら別だが」

「っ…！」

そう言い、無感情な視線を与えて来るクロムに対し、迫った男が急に声を詰まらせ、唸りながら閉口した。

男は、クロムの力量を測りかねていた。初めて彼らが対面した時、ほぼ完全武装に身を包んでいた男達の

幾つもの切っ先を、丸腰で臆することなく浴びていた——それほど
の芸当が出来るのは、徹底されたハツタリか、

あるいは——

判断材料が乏しい現状では、目の前の男をどちらで捉えるべきか、
決断するまでには至れない。しかし、彼の

灰色の双眸からは、相手に物言わせぬ威圧感が感じられる。フェイク
である可能性は残るが…およそ一筋縄で

いくような相手ではない。これだけは、はっきりとわかった。

イレーナは、首を横に振る。

「こちらとしても、争いは出来るだけ避けたいと思っています。隠
密裏に動いているので…この者達に手出しはさせません」

「加えて、お前達の行動を全て管理させてもらおうか。…それが条件だ」

「ク、クロム…！！！」

テルルが悲鳴のような声を上げるが、クロムは臆することなく淡々と続ける。

「素性を明かさないなら、それくらいしても十分だろう。もとより、こちらには不要な情報だがな」

「……」

クロムの突き出した苛烈な条件に、イレーナは思い悩むように再び視線を手元に落とす。テルルとリンは固唾を飲みながら、二人のやり取りを見守った。

「…わかりました。貴方の要求に従いましょう」

しばらくの沈黙の後…イレーナはやや諦めたように、クロムへ頷いた。側近が何かを言いたげに彼女へ顔を向けていたが、主には意見できないのかすぐにうなだれ、恨めしそうにクロムを睨んだ。

完全にクロムが話の主導権を握った格好となったが…果たしてそれが、彼の意図したものなのか、自然の成り行きだったのか。テルルとリンには外野から場を傍観するしか出来なかったが、始終冷や冷やしっぱなしだ。

そんな彼女達の心配を余所に、ようやくクロムは口を開く。

「…お前達が探す男は恐らく、ここにはいない、こちらのパーティーメンバーと共にいる」

「！それがわかっているのなら、すぐに探せようものだろうが！」

「おおよその当たりが付くだけで、正確な居場所はわからん。こち

らから動いても、探し出せる保証は無い」

「探し出せない保証も無いでしょう？　まだそう遠くへは行っていないはずです」

「…何にしろ、こちらはここから動く気は無い。お前達も明けまでは不用意に動かん方がいい…早いところ、泊まる宿にでも戻れ」

「…それは、どういう意味なの？」

「安全を推奨して言っている」

「…我々は、そうしなければならないということね？」

「先程の条件を口約束で済ませないならな」

「……」

クロムの弁に、イレーナは考えあぐねるように、眼を細めた。

「…我々は、白髪の者を一日も早く連れ戻さなければならぬのです。貴方が最も無難な選択肢を下さっていることはわかります。ですが…何かあってからでは遅いのです。少しでも早く…安否を確認したいのです」

「お前達にも事情があるのだろうが、こちらにも譲れないことがある。どうしても動くというならば、押し通せばいい」

「っ…」

二人を取り巻く周囲に、ギリリとするような緊張感が走る。そんな中クロムはやはり、顔色を一切変えないままに、イレーナへ視線をやっていた。

イレーナは逡巡するように、うつむいていたが…やがて顔を上げ、真っ直ぐにクロムと対面した。

「…わかりました。我々も、今夜は搜索の手を止めることにします」

3日目夜…邂逅（3）（後書き）

2011／1／10 一部改変

3日目夜…邂逅（4）

それからイレナーナ一行は、夜が明けたらまたこちらへ出向いてくることを告げ、宿を去っていった。

煮え切らない気分を抱えたままなのか、どこか不機嫌そうな足取りで宿を離れていく一行の様子を、テルルは窓から目で追う。

その背中では、リンが鬼の形相でクロムへ詰め寄っていた。

「あんたはねえっ…どうしてそういつもいつも、敵を増やすような真似ばかりするのよ!？」

本音なら怒鳴り散らしたいだろうところ、真夜中であるゆえ努めて小声ではあったが、その静かにも激しい剣幕は、今にもクロムへ飛び掛かりそうだ。

「あんたは良くてもねえ、私らはあんたと違って、か弱い女の子なんですからね! あんな肉ダルマみたいなでかいおっさんに睨まれて、平常心でいられると思ったら大間違いなのよ!！」

しかしして連中が立ち去った後も、変わらずに椅子へ腰掛けていたクロムは、リンにどれだけいきり立たれても涼しい顔でいた。

「ちょっと、聞いてんの――」

「まあまあ、リン…」

うんともすんとも言わない彼へ向けて、苛立ちを増すリンはベッドのスプリングに拳を叩きつけながら

忍び声で喚き続ける。テルルはそんな彼女を横からなだめつつ、やはりクロムへと不安そうな表情を向ける。

「でも…本当に、向かわなくて大丈夫なの…？　もし、ネオン達に何かあったら…」

「そうよ！！　そうっ…万が一「あいつら」が追ってたりしたら、取り返しがつかないことになるわよ！？」

「うん…昼間もこの近くのどこかにいた訳だから…」

「え、マジで！？　ちょっと本当に危ないじゃないのよ！？　ネオン達の後つけていったかもしれないじゃない！！」

テルルの相槌にリンは心底驚いて、更にボルテージを上げる。そんな中クロムはようやく、無表情のままに口を開いた。

「…さほど心配は無いだろう。『奴ら』がああ二人の後を追った可能性は低い」

「どうして、そんなことが言いきれるのよ！？」

「付いていった気配を感じなかった」

「…はあ？　…――」

クロムの返答に、苛立ち収まらぬリンは不審気に眉を歪めたが…徐

々にその表情が変化する。

「…恐らく、昼間の段階で当たりをつけていたんだろう」

そう言い捨てる、クロムは軽く息をついた。ややぞんざいになっているような彼の様子に、いまだ理解の出来ていないテルルは目を瞬かせていたが：

「……いるのね？」

「ああ」

「――」

強張ったような表情で視線だけを窓の外へ向けるリンの様子を見て、電流が走ったように状況を把握した。

呆然とするテルルの顔から血の気が引いていき、そのまま床にフラフラと崩れ落ちる。

「この宿を囲っている。…先ほどの連中が来る前からな」

「そんな…」

「今となっては、こちらの状況の大体を把握出来ていると考えていいだろう。ネオンが宿を出ていったことにも当然気付いているはずだ」

「……ネオンを追うべきだわ」

リンが陰しい表情でクロムを睨む。しかし、クロムは首を横に振っ

た。

「現時点で、『奴ら』が動く様子は感じられん。ここを離れるそぶりもない…であれば、こちらから安易に動くことは危険だ。居場所を知られ、ネオンを“泳がされている”状況では、完全に後手だからな。今からネオンを追ったとしても、奴らを出し抜けるとは考えにくい」

「だからって…何もしないでここにいるつもり!？」

「こちらが動けば動き出す腹積もりなのだろう。今こちらがいかなる行動を起こそうが、『奴ら』の術中に嵌っていくだろうことは目に見えている」

「じゃあ、ネオンの居場所まではわかっていない？」

「…言いきれんがな。奴らがネオンをどうするつもりか…何を考えようが全て憶測の範疇を出ない。しかし現状からして、こちらが動いて居場所を明かすことは得策ではないな。同じように、今のあの連中に下手に動いてもらっても、ネオンの身が危うくなるだけだ」

「そっか…それで…」

テルルは青ざめながらも、なんとなく納得出来たような面持ちを浮かべた。しかし、リンは変わらず苛立った表情を見せる。

「でもっ…今囲われてる訳よね? いつ襲ってくるか…わからないじゃない!」

「いや、「奴ら」は秘密裏に動く…いくら深夜とはいえ、街中でこちらへ仕掛けてくる可能性は低いだろう。それに、気配を消していない」

「どういふことよ？」

「…何かを仕掛けたいのなら、消して来るはずだ。しかしそんな様子は無い…逆に、誇示するような殺気に向けてきている。それでいて、ネオンがここを出た時、「奴ら」は微塵も乱さなかった…あいつ単独で好きに動かせようとする意図を感じた」

「…足止めされてる？」

「かもしれない」

テルルの言葉にクロムは軽く頷き、切れ長の眼をわずかに細めた。

「……」

そんな彼の顔を見て、テルルは口をつぐみ、視線を床へと伏せた。リンが依然クロムへ詰める。

「こっちがマークされてるとして…ネオンの方は結局どうなのよ？」

「「奴ら」の最終的な狙いは、ネオンだ。ネオンを単独で動かせ、こちらとの接触を断とうとする意図が、あいつに向けられていることに変わりは無い。「奴ら」が後を追っている可能性は低い…が、だからといって

安全な状況とはとても言えんだろうな」

「……やっぱり危ないんじゃないのよお!!」

「奴らの手の内の下にある以上、それは避けられんだろう。ただし……いつもとは明らかに違う行動パターンと読める。……ネオンには何か別の思惑が仕掛けられているのかもしれない」

「?? ……『別の思惑』って？」

リンの問いには答えず、クロムはそれきり黙ったまま、虚空を睥睨んでいた。

「……う……」

冷たい土が頬に触れているのが、少しずつ回復する意識を通して感じられてきた。

どれくらい気を失っていたのだろうか。視界に見える景色は闇で、ごく近くのものだけがうすぼんやりと見渡せる程度だ。

シドは意識を取り戻しながら、記憶が飛ぶ寸前までを思い出す。魔犬に追い詰められ、攻撃を喰らい、背後の崖に落とされて……

周囲は静寂に包まれていて、葉が擦れるかすかなざわめきだけが耳

に届く。

魔犬は姿を消しているようだった。崖には落ちなかったのか、魔術師に全て回収されたのか――

「うゝ…っ…」

シドは身体を動かそうとして、全身に響くあまりの痛みで顔を歪ませた。斬られようが、殴られようが、傷痕だけはすぐに消えてしまうがその痛みは残ったままだ。どれだけの高低差から落とされたのか見当が

つかないが、相当激しく身体を打ちつけてしまったようだ。衝撃で骨も何箇所かいつているようで、

もう既に繋がっているものの、折れた部分が激痛を訴えていた。

わずかに力を入れるだけで、身体中に刺すような痛みを覚えたが…

シドは上半身だけでも起き上がろうとする。

「…ネ……オ……」

シドは、一緒に落ちたネオンを探そうとしていた。単純に落下しただけなら、二人の位置はそれほどバラバラには

なっていないはずだ。無論崖上での段階で、無事であるとは思っていないが――

「…!」

霞む視界の中、シドは数メートル先の地面に、突き刺さったミドルソードを確認する。木々の間から届く

月明かりに照らされて、その身はほのかに銀色の光を放っていた。そして、その傍らには…

「…ネオ…ン…!!」

ネオンは緑色の頭をこちらへ向けて、仰向けに横たわっていた。気付いている様子は無い。

シドは軋む身体を引きずりながら、ネオンへと近寄っていく。震える手で鎮痛剤を飲み下し、ようやくの思いで上体を起こして、ネオンの頬に手を当てた。

「…!!」

次いですぐさま鼓動を確認し、生きていることを確認する。しかし…彼の身体は冷え切っており、体中の衣服が裂け、大なり小なりの傷口から血をにじませていた。頭の下地面は、大きな範囲で濡れていて…それが何であるのかは、想像に難くなかった。

とりあえずも即刻、ネオンの頭に手を当てて応急処置を施すが…シドの心拍数は急激に高なり、顔から冷や汗を垂れ流す。

ネオンの状態は、かなり危険だった。どれくらいの時間、このままであったのか…かえって考えたくない事実だった。

「…ネオン…!!」

シドは頭の中が真っ白になっていた。我を忘れてネオンにすがりつき、彼の全身に治療を施す。

しかし、その全てが徒労だった。シドの力では怪我を治すことが出来ても、意識を取り戻すことも、体力を回復させることも出来ないのだ。

シドの目の前で、ネオンは刻々とその生気を失っていく。
鼓動は弱々しく脈打ち、体温が急激に失われていく。

「ネオン…、頼む…起きてくれ…!!」

絶望感に囚われ、シドは唇を噛みしめながら首を垂れた。

とその時…ふいに辺りがなんとなく、ぼんやりと明るくなっているように感じた。一瞬自分の頭が混乱しているせいかと思いかけたが、視界の先にネオンの青白くなった指先が鮮明に見え、さっきまでの景色から明度が変わっていることをはつきりと理解する。

シドは虚ろ気な目のまま、緩慢な動作で頭を上げ…そして、目の前の光景に硬直した。

「――…」

それは決して、月明かりのせいではなく…ネオンの身体だけを包むように、おぼろげに光り輝いていた。

数え切れないほどの眩い金色の粒子が闇夜に漂い、ゆっくりと彼の身体に降り注ぐ。よく見るとそれは、

ネオンの身体から舞い上がり、そして再び彼の身体に吸い込まれていつているようだった。

止め処無く続くその光景の中で、ネオンの身体中に刻まれた傷は癒えていき、血の気も徐々に取り戻していく。

シドは完全に言葉を失ったまま、彼の様子を見守り続けていた。

光る粒子は段々と微量になり、やがて最後の一粒がネオンの中へと

消えていくと、周囲は先ほどまでの闇を取り戻す。

ネオンは何事も無かったかのように、変わらず静かに仰臥していた。シドは再び彼の顔に触れ、体温も取り戻していることを確認する。

そのまましばらく、ネオンの顔を見下ろしていたが：

「――大丈夫よ、その子は簡単には死なないから」

ふいに背後から聞こえた声に、身を跳ね上がらせ、眼を見開いたまま振り向く。

黒く生い茂る木々の間から、声の主はゆっくりとその姿を現す。闇に溶け入るような漆黒の長い髪に、

濃い青紫色のロングワンピース姿の女性は、シドへ向けて柔らかく微笑んだ。

「そんなに驚かなくてもいいわ。私は“あなたの”敵じゃない」

「――誰…だ…?」

「……」

シドの問いには答えることなく、女性は軽い足取りで彼に近付き、傍らにしゃがみ込んだ。

突然のことで声を発せずに、身を仰け反るシドを置いて、ネオンの様子を見る。

「…問題無いわね。だいぶ『消費』したから、気付くのは明けてからになると思うけど」

「あ…あの…」

「見たんでしょう？」

驚愕の中から途切れ途切れに口を動かすシドへ、女性は顔を向けた。彼女の、深い海のような瑠璃紺色の瞳が、射るようにシドを見据える。

「あれが、この子の『力』」

「……」

二の句が次げないシドの様子を、女性は今度は怪訝そうな表情で覗いた。

「あなたの方が、よっぽど大丈夫じゃないみたいね…」

「え…」

そう言うと、女性は白髪を掻き上げるように、シドの頭に手を置いた。途端、シドの身体がガクンと軽くなる。

「っ！？」

あまりの落差に、思わずシドは立ち膝の姿勢から尻餅をついてしまった。その様子に、女性は可笑しそうに少し笑う。

「身体の痛みと疲れを取ったわ。でも、一時的なものだから…またすぐにぶり返してくると思うけど。」

私では、完全には治せそうにないわね」

「貴女は…魔法士なのか？」

「そんなところよ」

「…ありがとう…」

「いいえ」

そう言うと、女性はさっと立ち上がり、シドから距離を置く。同じように立ち上がった彼を、真っ直ぐに見つめた。

「あなたから、悪意のあるものの気を感じるわ。それともう一つ…『対となるもの』の気」

「……！？」

「あなたの『呪い』は、対になっているの。あなたが受けた痛みを、分つ存在がいる。あなたが苦しめば苦しむほど、『対となる存在』にも苦しみが伝わるわ」

「！？……どういことなんだ、それは？ 貴女は何を知っているんだ…！？」

「それから、もう一つ」

急に自身のことについて説かれ、驚いたシドは女性を問い詰めるが、彼女はあっさりと話をそらした。彼女の眼が、うっすらと細められる。

「今あなたがいるパーティは、きっとあなたの力になる。けれど…『呪い』が解けたなら、パーティからは別れた方がいいわ」

「――…!!」

シドは彼女の言葉を、眼を見開かせたまま受け止めていた。

女性は、シドの顔を黙って見返していたが…やがて再び微笑を浮かべる。

「…宿へ戻りなさい。今夜はもう、あなたを襲うものは現れないから」

「……」

「ネオンを宜しくね」

そう言い残すと、女性はシドの目の前で、霧のように消えて無くなった。

シドは確かに女性のいた所を凝視したまま、しばらく立ち尽くしていた。

3日日夜…邂逅（4）（後書き）

次回更新予定日…2010／9／1

登場人物設定を更新しました。既存設定に若干修正有。

3日目夜…邂逅（5）

パーク街を囲むようにそびえ立つ山並みは薄闇に包まれ、その東の空の稜線からは段々と、淡い光が覗き始める。

シドとネオンが宿へ戻って来た頃には、そんな時分になっていた。

結局、ネオンの意識が戻ることは終ぞ無く、シドは森からここまでの長い道程をずっと、彼を背に担いで歩き続けてきていた。

先程邂逅した魔法士のお陰で、それほど負担が掛からずに背負えてきていたが、さすがに息を切らした

シドの額には汗が光り、宿を視界に捉えた時にはやや気が抜けてしまったのか、よろっとその場にしゃがみ込んだ。

背に被さるネオンだけは落とさないよう体勢を保ちながら、長く息を吐き出す。

「…！」

そして、何気なく顔を上げた先に、一瞬目を見張り…やがてその緊張を解き…再び立ち上がった。

シドの視線の先には、彼らを待ち構えるように赤毛の男が宿正面の外壁に寄りかかり、こちらへ視線を送っていた。

うつむき加減ではあるが、クロムの前髪の間から覗く眼は、まだ薄暗い景色を貫くように鋭く光り、シドを見据えていた。

『睨む』とも言うべき凝視だった。

「…あ…」

立ちこめる沈黙に、たまらずシドは口を開け：言葉を探す。

「…済まない：抜け出したりして。ちょっとした理由があって、その…」

「そいつを渡せ」

しかし、そう言いかけたシドの言葉を、クロムは無下に切る。

「……」

それきり黙り、シドはネオンをクロムへ渡す。クロムは軽々とネオンを抱え上げると、シドへ見向きもせずには踵を返す。そしてそのまま、何も言わずに宿へと向かって行った。

「…っ、ま、待ってくれ」

シドはたまらず声をかける。クロムは背を向けたまま立ち止まる。

「…そ…の…、……」

シドは小さく口を開きかけたが、すぐに途切れさせてしまった。

シドは帰り道ずっと：聞こうか聞くまいか、思いを巡らせていた。先刻、自分の目の前で起こったことを：

自分の持つ知識では説明しきれない、不可思議で神秘的な、あの光景を。

しばしの沈黙の後：やがてその迷いは、持ち前の好奇心が後押ししていた。

「…とても…不思議なことが起こったんだ」

こんな口火の開き方では、かなり滑稽で、とりとめが無いとはわかっていた。しかし、自分の目の前で起きた稀有な現象を口にするとなれば、これが最も端的だった。

「2人…崖から落ちたんだ。ひどい怪我をした。俺も…もちろん、ネオンも」

シドは足許へ視線を彷徨わせながら、言葉を重ね続けた。

「俺は…怪我しか治せないから…ネオンを助けることが出来なかった。黙って、ネオンを見守るしかなかった…でも」

シドは顔を上げ、クロムの後頭部へ視線を投げかける。

「ネオンは…自分自身で完全に回復してしまった…怪我也、活力も…なにかも」

クロムは彼から背を向けたまま、沈黙を続けていた。

「…俺は、ネオンに、自分と同じような能力があるんじゃないかと思いかけた。でも…どこかが違う…ネオン自身が何かをするというより…『何か』に“守られている”ように見えたんだ。ネオンの中にいる『存在』が、ネオンを救っているように…思えた」

シドは自身が感じたことを、そのまま言葉に表していた。自分が黙る度に訪れる無音に幾分か怯えるようにしながら、慎重に

言葉を重ね続ける。

「…初めて見たんだ…あんな光景は。…魔法でも魔術でもない、何か別の力が、働いてるんじゃないかって」

なおも口を閉ざしたままのクロムへ迫るように、食い入るような視線を向け続ける。

そして、ぽつりと核心を放つ。

「…ネオンは…一体何者なんだ…？」

耳鳴りのするような静寂が、2人の周囲に充満していた。張り詰め、重苦しい空気が立ち込めていた。

「……」

「君は、知っているんじゃないのか…？　だから、ネオンを――」

「お前に話す必要は無い」

しかしシドの弁を遮るようにそう一言言い捨て、クロムは再び歩き出す。

「…な…」

「わからないか？」

呼び止めようとするシドに、クロムは真っ直ぐ振り返った。

「わかりやすく言おう、『お前にネオンのことを知る資格は無い』」

「……！」

「お前の言葉は偽りだらけだ。自分のこともろくに言えない者が、他人の何を知る？」

クロムに投げ掛けられた言葉が、シドの頭に大きく響く。シドは大きく目を見張り……次いでゆっくりと首を垂れ、力無く目を伏せた。

「お前自身が一番身に沁みて理解しているだろうが。何が目的で欺き続けているのか知りたくは無いがな」

不意に、クロムは何かを指ではじき、シドへ投げて寄越す。弧を描き、シドの足許に落ちたそれは……小さな白い錠剤だった。

「……その内廃人になるぞ」

「……」

クロムはただ無表情に、それきり黙ってシドを見やる。

彼はその視線は受け止めず、ただ薬の落ちた下方へと、瞼を落としていた。

やがてクロムが、静かに口を開く。

「パーティを抜けろ」

その彼の言葉に、シドは虚ろ気な目のまま顔を上げた。

「お前が見たこと…それが全てだ。このパーティは、お前が考えているほど甘くはない。既に目的を抱える現状で、お前の持つ『別の目的』に付き合う余裕は無いし、そんな片手間な立場のお前がついて来れるとは思えん」

「……」

「生き延びようとするのなら、それなりの覚悟が要る。…お前には、局面で自らの死を回避出来る成算があるのか？」

クロムの言葉は、頼り無げに立ち尽くすシドを、容赦無く貫いた。シドは返答出来ないまま、何か思いを巡らすように、クロムを…その背に預けられるネオンを、ぼんやりと見続けていた。

クロムは一呼吸置くように、息をつく。

「…正直なところ、ネオンはお前に興味を注がれている。今回も、それが元でネオンが勝手に付いていったんだろう。そしてその結果として、お前の個人的なトラブルに巻き込まれた」

「……」

「元を辿れば、こいつ自身が自ら危険を招いたことにはなるが…そもそも『お前という存在』が無ければ、今回のことは無かったはずだ。先にも話した通り、俺達には『目的』がある…それ以外のところで、危害が及ぶことは望んでいない」

淡々と言葉を並べながらも、クロムは厳しい視線をシドへ向けていた。無表情をたたえてはいたが、今にも激昂しそうな感情を、寸でのところで抑え込んでいるようだった。

「お前がいることで、この先また同じようなことが起きる可能性がある。そうなった場合に：同じように無事である保証は何も無い」

クロムのシドを見る視線に、殺気が過る。

「その時には：そうなる前に、俺はお前を斬る」

「……」

「お前の身のためでもある。：結論は早急に出せ」

「…ネオン、シド：！！」

と、そこへクロムの頭上から、やや潜めた風な女性の声が聞こえ、窓からリンが顔を出す。

その甲高い声音を聞いて、シドは我に返ったように顔を上げ、そして今一度クロムの方へ視線を戻す。しかし

その時には、彼の姿は宿の奥へ消え行っていた。

代わりに宿の入り口からテルルが姿を現し、呆然とした様子で突っ立つシドへ駆け寄る。

「シド：！ 大丈夫！？ 怪我は無いの？」

「あ、ああ…、……」

そう彼女へ答えた次の瞬間、シドはその場に崩れ落ちた。眩暈と共に、全身に突き刺さるような痛みと、途方もなく重い倦怠感が襲って来る。

先ほどの魔法士が掛けた効力が切れたのだと、シドはすぐに把握した。

「う……」

突然の変調に気が遠のきそうになりながら、目の前に転がる白い錠剤を視界に捉える。思わず条件反射的に手を伸ばし、掴みかけるが…その拳は手前で空を握り、シドは眼を固く閉じる。

「シド…!?!」

「…大丈夫…」

様子に驚いて支えるように手を掛けるテルルに、彼はそう呟きながら、力無げの笑顔を見せた。

「…大丈夫……」

心の奥で、自身に言い聞かせるように。

宿に引き上げられたネオンは、直ちにベッドへ寝かされた。

「…気…失ってるだけなのよね？ 怪我とか…してないみたいだし…」

「…そうみたいだね…」

どれだけ揺り動かされても全く起きる気配が無いネオンの様子に、テルルとリンは首を傾げながらも不安気な表情を見せていた。

そして、その後方で同じくベッドに横になっているシドへ振り返る。

「でも…あまり大事になってないみたいで良かった…2人共無事に帰ってきて、本当に良かった…」

「ホントよく、心配したんだからね、全くっ！！」

「…すまなかった」

二人の様子に、シドは薄く笑う。

意識を戻さない癖やけに血色の良いネオンに比べ、シドは色白の肌を更に蒼白にさせ、かなり疲弊しているようだったが、ネオンをここまでずっと背負ってきたと聞き、2人は概ねそのせいであると結論付けたようだ。

「こんなこと、これっきりにしてよね！ 夜中に起こされるのはもう勘弁！ 美容に悪いんだから、その辺の気遣いを心得て欲しいもんだわっ」

「リン…そのくらいで」

「さっきまでだって、大変だったのよ!？ あんな深夜に――」

「リン！ シドだって疲れてるんだから…寝かせてあげてよ」

不眠と懸念でよほど抑圧されていたのか、徹夜明けの高揚感も相まって、リンは持ち前のマシンガントークが発症しそうになっていた。

力無く床に伏せるシドに食いかかるように弁を続けようとする彼女を、テルルがすかさず手前で制する。

「私だって、寝足りないんだから――」

「だから、リンも寝てていいってば」

「あんたねえ、今さら寝られると思ってんの!？ こんなに目がラシランなのに!？」

「…もー、どうしろっていうの…」

「…テルル」

ぶう垂れながら、支離滅裂な言動を繰り返すリンを手余すテルルへ向けて、シドがふいに後ろから声を掛ける。

「…？ 何？ シド…」

そう振り返ったテルルの目に映ったシドは…やや強張った表情を向けていた。

テルルの顔に、怪訝な表情が浮かぶ。

「…どうしたの…?」

「……今の、リンの…。何か、あったのか…?」

「! ——…」

彼の言葉を受けて、その表情にテルルは何かを感じ取ったのか、少し沈黙し…そして小さく口を開いた。

「…人が、訪ねてきたの。…シドを知る人が」

ネオンを宿に運び、後処置を女性陣に任せると、クロムは再び宿の外へ出向いた。徐々に明るむ周囲の中、身を潜めるように宿の裏手に回り、ダスト横の外壁に背を付く。

「……」

クロムはただ黙ったまま下方へ視線を落とし…何気なしに自分の左手を眺め続けていた。

どこか手持無沙汰な一時。

…こういう時、どうしてか思い出したくも無い記憶が、断片的に脳裏に浮かんでくる。

——あなたって、理由付けが無いと生きられない人なのね。『ただなんとなく』じゃ、どうして駄目なのかしら——

——まるで“何か”に“生かされてる”みたい。“何か”が無くなったら…あなたは消えて無くなってしまおうの？——

「……」

クロムは、ゆっくりと目を閉じた。

どれだけ時間が経とうとも、瞼の裏に焼き付いて消えることの無い光景。

決して忘れることの無い、過去。

「——いいように振り回されているようだな」

刹那、薄暗がりの中“姿なき”が静かに嗤った。その一瞬の後に、周囲の明度が闇に吞まれるように落ちる。

突如にして訪れる不自然な闇の中、クロムは瞬時に意識を高ぶらせ…そして確かにその先を捉え、眼を剥く。

彼の視線の先に、漆黒の外套が音も無く翻った。

「影」が、現れた。

「なんだこの醜態は。…故意か？」

いつの間にか、宿の壁を背にしたクロムの全方向から、「影」が姿を現していた。クロムは丸腰のまま…完全に囲まれる形になっていた。

クロムに話しかける男——『バルディッシュ』は、「影」らの中心から歩を進め、ゆっくりと彼に近付いていく。

「毛色の違うものを加えているようだな…仲間と認めた訳ではない

ようだがな」

沈黙を守ったまま睨み続けるクロムに、『彼』は余裕たっぷりに話しかける。

「『アルビノ』か：「ATOMIA」でもそれなりに駆除は進んでいると思っていたが、まだ狩り残しがいたか。
…まあそんなことはどうでもいい」

そう言葉を口にししながら、『彼』は依然ゆったりとした歩調で、しかし確実に、壁際のクロムを一步步つ追いつめていた。

「…お前、アレに同じ臭いを感じているな？」

頑なだったクロムの口元が、僅かに歪む。隙を逃さぬ『バルディッシュ』の目が、怪しく光った。

「『アルビノ』と『人斬り』…思えば近しい存在だな。人から避けられ、蔑まれ、孤独に地を這いつくばり、
そして人知れず死に絶える」

「……」

「なんだ、自分の立場も忘れたか？」

2人の間が、1メートルほどにまで縮まる。距離を詰めていた『彼の足が止まり、その黒い上背が、クロムを覆うように立ちはだかった。

『バルディッシュ』はクロムの身体を透かし見るように眺め、嘲笑

う。

「お前のその身体に刻まれた傷が、こびりついた人間の血が、「お前」である揺ぎない証だ」

「……」

「…まさか、『剣士』に成り上がったとも思っただろうな？ 勘違いするなよ…お前の傷跡が疼く限り、お前の居場所は闇の中にしか無い…光を求めるべき身分ではないということだ。そろそろ考えを改めたらどうだ…？」

嫌らしく口角を上げながら語りかける『バルディッシュ』だったが、その言にもクロムは変わらず、殺意を込めた眼で『彼』を睨み続けていた。

「…釣れんな」

その形相に、『バルディッシュ』はき捨てるように苦笑うと、実に自然な動作で、黒いグローブをはめた手を彼の左頬へ伸ばす。しかしその手を、クロムは瞬時に手強く払った。

「!!」

その挙動に、周りに控えていた「影」連中が一斉に沸き起こり、クロムへ向かって詰め寄ろうとするが――

『バルディッシュ』はさっと左手をかざし、従者達を制した。

「今回は、やり合うのが目的でここまで出張って来た訳ではない…お前に一つ、忠告を」

『彼』は依然、含みを込めた表情で、クロムを見下ろす。

「…気付いているだろうが、もうあらかた“動き出している”。…もちろん、『あれ』もな。恐らく総じて、

我らの造り上げた筋書き通りに事は進んでいくだろう」

自分の言動にクロムが見せる変化の一つも見逃すまいと、舐めるような視線を与え続ける。

「お前達がどう手を返そうとも、事の顛末は変わらない。…我らに抗うことがどれだけ無意味なことか、自分の無力さに打ちひしがれるがいい」

そして『バルディッシュ』は再び、マントを翻す。

「お前はエドラーを守っているつもりだろうが、その実は、お前自身を奴を抛り所に行っているだけだ。

エドラーからすれば、お前もあのアルビノも同じだ…足枷となる存在であることに変わりはない」

そしてゆつくりと、クロムから面を外していく。

「…今一度、自分の力量たるものを省みるんだな。お前の生きる意味は、エドラーにとっては何の糧にもならないと、肝に命じておけよ」

『彼』がクロムから完全に視線を外した時には、[影]は跡形もなく消え去っていた。

まるで、最初から何も無かったかのように…後には、静寂と明度を

取り戻した薄闇と、ただ一人佇むクロムだけが残る。

クロムはしばらくの間、壁に背を預けた姿勢のまま、足許へ視線を落としていた。

そしてふいに身を起こし：静かに宿入り口へと戻っていった。

3日目夜…邂逅(5)(後書き)

次回更新予定日…2010/10/1

— monologue —

物心ついた頃から一度も離れたことが無かった故郷を離れ、旅を始めたきっかけは、父の失踪だった。

全くの着のみ着のまま、下準備も何も無いまま、ただ闇雲に村を飛び出た。すぐに父が見つかるかと踏んでいて、

遠出するだろうことなど頭の片隅にも無かったからだ。それは、自分を連れ戻そうと後を追ってきたテルルも

同じだった。

これほど先が見えない…『終わり』があるのかさえ分からない長旅になろうとは、当初は誰も想像していなかった。

父の足取りを追い、次第に父が消えた理由を探し求めるようになり、それはまたやがて別の目的へと形を変え…

そんな風に、背中はずえ何かに後押しされ続けていった。

既に、立ち止まることなど出来ない状況にまで、足を踏み入れてしまっていたのだ。

旅に出なかったら…父を追わなければ、今頃自分はどうなっていただろうかと、ぼんやり物思いにふけるとふと、

そんな思いが過ることがある。

苦しい。逃げたい。どうして“自分”なのか――

…辛いだろうけど、それは持って生まれたあなたの力なの。あなた自身なの…

こんな力、おれは要らない

…身捨てては駄目よ。あなたの元を離れれば、力は暴走してしまうわ…

そんなこと言ったって、全然おれの言うことなんて聞きやしないじゃないか

…焦らずに、じっくり付き合えばいいの。最後は必ず、『器』であるあなたを守るから。委ねていればいい…
でもかといって、支配されてはいけないわ。あなた自身が喰われてしまうから…

そんな難しいこと、おれには出来ないよ

…決めつけないで。『選ばれた者』と思う必要は無いけど、相性が良いからこそ、あなたに備わったもののなのだから。だから、これだけは守ってね…

何？

…あなたの持つ力は、決して誰かに利用されてはならないわ。あなたの意志で、あなたのために…あなたの思う誰かのために使うこと…

おれの意志で…

…あなたの力も、きっとそう望んでいるはずよ。だから、お願いね…

⋮

— **monologue** — (後書き)

次回更新予定日…2010／11／1
…なんとも薄っぺらくて、申し訳ありません…

4日目…シド(1)

「…あ、起きた？」

「……」

耳の遠くから木霊するように頭に届いた声に、ネオンは意識を取り戻す。

何となく、全身が気だるいように感じて…緩慢な動作でかぶりを揺り動かし、身体を起こそうと思いかけたところで、既に自分が上半身だけ起き上がっていることによりやく気付く。どうやら、意識が戻る少し前に目だけが覚めていたようだ。

どうにもはっきりしない自分の思考力を取り戻そうと、ネオンはプルプルと頭を振った。

そんなネオンの行動に、彼に付いていたテルルが怪訝な面持ちでネオンの傍へ寄る。

「…大丈夫？　どこか痛いのか？」

「…ううん」

段々鮮明に覚醒する中で、ネオンは先ほどからしきりに自分の身体を確かめていた。

目覚めると共に、呼び起された記憶…シドと二人魔犬に追われ、崖際に追いやられ、一斉に飛び掛かれた、あの惨劇。全身至るところを噛みつかれ、爪を立てられ…真黒な体躯に覆われて視界が効かなくなり、もはや

自分がどこを向いているのか、全くわからなくなっていた。シドの叫び声はネオンには届かず、魔犬の生暖かい吐息だけが耳元でうるさいくらいに響く中、徐々に意識が遠のいていった。

そして…

そこから先——今に至るまでの間の記憶が、完全に飛んでいた。

「……」

ネオンは、自分の腕を強く握る。

あれだけの数の魔犬にいたぶられたはずなのに、自分の肌には傷一つ出来てない。もちろん、身体のどこにも痛みを感じない。

空白の時間。不可解な自分の身体。

「…テルル」

身を起した姿勢のまま顔を深く懷にうずめる自分を、覗き込むように見守っていたテルルに、ぼそりとつぶやいた。

「…『発動』…させたかもしれない」

「…うん」

ネオンのその、か細い言葉に…やや眉を寄せていたテルルが、若干気持ちは緩んだような顔になる。

「クロムが、さっき言ってたから。多分、そうだろうって」

「…そっか」

息をつくように、小さく声を漏らしたネオンは、そのまま再び沈黙した。

テルルはその彼の様子を見つめていたが…やがて至って普通のトーンで、ネオンに声を掛ける。

「あまり気にすること無いよ。…シドも無事戻って来れてたし」

「！」

ネオンが、とても重大なことに気付いたようにテルルへ勢い良く顔を向けると、テルルは少し驚いたような顔をしたものの、すぐに笑って見せた。

「ここまで、あなたをおぶって来てくれたんだよ？」

「そ…だったのか…。…また迷惑かけちゃった…」

「うん、まあ…だいぶ疲れてたけど。でも、怪我はしてなかったみたいだったから」

「…そか」

「…二人とも無事なら、それでいいよ」

「…うん…」

テルルにそう赦され、ネオンは間を開けて少し頷くと、再び顔を伏せた。

「――それで？」

「え？」

急に何かを聞き返すような口ぶりになった彼女に、ネオンは今一度頭を上げて、視線を合わせる。

テルルはベッドの縁に腕を掛け、少しむくれたような顔になっていた。

「あたし達には、何か言うことは無いの？」

「…ああ…」

彼女の言葉に、ネオンはようやくはつきりと、我にかえたような表情になった。

すぐさまテルルへ向けて、ぺこりと頭を下げる。

「…ごめん、勝手に抜け出して」

「まったく…みんな揃って、寝てないんだからね？」

「ごめん」

「…もういいよ」

呆れたような溜息混じりではあったが、テルルは幾分か安心したような顔で、ネオンを見やっていた。

と、部屋の戸が開く音が聞こえ、テルルが音のした方へ振り返る。

「…起きたのか」

「うん」

その低めの声に、ネオンはおずおずとベッドから顔を出す。クロムはネオンの様子を確認するようにちらと視線を向けると、隣のベッドに腰掛けた。

「クロム…ごめん。おれ——」

「謝るくらいなら、最初から無茶な行動はしないでもらおうか」

「……」

口火を切ろうとしかけた所へ被さるように既にパターン化した正論を吐かれ、ネオンはしよげた様に閉口した。

しかしそう言うクロムは、別段怒っている訳でも無いようだった。相変わらずの無表情で…でもどこことなく、
疲れているように感じられた。

「…その様子だと、『自動制御』^{オート}だったようだな」

「…うん…何も覚えてない。でも思い出せる限りでは、結構やばい状況だったから…」

「死に目に遭って、土壇場で『発動』したというところだろう。…それが無ければ、どうなっていたかわからんな」

「……」

クロムの口から淡々と紡ぎ出される言葉で逆に恐怖感を煽られたのか、ネオンは不意に悪寒を覚え、縮こまる。

その彼の様子を見て：クロムはやや呆れた風に頬杖をついた。

「…毎度のことを、そう何度も言いたくは無いが：お前の能力は、いまだ不安定だ。頼りきれないものに生死を預けるような真似はするな」

「…わ：かってるけど——」

「…もう少し自己管理出来るようになれ。能力ではなく、『お前自身』のな」

「——：」

ネオンは二の句が次げず、閉口したままうつむいてしまった。クロムの言葉は、夜中の戦闘中に自分が感じたことそのものだった。：自身で解っていることを人から指摘されることほど、堪えるものは無い。

そんなネオンに、クロムはただ一瞥をくれただけですぐに視線をそらし、その場を立つ。

「しばらく寝ているといい。まだ完全に体力が戻っていないだろう。：風呂浴びて来る。テルル、お前も適当に休めよ」

「うん」

「あのさ、…シドは…下？」

何事も無くその場が終わろうとしたところで…ネオンがふと口にした言葉に、今まで黙って聞いていたテルルが少し動揺し、思わずクロムを仰ぐ。

「おれ、シドにも謝らなきゃ…」

「…っ…ネオン、あのねっ」

そのままベッドから這い出ようとするネオンを引き留めるように、テルルは慌てた様子で彼の前に出る。

「……シド…、出て行くって」

「…え」

ネオンは一瞬虚を突かれたように固まり、テルルを見上げた。

「な…なんでっ…」

彼の問いかけに、テルルは言いためらう様に視線を泳がせているだけで…ネオンは次いでクロムを見上げたが、彼もまた黙ったまま、ネオンを見据える。

しかしてネオンには、何となく事の次第を理解できたような気がした。ガバッと起き上がり、目の前に無表情で落ち着く彼へ、激しく詰め寄った。

「どうしてっ…クロム!!」

「最終的に決めたのは、あいつの意志だ」

「そうだとっても、駄目なんだっ…シドがやろうとしてることは、あいつ一人じゃ無理なんだ!!」

「ネオンっ…」

「おれは、あいつに手を貸すって決めたんだ…約束したんだ!!…話だけでもっ…みんなに聞いて欲しいんだよ!!」

「要らんな」

「クロム!!!!」

掴みかかりそうになっているネオンを、テルルが横から懸命に抑え続ける。が、クロムの佇まいは依然変わらない。

興奮し息を荒げるネオンに、落ち着いた風に言葉を返した。

「“お前”が手を貸して、今度は“本当に”解決できるのか？」

「っ……!!!!」

彼の問いに、ネオンは言葉を詰まらせた。涙目になったまま、唇を強く噛む。

そのまま視線を落とし、肩を震わせた。

「……どうして…協力してくれないんだよ…っ」

「余裕が無いからだ。…ネオン、この町に『影』が潜んでいる」

「…!!」

「お前の行動は、完全にマークされている。この状況で今回お前が襲われなかったは、『奴ら』の意図に過ぎないにしろ、幸運であったというべきだ」

息巻いた様子から一転して驚愕の表情を向けて来るネオンに対し、クロムは尚淡々とした口調で持論を続けた。

「この先を想定した時…『奴ら』が散るか、こちらが撒くかのどちらかが考えられる。…しかし、最悪“当たる”ことになった場合には…あの男を巻き添えにせざるを得ないだろうな」

「……」

「…そうなることが、お前の言う“協力”なのか？」

クロムにそう諭される中、ネオンは完全に沈黙してしまっていた。そんなネオンの様子を見て…クロムは息をつき、彼の頭に手を置いた。

「…少し頭を冷やせ」

そう言うと、軽く退けるように手を突く。たったそれだけの動作なのに、ネオンの身体は勢いよく後方に弾かれ、ベッドに倒れこんでしまった。

テルルはただ困惑したような表情で、そのまま部屋を後にするクロムを視線で追い、次いでネオンの顔を上から覗う。

「ネオン…」

しかしネオンは倒れたまま口を閉ざし、どこを見るでも無い虚ろ気な瞳を、宙に漂わせていた。

「——もう行くの？ 体力戻るまで、休んで行けばいいのに」

「…ああ」

後ろから、ダウントーンで声を掛けるリンに、コートを着込むシドは軽く振り向き、笑顔を見せた。

まだ、ようやく陽が昇り始め、辺りが明るくなってきた頃合いの時刻であったが…シドは既に宿の入り口にて出発の準備を済ませていた。

何とか起き上がれるようになったと同時に、早々と他メンバーに意志を告げた。ネオンはまだ目を覚まさないままだったが、ある意味好都合と思えた。

そして、建前上メンバー代表として、手隙のリンが彼の見送りに立っていた。テルルも付き添おうとしていたが、シドの方から断っていた。

これで二度目の別離となる訳だが…やはりどこか呆気無く、さっぱりとした彼の様子に、リンは少し口を尖らせる。

「折角、ちゃんと仲間になれたと思ったのに…」

「ごめん…でもやっぱり、一人で行くよ」

「…遠慮してるんじゃないの？」

「いや、自分の目的を果たしに行くだけだから」

「それをやるのに、私達は必要無いってわけね」

そう言い、拗ねたようにそっぽを向いてみせるリンに、シドは慌てて取り繕う。

「そうじゃないよ！ …君達にだって、元々の目的があるんだろ？」

「…そうだけど…」

「俺の方は、一人で充分だから。…ありがとう、色々と心配を掛けたけど…感謝してるよ」

「！！ つそれは…いいんだけどさっ」

彼に自然に微笑まれ、リンは思わず少し紅潮し…誤魔化すように視線を慌ててそらし、何となく腕を組んだ。

そして、ベルトを巻き、ややうつむき加減でいるシドの顔を下から窺う。

「…ねえ、本当に…ネオンには何も言わないでいいの？」

「……」

しかし、リンのその問いには答えず、ただ薄く浮かべた微笑を返し

ただけで…シドは荷物を手に取り、宿先へと足を運ぶ。リンは依然不服そうにシドの後姿を見送っていたが…出掛けた所ではたと彼と彼の足が止まった。

「――…？」

その様子にはリンは首を傾げ、ゆるりとシドの後を追ひ、宿の入り口へ近付いていく。

「何？　どしたの…って、あ」

顔を出したリンの視界――宿入り口の前には、茶色のフードコートで全身を隈無く覆った団体が頭を連ねていた。

その異様な姿の一団に、一瞬ギョツとしたリンだったが、すぐに昨夜突然押し入ってきた甲冑の騎士団連中だと理解出来た。

「…そう、この人達よ！　ゆうべ訪ねて来たのっ…って――」

リンはすぐさま、事の次第をシドに話して聞かせようと彼を見上げたが、そこでまた言葉が途切れる。

シドは、リンの声が聞こえていないのか…一点を見つめたまま、時が止まったかのように硬直していた。

その視線の先には――あの騎士団連中の『主』である、公爵夫人の姿があった。

見つめ合ったままの二人を、理由の読めないリンは交互に見比べる。

公爵夫人――イレーナは、被っていたフードを緩く上げて表情を現し、シドへ向け優雅な微笑を浮かべた。

「――…お久し振りね、
アルヴァ」

4日目…シド(1)(後書き)

次回更新予定日…2010/12/1

4日目…シド(2)

ファウンデニア

「F O U N D I A」王国。「A T O M I A」より北方に位置する、立憲君主国家である。

『立憲君主』とは語るものの、国政には国王の意思権限が大いに作用しており、事実上『絶対君主』に近い。

広大な国土故に中心の支配が行き届きにくい状況への解決策として、地方を複数の領土に分け、銘々に

王家一族やそれに近い者を領主として置いている。そうすること、ある程度自由な自治を行わせつつも、

国王の権威や志向が及ぶようになっていくという。

「F O U N D I A」最大の象徴は、国都バレンツを覆うように張り巡らされたうず高い城壁である。

地方の単なる商業都市や、のんびりとした田舎風景とは完全に一線を画すそれは、かつて諸外国との戦乱が

続いた時代に、国の中心である城と都を護るために造られたもので、沈静した現在はその役目行使する

ことはないが、それでもその緻密で整然とした石垣の有様は、代々血縁して長きに渡り続く、「F O U N D I A」国王の持つ強大な権力を如実に示すものである。

諸外国においてその姿を知る者からは、国王への畏怖、またある種の揶揄を込めて、『要塞』と呼ばれている。

また、国王の力を示す事項として王自らが『現人神』あらひとがみであることが挙げられる。

基本的に宗教という概念が無いこの世界において、国民を統制するための最善策として、古くより「FUNDIA」

では国王を神に準ずる存在（信仰の対象）として奉っている。「FUNDIA」国民は須らく国王を絶対的な存在

として認識し、その一言一句が自らへの勅旨であり、思し召しとなっているのである。

以上の要項から、「FUNDIA」は国風として非常に保守的である。

基本自給自足が整っており、国王が外国嫌いである理由から、諸外国元首との交流は必要最低限しか行われて

おらず、それを受けてか国民レベルでの国交もあまり活発ではない。“自分と同じ”である人間しか認めず、

少しでも違うと目の色を変えて恐怖し、毛嫌いする風潮が出来上がっているのだ。

その最たる影響を被ったのは、いわゆる外見に決定的な相違を持つ存在——『アルビノ』である。

『色素欠乏症』：その外見は、多種多様な髪色、瞳の色を持つ世界においても際立って異色な存在としての

立場に置かれ、扱いに差はあれど、どこの国でも何らかの特別な影響を受けて生活している。

「ATOMIA」においては、国政に影響を与えると信じられた『魔法士』、『魔術師』等への弾圧に乗じて理不尽な

迫害を受けることとなった訳だが、保守国家「FUNDIA」では元々、『アルビノ』に対する処遇が法によって

定められていた。

『アルビノ』として生を受けた者は、その存在を認めない。

生まれても国籍も戸籍も与えられず、名前を持つことすら許されない。家畜やペット以下の存在でしかないのである。

これでは本人はもちろんのこと、産んだ親もあまりに不憫であるように思えるが：「FOUNDIA」において

『アルビノ』は、「ATOMIA」でのそれとは比較にならない程の忌むべき存在――『厄』として扱われており、

それによって降りかかると信じられた災いから家を守るための解決策として、『産んだ』という事実そのものを

否定する必要があった。よって大抵は産んだ子を即殺め、産んでしまったことを“無かった”ことにする。

悲しいという感情はそこには無い。あるのはただ、恐怖のみ。

稀にそのような手段を下されず、生き延びる者もいるが：どれだけ

『存在』し続けようとも、それを肯定

されることは生涯無い。

そしてそれは、どのような身分であっても：例外は無い。

即刻リンは慌ただしい様子で、シドとイレーナ（とその護衛数名）を部屋へ入れた。

ベッドに放心していたネオンは直ちに起き上がったが、一気に増えた人口に驚きを隠せず、初お目見えの

イレーナ一行に目をキョトンとさせていた。

イレーナは昨夜と同じくラグソファへ落ち着き、テルルとリンが事情を知らないネオンに彼女の説明を簡単に

始める。その間もイレーナは、部屋にいるどの人間からも避けるように片隅に座り、無表情でうつむいている

シドへ視線をやっていた。彼と少しでも早く言葉を交わしたいような、やや焦燥感滲ませた表情で――

「…あいつ、いないのね。じゃ、やりやすい内に早く始めましょ」

苦笑いを浮かべるテルルを横目に、リンがこの場を仕切る。無言でイレーナへ視線を送り、彼女に言を促した。

それを受けてイレーナは頷くと…形のいい唇をゆつくりと動かし始める。

「お約束通り、出直して参りました。…我々が探していた者は…その男です」

そう静かに言うと、イレーナは確信を込めた目でシドを見つめた。

「確かなんですか？」

「その者の容姿と…その態度が、何よりの証拠です。…覚えているのでしょうか？」

イレーナはそう、シドに声を掛けた。彼女の問いを受けて、シドは少し顔を上げ…やがて諦めたように息をついた。

「…覚えていますよ。俺が、貴女を忘れることは無い」

「……」

シドの返答に、穏やかな調子で面していたイレーナの表情が、幾分か強張ったように見えた。

「9年振りですね…面と向かって言葉を交わすのは」

「…ずっと…2ヶ月も探していたのよ。まさか、国を離れているとは…」

「俺の立場からすれば、当然のことです」

「……」

「それで…久し振りの用向けとは、何事ですか？」

その問いに、イレーナは一旦シドから視線を離し、何かを思いつめるように眼を伏せた後…決意を込めた表情を上げる。

「国に…『F O U N D I A』に、戻ってきて欲しいのです」

イレーナの拳が、ぎゅっと力強く握られ、身に着けた薄桃色のワンピースの生地に、強い皺が刻まれる。

シドはしばらく呆気にとられた様子で彼女を凝視していたが…すぐに解き、眉を寄せる。

「…仰っていることが、よく解りませんが」

「急事です。一刻も早く我々と共に、都へ向かって頂戴」

「…どうして、今更…理由を聞かせて下さい」

「教えれば、ついて来てくれるのね？」

シドはイレーナからの切望するような視線を受けると、それを避けるようにうつむいた。

「…俺はあの国から出された身です。それを…軽々しく再び足を入れられる立場でも無いし、俺自身…二度と戻りたくはない」

「立場は私が保証するわ。だから…」

「俺は今、答えを申し上げたはずですよ」

「アルヴァ、貴方の御父上に由々しい事態が起こったと伝えても、戻らないつもり？」

「あ、あの…」

ややイレーナのボルテージが上がったところで、ネオンが横槍を入れた。

「おれ、全然話わかんないんだけど。…アルヴァって？ シドのことなのか？」

「貴様この小童…御館様へ向けて何たる無礼な口の利き方を…！」

会話の途中でいきなり切って入り、しかも初対面のイレーナに向けていきなり馴れ馴れしい口調と態度で話し始めようとするネオンへ、彼女の護衛として控える筋肉男達はすぐさま立ち膝を上げ、ネオンへ憤怒の表情を向ける。

「畏れ多くもランベルク城主イレーナ様に向かって…本来ならば、貴様等庶民など退席^{さげ}られて当然の場ぞ！

御館様の尊い御慈悲があつて、この場に居られるものと自覚せんか！！
もとより、貴様等に発言する権利は――」

「黙りなさい」

「し、しかしっ…」

「この方々の物言いには、偽りが無かった…ですからこうして、アルヴァに会えたのです。隠していても、いずれは国外へと広がる事実…今の我々に、無駄を費やす時間はありません。私は、この方々の協力を仰ぎたいの」

イレーナはそう言い切り、護衛達を制する。

リンとテルルは男達の剣幕に昨夜同様震え上がる心地がしたが、彼女の言葉に感心するように目を丸くしていた。

昨夜、クロムと交わした条件…こちらにもやむを得ない事情があったにしろ、その真意を明かすこと無いまま

かなり一方的な形で成立させてしまった取り決めを、彼女は律儀に守ってこの場にいる。

二人はこのイレーナという女性に、漠然とだが信頼できるものを感じていた。

イレーナは一呼吸入れた後、話を再開した。

「——そうね、仮の名を使っているのなら、判らなくて当然です…何と名乗っているのかしら？」

「……」

「…『シド』です」

彼女からの問いに何やら詰まっているシドの代わりに、テルルがおずおずと助け船を入れた。

「……そう…」

テルルの言葉を聞き、イレーナは強張った表情から若干頬を緩ませ、温かな視線をシドへ送る。

「話を続けるわね。アルヴァ…いえ、この場は『シド』としましう。貴方にとっては、もう関わりたくないことでしょうけど…どうしても聞いて欲しいのです」

「…何が…あったのですか」

「……『FUNDIA』国王が、崩御なさいました」

「…!!」

瞬間、シドの表情が凍りつく。そんな彼を見るも、イレーナは急ぐように話を進めていった。

「…わかりますね？ その意味が。貴方が必要なの」

「ま…待って下さい、俺には関係の無い話でしょう？ それに…後には――」

「オリバーは、国王の後を追うように床に伏せました。…今は危篤が続いているのよ」

「――…」

「つちよ…ちよっと…」

二人の応酬を、リンやテルル、ネオンは黙って見守っていたが…察しのいい女性陣のその表情が徐々に、
驚愕と疑惑の入り混じったものに変化していていた。
たまらず、リンが会話に口を挟み入る。

「あの…あんまりよく理解できないんだけど…もしかしてシドって、
「FOUNDIA」国王に関わりのある人…
なんですか？」

リンの問いにイレーナは言葉を止め、彼女の方へ真っ直ぐな面を向け…ゆっくりと頷いた。

「ええ。『アルヴァ・バレンツ・ファウンディア』…これがシドの
真の名」

「ファウンディア…!？」

「紛れも無く…今は無き第49代「FOUNDIA」国王、ガルシ

ア・バレンツ・ファウンディアの嫡男です」

「……」

イレーナの傍に控える護衛一同が、改めて座を正し、恭しくシドへ首を垂れた。

彼女の言とその様子を受けて：リンとテルルは完全に沈黙し、瞬きも出来ずにシドを見つめるしかなかった。

ネオンだけがいまだ、言葉の全ての意味を理解出来ていないのか目を瞬かせ、イレーナとシドとを交互に見比べる。

シドが、おもむろに立ち上がった。

「：出ます」

彼のその言葉に部屋内の誰もがギクリとするが、シドは息をつきながらも笑顔を送る。

「：心配しなくても、どこにも行かないよ。ただ、ちょっと独りになりたいから」

そう残すと、シドは静かに部屋を後にした。ネオンは彼の後を追おうと腰を浮かしかけたが：彼の言葉を自分に言い聞かせ、再び座り直す。

イレーナも同じように憂慮を込めた視線で彼を追っていたが：やがて再び正面を向いた。

「まだ混乱しているのかもしれないわ。突然、私が現れたから：当然ね、もう10年程も顔を合わせて

いなかったのですから…」

「…ところで、あなたはシドとは…?」

「!　　そういえば…私の身分をまだ明かしていなかったわ」

リンの当然なる疑問符に、イレーナは至って単純なことに気付いたように目を見開かせる。

「私は国王の弟である、先代フレイマー公の娘…シドの従姉に当たるわね」

そう言うと、イレーナはクスリと可愛らしく微笑い、シドに似通う涼やかに上がった目を柔らかに細めた。

彼女の言葉に、一同が納得のいった表情をする。

リンが頭の整理をするように、しどろもどろに話を再び進める。

「ええっと…つまり、シドは王様の息子だから、王子様ってことになるんですね?」

「ええ。それも早急に、国王となるべき人間なのです。ですが…肝心な継承権が、彼にはありません」

イレーナはそう力強く言い掛けるが、悔しそうに顔を歪ませる。

「『継承権』?」

「国王の位を譲られる権利を認めるものです。ある程度の順位は法で定められています、その明確な対象者は

即位中の国王によって証明される必要があります。しかし、シドに
対し国王が明言することは生涯無いままと
なってしまったのです」

「：どうということ？ 自分の息子なのに、何故？」

「――『存在』を認められていない。：そうだな？」

リンの投げかけた問いに、後方から答える声が聞こえてくる。部屋
内の全員が振り向くと、今時分風呂から
戻ったクロムの姿があった。

「そういえばクロムこの前、法律で決められてる国もあるって言っ
てたよね」

テルルの返答にクロムは「ああ」とだけ発し、部屋奥の椅子へ腰を
落とした。それきり黙り込み、いつも通りの
無感動な眼でこの場へ視線を送る。とりあえずは静観しようという
意思表示らしい。

イレーナはしばらくクロムへ視線を注いでいたが：やがて静かに頷
く。

「：あなた方のお話の通りです。外見からお判りのように、シドは
『アルビノ』と称される立場にあります。

我が国「F O U N D I A」では、『アルビノ』の人間に対する特別
な処遇が定められているのです」

「それが、『存在』のことですか？」

「ええ。まず、産まれても名を付けられません。名付けても、大抵

は意味を成さないからです」

「……“殺される”ってことですね？」

「っ！？」

リンの核心を突いた解釈に、今まで一声も発さなかったネオンが突然立ち上がった。

「どういうことだよ、それってっ…！？ 産んでおいて殺しちゃうなんて…何も悪いことしてねーじゃねえかよ…！」

「ネオン、落ち着いてよっ…ここはシドの話よ？」

「だってっ…！！！」

リンが興奮するネオンをなだめ…その姿を見るイレーナの表情が見る間に硬くなり、視線を落とす。

「私自身、この法に長年疑問を持ち続けているのです。ですが、それと比べ物にならない程長きに渡り、

「F O U N D I A」は歴史を刻んできてしまった」

「……」

「確かに太古は生活の端々に災いがついて回り、それを信じ、祓うことが当たり前でした。しかし今は…

少なくとも『アルビノ』に限っては、その対象では無いことが十分証明されているはずなのです。ですが……」

イレーナは何かを言いかけようとしたきり、言葉を切った。…これ以上何を弁じようとも、言い訳になると思ったのだろうか。彼女の顔には、如何ともし難い苦悩が表れているようだった。

——古くから広がってる言い伝えって、簡単に覆るものじゃないから——

ネオンは脳裏に、昨夜シドがネオンにぽつぽつと語った彼の胸の内を思い描いていた。

「…でも、シドにはちゃんと名前があるんですね？」

そこへ、ふとしたテルルの問いが上がる。イレーナははっと顔を上げ、頷いた。

「私の父が国王に言及したのです。本来ならば…いえ、真に正統なる、『FOUNDATION』の次期国王なのですから」

「…でも、継承権は発生しなかった」

「それについても…シドが城を後にすることになるまで、幾度と無く議論が交わされましたが…シドに代わる

後継者が生まれ、その論争も不毛のものとなってしまうたのです。

オリバー・バレンツ・ファウンディア。

…彼の実弟です」

「……」

「結果として、シドは…継承権を認められないままに、名前だけを

かろうじて与えられ：城を追い出されました。
しかし、今になって：オリバーが：」

「さっきの危篤の話ですね？」

「ええ。2ヶ月前：国王が急逝した後すぐに倒れ、それから一度も目を覚ますことが無く：いまだ昏睡状態が続いているのです。我々も、あらゆる手を尽くしましたが：回復の兆しは見えません」

「：他に継承権のある人は？」

テルルの問いに、イレーナは目を伏せ、首を横に振る。

「亡き国王が明言した限りでも、法的に見ても：継承者に当たる者はいないのです。国王の唯一の肉親だった私の父も早世してしまっていますし、『FUNDIA』では男子にしか継承権が認められていない。私自身も、国のため長年努力して参りましたが：情けなくも一向に子が宿る気配が無い。現時点で、残るはシド：いえ、アルヴァただ一人なのです」

「：追い出しておいて、随分勝手な話だ。背に腹は代えられないとでも言いたげだな」

イレーナの弁に、クロムが相変わらずのトーンで投げ掛ける。イレーナはその言葉に目を見開き：頬を紅潮させ、視界を歪ませた。

「：勝手なのは：理解っていますっ：でも、今の我が国には彼が必

要なのです。このままでは、
「FUNDIA」王家の
血は途絶えてしまう…もう、
彼にしか国を救えないのです…!!」

4日目…シド(2)(後書き)

次回更新予定日…2010/1/1
2010/12/26 一部改変

◆登場人物設定◆（前書き）

※物語の進行に伴って随時更新予定。更新に合わせてページ位置を変更します。

※物語の核心部に触れる事項が記載されていますので、出来れば『4日目…シド（2）』まで目を通されてからご覧下さい。

◆登場人物設定◆

■物語の中心となるパーティメンバー■

ネオン・エドラー

年齢…16歳

職業…剣士

外見…髪色緑、瞳色緑、身長170?くらい

一人称…おれ

出生地…アトミア(ATOMIA)国ローレン村

得物…ミドルソード

備考…大喰らい

テルル・アンドレイ

年齢…15歳

職業…魔法士

外見…髪色金茶、瞳色蒼、身長160?強

一人称…あたし

出生地…アトミア国ローレン村

得物…魔法杖

備考…パーティの財布・家事担当

リン・ライム

年齢…16歳

職業…軽業士

外見…髪色紫、瞳色紫、身長150?弱

一人称…私

出生地…アトミア国テルビ町

得物…棒（戦闘用スティック）
縄^{ボラ}

備考…飲酒好き

クロム・シャーレット

年齢…18歳

職業…剣士

外見…髪色暗赤、瞳色灰、身長180?強

一人称…俺

出生地…アトミア国セーリ村

得物…ロングブレード ナイフ

備考…元人斬り

■ゲスト■

シド・レーン（本名…アルヴァ・バレンツ・ファウンディア）

年齢…18歳

職業…魔法剣士（仮）

外見…髪色白、瞳色白がかった緑、身長175?くらい

一人称…俺

出生地…ファウンディア国都バレンツ

得物…ショートソード

備考…ファウンディア国王嫡子

イレーナ・ランベルク

年齢…23歳

職業…貴族（ファウンディア東方領主フレイマー公御令室）

外見…髪色赤褐色、瞳色翡翠、身長165?くらい

一人称…私^{わたくし}

出生地…ファウンディア国ランベルク市

得物…シドの従姉・ランベルク城主（事実上）

4日目…シド(3)

「――どうぞ。あっ…あんまりお口に合わないかもしれませんが…」

階下の食堂を借りて用意してきたホットコーヒーを、テルルはイレナ一行へ差し出した。

「いいえ、頂くわ。…ありがとう」

慌てた風に取り繕うテルルに、イレナは微笑ましそうに軽く首を傾げた。

ひとまず会話がひと段落し…イレナもここへ来て間際、加えて当事者であるシドも席を外してしまった
ということ、一同は進みかけていた話を一旦止め、一呼吸入れることにした。

ネオンは改めて、イレナをまじまじと見る。

「…本当に、シドのお姉さんなんだな」

「姉ではなくて、従姉よ。…でも私にとっては、弟同然の者です」

ネオンに笑いかけたイレナは、言いながら手元へ視線を落とす。

「……あの子は、私のことは何か言っていなかったかしら？」

「ん…、ガキの頃に、親きょうだいと生き別れたって。…それく

らいかな」

「あまり多くは話さないわよね。…何て言うか、全体的に謎が多い人？ まあ、まだ会って間もないんだけどさ」

「そう…」

「でも、話を聞いてみれば、詳しく話せないのも当然っちゃ当然よね。まさか…ねえ…」

ネオンとリンの言葉を聞き、イレーナは静かに頷いた。

「私達のことを口にする事で…辛いことばかり思い出されるのでしよう。慣習に従うことなく、こうして生きてはいますが…だからこそ、その風当りは生きながらに死を味わうほどのものでしたでしょうし」

「…そんなに酷いものだったんですか？」

「ええ。…シドは…アルヴァは、『FUNDIA』王家に生まれ
てより城を出ることになるまで、一族中から虐げられて
生きてきました。…いえ、あの城には、『生』としての居場所は無
かった…」

「……」

「それなのに…そんな彼に、私は次期王としての素養を身に着けさせようとしていました」

「えっ」

神妙な表情で語り続けるイレーナの突如としての話の展開に、ネオンとリンは揃って顔を上げる。

「：最初は、父である先代フレイマー公の導きに従って、アルヴァに接し続けていました。ですが：次第に私自身が、アルヴァに思いを抱くようになったのです」

「思い？」

投げ掛けたネオンの問いに、イレーナは顔を上げる。うっすらと、遠くを見るような視線で――

「私が一方的に、あの子へ自分の思いを託したのです」

――18年前――

第49代「F O U N D I A」国王が即位して、20年が経過しようとしていた。早世した前王に代わって若くして即位したガルシアは、既に国王として成熟し、代々の王が築き上げてきた国力を余す処なく継承すると共に、その長けた知略と手腕で更にその影響力を拡大させようとしていた。統率者、政治家としては、かなりカリスマ的な才能を持つ人物だったのだろう。

しかしそんな彼も、全てにおいて完璧ではなかった。最大の手落ちは、妻である王妃との間に長年子が宿らなかった

ことである。「FOUNDIA」国王は完全なる世襲制。ガルシア王は日増しに苛立ちを募らせ、王妃は焦り、悩む日々を費やした。医師や祈祷師、占い師らによる、ありとあらゆる計らいがなされた。

そんな二人の間に第一子が誕生したのは、婚儀から10年後のことであった。待望の男児だ。

ようやく生まれた世継ぎに、長く待ち焦がれていた城中の者が一斉に湧いたが…その歓喜も束の間に過ぎ去った。

——アルビノ——

その幼い男児の容姿に、その場に居合わせた全員が震えあがった。取り上げた助産師は一寸後置いて卒倒し、周囲に控える誰一人として、男児に近寄り、手を差し伸べる者はいなかった。

世継ぎ出生の一報を耳にし、事の次第を聞かされたガルシア王は、瞬時顔面を蒼白させ——こう言い放った。

「…“それ”を認めることは叶わん。一切口外するな」

男児を目にした者全てに箝口結舌を命じ、それ以外の城内、城外の国民に対しては『死産』であったこととして伝令させた。男児の存在はごく一部の者にしか明らかにされず、完全に隠蔽された。

その後すぐに、男児の処遇が話し合われた。そして…王より直接事

の次第を聞かされた実弟・フレイマー公の説得により、ひとまず名前が与えられ、生かされることとなり：しかしそれ以上の温情は認められず、城内の外れにある書物庫に幽閉することが決議された。元々その周囲に要人が足を延ばすことはほとんど無かったが、決議後には最低限の養育を任された乳母、侍女を除いて誰一人として近寄らなくなっていた。

男児には、アルヴァと名付けられた。

しかし、それだけで：王直系の継承者であることを示す『ファウンディア』姓も、一族の一員であることを表す『バレンツ』姓も与えられなかった。

本来、国王の嫡子である男児に半ば自動的に認められる継承権も、もちろん与えられないまま――アルヴァは立场上何の意味もなさずに生き続けることとなる。

やがて、まだ乳離れするかしないかの頃合いで、乳母の手からも離されたアルヴァは、毎日を孤独に過ごすばかりになった。日に二度、食事のためだけに重い書物庫の扉が開かれるが、給仕係は扉のすぐ近くに盆を置くだけで、奥に居るアルヴァに近付くことは決して無い。

肉親である国王や王妃も、アルヴァのもとへ向かうことは無かった。国王は、実の息子であるアルヴァとは、彼が生まれてから一度たりとも体面していなかった。国王の胸中に情は無く、息子の存在を心の底から疎んだ。生かされ続けている現状で、いまだその行く末を悩みの種とし、苛立ちを増幅させるだけの毎日を送っていた。王妃に至っては、息子を産み落としたその日から、忌ものを産んで

しまったことへの恐怖と深い自責の念に
さいなまれ、癩癩と鬱状態を繰り返しながら度々床に伏せるという
状況が続いており、とてもアルヴァと
接触できるような精神状態ではなかった。

城内の者はおろか、愛されるべき父母どちらからも歓迎されることが
無かったアルヴァに待っていたのは、
誰とも接触せず、ただ食べ、眠り、無気力に過ごす日々。刺激の無
い時間を経過する中、彼の視野、思考は、
急速に狭められていった。

そんな折――事実上隔離された書物庫へ、突然現れるようになった
一人の訪問者。フレイマー公の一人娘、
イレーナである。生まれて間もなくより、父母からも他親族からも
接されること無いまま長らく過ごしてきた
アルヴァにとって、しっかりと対面した最初にして唯一の肉親であ
った。

初めて顔を合わせたのは、アルヴァが幽閉されて直後のことで、そ
の時にはフレイマー公が連れ立って来て
いた。もちろん、生後間もないアルヴァには、記憶はもちろんのこ
と、視覚にさえもあやふやでしかなかった
が：公爵は何事かを娘に語りかけつつ、アルヴァの頭を優しく撫で
る。その腕の陰から、イレーナは目を丸くし、
頬を紅潮させながら幼い従弟を覗き込む。

職務が多忙である公爵が顔を見せたのは最初の一度きりであったが、
娘のイレーナは侍女らがアルヴァの

養育から手を引いた頃合いから度々、一人で書物庫へ足を運ぶようになった。最初の内は彼女自身も幼い故に、何の目的も無くただ様子を見に来るだけのようなものだったが、徐々に人形などを手に持って来たり、食事を運び入れるなどするようになっていった。

もちろん彼女の行動はかなり秘匿されたもので、国王や王妃、そのごく周囲のほとんどの者は把握していなかった。

フレイマー公が侍女や兵士などを内密に説き、イレーナがある程度自由に動き回れるようにさせていたようだ。

それは、床に寝転がるだけであつたアルヴァにとって無二の刺激であり、唯一知る外界であつた。

イレーナはある一つの信念を持って、アルヴァに接していた。

“この子は、次期『F O U N D I A』国王になる人間だ”

国王となる者ならば、今がどんな身であろうとも、なるに相応しい所作や知識を身につけていなくてはならない。

イレーナはアルヴァに、徐々に王族としての振る舞いや貴族の作法、マナーなどを教えていった。

長らく床で食べさせられていた中で突然、正式なテーブルと椅子を用意させ、一から食事のマナーを叩き込む。

ほとんど動き回ることが無かった彼に、歩き方から始まり声の張り方や表情に至るまで、ありとあらゆる

立ち居を覚えさせる。アルヴァが少しでもミスや取りこぼしをすれば、熱された蒸気が噴き上がるように叱りつける。

正直なところ、植物の様に生きてきたアルヴァにとっては目まぐるし過ぎて、疲労や不満がたまるだけであった。しかし、イレーナは事ある毎に彼に真摯な目を向ける。

「貴方は、この国の王となる人間なのです」

アルヴァは彼女の口からこの言葉を、テープが擦り切れるのではないかとというくらいに何度も聞かされた。

やがて、自分へ向けて目を輝かせ、自身のことのように将来に胸を躍らせながら語りかけるイレーナを見るうちに：

アルヴァ本人は彼女のような思いを抱くことは無かったが、幼いながらも何となく、この従姉の期待を裏切ってはいけないと思うようになっていった。

またイレーナは、アルヴァに本を読むことを教えた。丁度居る場所が書物庫であり、その糧に困ることは無い状況だった。アルヴァは作法をスパルタ教育で学びつつ、庫内に収められた何万という本を読み漁っていった。

これにより、アルヴァは急激にその知識を高め、様々な思考を巡らすようになっていく。

とりわけ地図の類や冒険家の小説やエッセイ、紀行文などは、産まれてから城内——それも奥まった書物庫から

出たことが無い彼に、扉の向こうに開けた世界を如実に知らしめた。外への思いを膨らませるようになったのは、かくして自然の摂理であった。

——そんな風に、秘密裏に交流を続けていた二人に、ある日転機が訪れる。

アルヴァの生誕、幽閉から9年後。

王妃が第二子となる男児を出産したのだ。

現国王直系の男児——いわゆる、正当な継承者の誕生である。

第二王子：表向きには第一王子には、オリバーという名が付けられ、盛大なる生誕の祝儀が行われた。

「FOUNDIA」国民も歓喜に湧き上がり、長年の宿願と国の将来の安泰を慶んだ。

：しかしそれは、アルヴァの生きる意味が完全に失われる出来事でもあった。

ガルシア王は、待望の世継ぎをそれは大事に胸抱きながら、侍従に言いつける。

「城内の凶を、処分しておけ」

不幸中の幸いか、その侍従がフレイマー公の息の掛かった者であったことで、その知らせがいち早くイレーナ、

そして彼女を通して公爵へ伝わった。公爵はすぐさま策を講じ、アルヴァを生きたままに城外へ抜け出せる

ように配下の者を仕向ける。

彼らの尽力があり、アルヴァは処分を受ける前に無事城から逃げ伸びることができたが：一連の騒動で、彼は

かろうじてあった居場所さえも失ってしまう。

イレーナは父へ、公爵家の城へ住まわせることを提案したが、普段より「FOUNDIA」王家と交流があることから、

城内にはガルシア王を懇意としている者も多く、このまま長きに渡

ってアルヴァを匿い続けることは非常に難しいと思われた。

アルヴァはあくまでもひとまずの処置として、フレイマー公領の最端に位置する小さな村の、領主直属の孤児院へと預けられることになった。

公爵によってもたらされた処遇に、一人城から追い出され、行く当ても術も無かったアルヴァにとっては

それ以外に選択の余地が無く、彼は二つ返事で受諾する。

こうして――イレーナによるアルヴァの帝王教育は、その目的を果たすこと無いままに幕引きとなった。

別れ際、イレーナはアルヴァに真っ直ぐ向かう。

その涼やかで大きな瞳にうつすらと涙を溜め、拳でフレイアドレスを強く握る。下ろしたての薄黄色の生地に、深い皺が刻まれる。

「――どんな身になろうとも、貴方はこの国の王となる人間です。そのことを、片時も忘れること無き様に」

イレーナはその時点で、この先も定期的にアルヴァの預けられた孤児院へ出向き、様子を逐一確認しようと思っていた。しかしその後：フレイマー公は病に伏せるようになり、

イレーナは婚期に差し掛かった身にもかかわらず、領内の政務に日々追われることになる。

彼女の決意は急激に流れ行く毎日に押し流され、結局別れてから二年、アルヴァと顔を合わせる機会が無いままに過ぎ去ってしまっていた。

そして――ようやく暇を取りつけたイレーナは、急ぎ孤児院へと馬を走らせる。しかし、そこにアルヴァの姿は無かった。

アルヴァは、書物庫という檻の中で毎日飽きることも無く読みふけた、本の通りに広がる外界に胸躍らせ、更なる自由を求めて一人、旅に出てしまっていたのだ。

イレーナはひとしきり語り終えると、部屋の面々を仰ぐ。

全員が一樣に押し黙り、イレーナへ驚愕の一言では言い表せないような表情を浮かべていた。彼女の護衛の者達もここまで詳しくは把握していなかったのか、暑くもないだろうに一筋の汗をこめかみから流しつつ、主を凝視していた。

イレーナは表情を変えずに、なおも自分の思いを語り続ける。

「私は、心からアルヴァに『F O U N D I A』の国王になって欲しいと願っていました。その思いは、今でも変わりません。ですが…その思いが、あの子にとっては重荷だったとしたら…」

「…どういうことですか？」

「古い法律を変え、時代に合った政治を整え、より進歩的な国にする。それが私の父の往年の願いでした。

私はそんな父の考えに感銘し、常に父を倣い、行動するように心掛

けていました。

ですが：アルヴァが孤児院を出たと知った時、私は父や自分が、大きな過ちを犯していたのではないかと
思い始めたのです」

「過ち？」

「父はアルヴァの身を案じてではなく、自身の政治思想にアルヴァを利用したかっただけだったのでは：と。

アルヴァを国王に立て、統率する者自らが古の災厄を象徴することで、国民の思考を変えるきっかけにしたいと
考えていたのではないかと：」

「！！ それは無いんじゃないか：」

「そうよっ：考え過ぎですよ」

テルルとリンが慌てた風に助言を入れようとするが、イレーナは首を横に振った。

「今はもう父も亡くなり、その答えを得ることは出来なくなりました。しかしその父の思いが、今の私に宿っているのです。

私自身：今の「FUNDIA」の現状に不満があることは確かです。何とかして、国を変えたかった。しかし、自分では
変えることが出来ないから：アルヴァに委ねたのです。王家から疎外されたあの子なら、変えるきっかけを作る
ことが出来るのではないかと思っています。：これは私の身勝手な謀であり、エゴです」

「……」

「結果として、アルヴァは王族を捨て、自由の道を選びました。アルビノとして生きようとも、それを打開

しようとも…王家はあの子にとって、自分を縛りつける鎖でしかないのです。

それなのに…今また、私はあの子に鎖を巻きつけようとしている。

もう、あの子にすぎるしかない…悩みに

悩んだ末に、王家の呪縛へと呼び戻そうとしているのです。…非道い姉ですね」

イレーナは目を伏せ、自嘲するように、薄く口角を上げた。

4日目…シド(3)(後書き)

次回更新予定日…2011/2/1

またしても文章ばかりで申し訳ありません…

★登場人物設定を同時更新しました

4日目…シド(4)

「――シド…？」

宿の表へ出、ネオンはシドの姿を探し歩いていた。

早朝の宿前に続く街道は、昼間のような賑わいはまだ無く、出店もまだ揃っていないせいもあって遠くまでよく見渡せた。

見える景色に彼の姿が無いことを確認し、ネオンは何となく、宿の裏手にある川原へと足を向けた。

「！」

すると意外にもあっさりと、シドの白い髪を捉えることができた。シドは頭の後ろに手を組み、仰向けに寝転がっていた。ネオンは一息つく、後方からゆっくりと近寄り、彼の脇にあぐらをかく。空を眺めていたシドがやや驚いた風に顔を向けると、ニカツと笑ってみせた。

「…よく場所がわかったなあ」

「たまたま読みが当たっただけ。おれも何かあると、川原に行きたくなるからさ」

「…そうか」

そう返すと、シドはおもむろに起き上がり、ネオンと顔を並べる。やや下方へ視線をやったまま、小さく口を開いた。

「…すまない」

「何が？」

「嘘を…ついていたこと。色々…正直に話せなくて」

「そんなの気にしねえよ！ 誰だって隠し事はあるもんだろ？ おれにだってあるし」

「…ありがとう」

「さっき、シドの従姉^{ねえ}さんに色々聞いたからさ。…って、違うんだよなっ…『アルヴァ』…だったか」

ネオンはあわあわと言い直すが、シドはそんな彼の様子に口を緩めながら、首を横に振る。

「いいんだ、それで。もう長いこと『シド』の名で生活してきてるし…本名じゃ、さすがに危なっかしくて」

「そか…。自分で考えたのか？」

「いや、とあるところから拝借したんだ。さすがにもう、違和感はないけど…最初はぎこちなかったかなあ…」

気恥ずかしそうに振る舞いながらも、足許を見つめたまま呟くように言葉を重ねるシドを、ネオンは横目で見…
大きく息を吐き出しながら、上を見上げる。

「――でも、驚いたよなあ…シドが王子様だったなんて」

「確かに生まれはそうなるけど、認められてはいないんだ。まず、“生まれた”という記録が残されてないからね」

「…そうなのか…」

ネオンの言を、シドは苦笑いを浮かべながら流した。ネオンは先ほどのイレーナの話を思い出したのか、思い悩むような表情になる。

しかしてシドは、彼へ向けて明るく話を続けていた。

「望まれて生まれた訳じゃないから、当然だよな。俺自身も、認められようとも、自分で認めようとも思わないし」

「…そっか」

「多分最初から…そういう自覚は無いんだと思う。あの城の中で思い出せる景色は、書物庫だけだから。

母とは一度も顔を合わせたことがないし…父とは結局、会わないままになってしまったし」

「……」

シドはただとうとうと、自分の思いを重ねていった。

「亡くなったって聞いた時…悲しみも、喪失感も…怒りも、何も感じなかった。…薄情なのかな。でも…

思い出も何もないのに、何かを思うってことの方が難しいだろ？」

「うん…」

「もう：関わっていたくないんだ。城を出た時から：あの一族とは、縁が切れたと思ってる。その方が、お互いのためになるだろう：って、自分自身で理由付けして」

笑顔で話すものの、何となく内に空虚感があるような、そんな表情で話す彼に、ネオンは小さく相槌を返し続けた。

「：従妹^{あね}が近くに出向いてきていると気付いたのは、昨日の昼間だ。どうして国境を越えて、こんな場所にいるのか：考えるより先に足が動いていたんだ」

「……あつ。あの時か!？」

ネオンは不意に、昨日の昼間：あの酒場での出来事を思い出す。目を丸くして顔を向けてくる彼に、シドは明後日へ視線を投げながら、頭に手をやった。

「ああ。判った時に、記憶の奥底にしまっていたものが、一気に思い出されてきて：顔を会わせたくなくて、逃げてしまった」

「何で逃げたんだよ?？」

「：何でだろうな? 本当に久し振りだったし、ただただ驚いて：どう顔を合わせたらいいか、わからなくて。でも：単なる拒絶反応だったのかもしれない。何となく：『嫌な予感』がしたんだ」

「…嫌な予感？」

「目的が、俺目当てだとしたら…俺にとっては、そう嬉しいことじゃない。あの一族に関わる人間が訪ねてくる理由なんて、そう選択肢は無いからな」

「連れ戻されるって話か？」

ネオンの問いに、シドは首を横に振る。

「いや…あれには正直驚いたよ。まさか、今になって『必要とされる』ようなことになっていたなんて…」

「……」

溜息をつきながら、シドはうつむく。

「…普通の人間として、普通の家庭に生まれていたらなあって、何度も思ったよ。受け入れなきゃって、ずっと自分に言い聞かせながら一人で生きてきたけど…『家族』というのに、すごく懂れていたんだ」

「…家族…」

「だから、パーティに入れてもらいたいって思ったところもあってね」

「え」

急にパーティへ向けた話題を出され、呆けたように顔を上げるネオ

ンに、シドは再びどこことなく恥ずかしげにはにかんでみせた。

「君達を見てると…何だか一体感があるようで。見た感じ一人一人がすごく個性があって、自由で、バラバラに動いているようなんだけど、その裏でお互いの気持ちに通い合っていて、認め合っている。だからうまくこと噛み合ってるんだなって思ったんだ」

「…そうなのかな…よく考えたことねえけど…」

首を傾げて思案にふけるような素振りをするネオンに、シドは微笑に笑った。

「意識してやるようなものじゃないんだよ。始終そんな事を考えながら関わっていたら、疲れてしまうだろう？」

「う…そっか…」

「君達には、血の繋がりがなくても、家族のような…いや、それ以上の絆があるのかもしれないね。少なくとも、俺にはそう映って見えた」

「……」

「単純に、羨ましいと思った。だから…そんな様子を、近くで見えていたかったんだ。君達の近くに居たら、そういう繋がりを共有できるんじゃないかってね」

ネオンは、笑顔を見せながらも何となく寂しそうな表情を見せる彼

を、しばらく見つめ…ふと言葉を漏らす。

「…あの人のことは、家族だとは思ってないのか？」

「！……」

ネオンにそう問われ、シドはにわかに表情を変え…またうつむいた姿勢に戻る。

「…難しいね。確かに血の繋がりはあるけど…俺はこんな立場だし、あの人にも立場というか、それこそ生まれた時から背負っているものがあるし。俺がアルビノじゃなかったとしても、多くのものを共にしていくってことは出来ないと思うな」

「そうなのか？」

「ああ」

シドは軽く頷いて、続けた。

「『地位』があって、影響力のある者っていうのは、自由が利かないんだよ。思うままに人や物事を動かす力があるように見えて、そうしたいがために本音を隠したり、偽らなければならない時がある」

「……」

「…どうした？」

「うん…」

ネオンは黙って、話し続けるシドを見つめていたが…やがて思案にふけるような表情に変わり、視線を落とした。
シドが、そんな彼の様子に気付く。

「シドの従姉さん、シドを苦しめていたんじゃないかって、言ってた。シドを連れ戻そうとしてることも…
あの人がそういう立場なら、仕方ないことなのかな」

「?? どういうことだ?」

ネオンは、先ほどイレーナが漏らした思いを、彼なりにまとめてシドに話した。聞かされたシドは、
やや戸惑った風に、心持ち目を見開かせる。

「そんな、ことを…」

「…かなり気にしてる感じだった」

「……」

シドは一旦沈黙し…やがて小さく口を開く。

「…気にするようなことじゃないのにな。…従姉や叔父がどういう思いを持って接していたのかなんて、
生き残ることさえ難しかった俺にとっては、何の問題にならないよ」

ネオンの方を向いてはいなかったが…その横顔からは、柔らかな笑顔が窺えた。

「どうあっても、俺が今こうして生きて、ここに居ることができて
いるのは、あの人達のお陰に他ならない。
心から…本当に感謝しているんだ。『生きる』という自由をくれた
あの人達に」

「…繋がってるんじゃない？」

「…え？」

ネオンの突如としたコメントに、シドは虚を突かれたような表情で、
彼へ視線を送る。

「だって、シドは従姉さんからの恩を忘れないでいるし、従姉さん
もシドにしたことを今でも後悔してる。
二人共、お互いを思い合ってるじゃんか。ちょっと気持ちがズレて
るだけなんだと思うぜ」

「……」

「しっかり繋がりにあるじゃん！！」

ネオンはそう言い、心底嬉しそうな顔でシドの身体を叩いた。そんな彼の様子を見、シドはしばらく
呆けたようにネオンを見つめるだけだったが…不意に気配に気付き、
後ろへ振り返る。

そこには…いつの間にか、イレーナが静かに立っていた。

「……従姉上」

「聞かせてもらいました。貴方の思いを」

イレーナは前で合わせた手をぎゅっと握ったまま、シドを見つめ――
か細く言葉を刻む。

「私が貴方にしたことを、恨んではないの？」

「いいえ」

頑なな表情のままに問う彼女に、シドは受け流すように首を振った。

「貴女は、俺の髪を『綺麗だ』と言ってくれた。そんな奇特な人を、恨むはずが無いじゃないですか」

「…あれほど幼い頃のことを…よく覚えているのね」

「覚えていますよ。…あの一族で…いや、『FUNDIA』に居る人間で、そんな言葉を掛けてくれたのは、従姉上だけですから」

「……」

「…今、この名を使っているのも…貴女が存在があったからです
ら」

シドのその言葉に、イレーナは少し別の感情が混じったのか、表情がわずかに変わり、瞼が足許へと落ちる。

「『シド・レーン』…私が貴方によく読んで聞かせた、物語の主人公の名前…だったわね。…覚えているわ」

「はい」

シドはやはり、恥ずかしそうに彼女から一旦視線を外し…再び真っ直ぐに、イレーナを仰いだ。

「さっきも言いましたが…俺が貴女を忘れることは無い。…貴女は俺に、生きる上で欠かすことの出来ない

ことを下さった。立ち上がって歩くことも、言葉も、多くの知識も、貴女以外に教えてくれる人はいなかった」

うつむいたままの彼女に、シドは真摯に…それでいて穏やかな表情で、降り積もった自らの思いを投げ掛ける。

「その結果として、貴女の思いを裏切ったのは、俺の方です。貴女から学んだもので自由を選び、貴女の手を離れてしまった」

「それはっ…それは、私が国のために利用しようとしたから――」

「違います、俺は俺の意思であの国を出たんです。利用されたとは思ってない。ただ…従姉上の期待に

応えられなかったのは、申し訳なく思いますが…」

「いいえ…いいえっ…」

優しく声を掛けるシドだったが、イレーナはただただ肩を震わせながら、首を横に振るだけだった。

シドは、彼女の伏せた顔を窺うように、ゆっくりと近寄っていく。

残っている遠い日の記憶の彼女は、いつも大きく見上げる存在だった。凜として気品に溢れ、その瞳は自分よりずっと先を見据えていた。自分は諭され、手を引かれ…心身共についていくのがやっとだった。

いつの間に、そんな彼女の顔を、上から傾ぐように窺うことが出来るようになっていたのだろう。

「従姉上、どうか…自分を責めないで下さい」

シドは優しく、彼女の肩に手を触れる。

「俺は、あの日…貴女から逃げてしまった。そして昨日、貴女に氣付いた時も…面と向かうことを躊躇ってしまった。でも、今は…こうしてまた会えて、話す事が出来て良かったと思っています」

「私も…私だって、同じですっ…！ …あの別れた時から、一日も早く貴方の顔を見たかった…
アルヴァ、貴方が無事でいてくれて、本当に嬉しかった…っ…」

堪え切れなくなったのか、突如顔を上げ、声を張り上げながらイレナは彼へ訴える。
その彼女の顔を見…シドは嬉しそうに頬を紅潮させ、微笑んだ。

「…良かった。俺は、貴女のその思いだけで…充分です」

シドのその言葉に、イレナの壊れそうな表情は止まり——瞬間後、その美しい翡翠色の瞳から止め処無く
零れ落ちる涙を受け留めるように、両手で顔を覆った。

4日目…シド(4)(後書き)

次回更新予定日…2011/3/1
更新時間が遅くなりました…

4日目：布石（1）

シドはその後、イレーナが落ち着くのを待って、改めて自分の胸中を彼女に伝えた。

「――わかりました。貴方の意思を尊重しましょう」

シドの真摯な言葉に、イレーナは黙って耳を傾け：そしてしっかりと頷いた。諦めたような、浮かない素振りではなく――どこか吹っ切れたような、潔い表情を見せながら。

「すみません、ここまでご足労頂いたところなのに：」

「貴方が気にすることではないのよ。それに：やはり間違っているわ。王家の側から手放した貴方を、こちらの都合で呼び戻すことは出来ません」

「シドが戻らなかったら、どうなるんだ？　大丈夫なのか？？」

そこで不意に横から挟まれたネオンのもつともな疑問に、投げ掛けられたイレーナは思案するように、眉を少し寄せた。

「：法に従うのなら、次期王であるオリバーの回復を待つしかありません。ですが：今のところその兆しは全く見えないままね」

「そんなに：悪いんですか」

「ええ。前王が崩御なさったのが、2か月前。それからすぐ後に、急に意識を失って…目を覚ますことも無く、寝たきりになっているわ。国のあらゆる医師や祈祷師達に診させ、あらゆる手を尽くしましたが…病名さえもわからない」

「魔術師には？」

シドの質問に、イレーナは首を横に振る。

「亡くなられた前王の意向で、魔術師は入城させないことになっているの。なんでも、長年召しかかえていた城内魔術師に、毒を盛られそうになったとかで…」

「しかし原因が分からないのであれば、術や呪いの類を疑うべきなのでは？」

「ええ。王太后様はそういうものに懐疑的で、毒物騒動後は毛嫌いするほどになられておいででしたから、何らかの病であると信じて疑わなかったけれど…診察に当たらせた医師の中に術学にも明るい者がいて、側近へ内々に、呪術の可能性が高いと告げたそうよ」

「じゃあ、病気じゃないってことになるのか？ …どういう状態なんだ？」

ネオンの質問に、イレーナは深く考え込むように、頬に手を当てる。

「…詳しくは私にも判りません。感染するかもしれないと、親族は

直接の面会を制限されているのです。

ですから私のお話しできることは全て、側近や侍従からの聞き伝手でしかなく…あまり正確ではないの」

「それでも構いません。…何か…わかるかもしれない」

言い淀む彼女をシドが後押しし…イレーナは一つ頷いた。

「付いている者の伝えによれば…先ほど言った通り意識混濁と、慢性的な失血状態。それから、突然出来る内出血や打撲痕、骨折も何の前触れも無く起こるとか…」

「失血、骨折…？」

「ええ。治しても別部位に移るように、全身に次々と現れるそうよ。…実は、それは前王も同じで、症状が出てからいくら経たずに崩御なさってしまわれました。前王は随分歳をお召しでしたから、衰弱する御身にお心が持たなかったのでしょうか」

「……」

「判った当初は、接触した者に感染する病だと思われていましたが…その後他に前王や王子に接触した者には、同じ症状は現れず…やがて、何らかの遺伝的な要因があると結論されたのです。それで、私達親族は面会できずに――」

「どうした？ シド」

イレーナは懸命に、自分の知る限りの状況を言葉にしていたが、途中で発せられたネオンの声に気付いてはたと顔を上げる。いつの間にやら、聞かせていたと思っていたシドの視線が、自分から外れていた。

「……？ ……どうしたのです？」

「シド？ おい——」

彼女は首を傾げて顔を窺い見るが、シドは何も無い空間を凝視したまま動かない。目が大きく見張り、しかし焦点が見定まっていなくて、薄い瞳が小刻みにぶれ動く。イレーナとネオンが怪訝そうに見守る中……彼の中で思考が急激に走り巡っているのか、シドは目を見開いたまま、独り言のように呟く。

「……まさか……！……！！！」

——あなたの『呪い』は、対になっているの。あなたが受けた痛みを、分つ存在がいる——

「……」

しばらくの間、3人はそのまま固まり……ネオンがたまらず、もの言いたげにシドへ手を伸ばすと、不意に彼は硬直を解き、顔を上げた。思わずのけ反ったネオンと、物憂げに自分を静観していたイレーナを、真っ直ぐに仰ぐ。

「オリバーは、元に戻れると思います。：多分、俺次第です」

シドの言を聞き、とにかく他の面子へ報告をと、3人は急ぎ宿へ引き返した。

宿に戻り、部屋に近付いていくと、やがて聞き知った声色の高笑いがネオンの耳に届く。

目を丸くするネオンに、同じく笑い声の聞こえたシドが後ろから尋ねた。

「：何だか賑やかだね」

「――あ？ う、うん…」

事情を心得てないシドに、ネオンは表情を引きつらせながら曖昧に返答し、次いで、二人の間に視線を移す。

「？」

ネオンの目線を受け、イレーナはキョトンとした顔で、首を傾げた。

「――ああ、ちょっとお遅かったじゃーん!!」

ドアを開いた瞬間、中から場違いに陽気な声音が飛んできた。予測していたネオンが何とかそれを受け止め、

部屋内に目を向けると、顔を紅潮させ、すっかり出来上がったリンがこちらへ大きく手を振っていた。

リンはラグソファに優雅に寝そべり、ネオンの目の前で満面の笑みを浮かべつつ、グラスを景気良く傾ける。

その傍らの床には、イレーナ付きの護衛達が身を寄せ合いながら小さく腰を下ろしていた。

彼女は、宿部屋に待機していた彼らを相手に、酒が入っての世間話に興じていたのだった。

余程暇だったのだろうか。

「ネオン、この人達自分の領から外に出たこと無かったんですって！！
　　っか旅出るのに地図も羅針盤も
　　持ってて、それで国境見つけるのに森の中彷徨ったって、どんだけ方向音痴なのかしらねえ？」

「…楽しそうだな、リン…」

カラカラと笑い飛ばしながら、隣に座る鎧の護衛男をバシバシ叩くリンに、ネオンはやはり顔を突っ張らせ、曖昧な笑顔を返す。

ネオンがテルルを見ると、彼女は神妙な面持ちで黙って首を横に振り、何らかの努力はしたが無駄であったことを物語っていた。

椅子に腰かけていたクロムはどうに場所を移し、奥のベッドで仮眠をとっているようだ。

そして、当の被害者である護衛達は…すっかりリンの酔いどれモードに吞まれてしまったらしく、屈強なる

身体を縮こまらせて、彼女のペースに従わされていた。大口聞かれ

ようが手酷く突っ込まれようが、何も出来ずにただ冷や汗をかきながら頷き返す。

しかし酒だけは付き合うことを頑なに拒んだらしく、小さなグラスが口のつかないまま、彼らの前に並ぶ。

ネオンは何となく、護衛男達に同情した。

「…まあ。貴方がた、これほど短い時間に随分打ち解けたようね…」

ネオンの後ろから続いて部屋に入ってきたイレーナは、その光景を目にし、のん気に微笑む。

彼女の姿を捉えると、護衛達は崩していた体勢をすぐさま戻して畏まる。主を見上げるその目は、気のせいかな潤んでいるように思えた。

ネオンは彼らへ内で拝みつつ、リンの間に割って入る。

「…リン、話があるんだ。この辺でお開きにしてくれない？」

「なによ、終わり？ …あふふ」

「ほら…、寝てないんだからそろそろ寝よう？」

会話が中断したところで、リンが一つ大あくびをし、見かねたテルルが彼女をベッドに連れていく。

「あ、ついでにクロム起こしてくれよ」

「うん…、あ」

ネオンの言葉に、テルルが奥のベッドへ向かおうとすると、クロム

が自ら身を起こし、立ち上がって身体を伸ばし始める。

「…起きてたんだ」

「…寝れるか」

ネオンが声を掛けると、クロムは首を鳴らしながら、無然とした表情を向けた。

揃った一同はシドを中心とし、彼は昨夜ネオンに話聞かせた自分の現状を、ゆっくりと打ち明け始めた。

魔術師に呪術を掛けられたこと、それによる体の変調、そして呪いを解くためにほぼ毎夜、魔術師との

接触を試みていること。

クロムはある程度読んでいたのか表情を変えることは無く、黙って話を聞き流していたが、テルルは彼の

急な告白に驚愕し、言葉を見つけ出せないままに、ただ視線だけをシドへ返す。

そしてイレーナも…初めて聞いた彼の内情に、心底驚いた様子を見せた。

「……それは…いつからなの…!？」

「およそ2か月前です」

淡々と語るシドの言葉に、イレーナは一瞬固まった後…疑心の込められた視線を彼へ投げた。

「前王が無くなられた時期と、重なるわ」

「ええ。恐らく俺の術が掛かったことと、繋がりがあると思います。
…2か月前のあの時…術を掛けられたのは通りすがった際の偶然だと、そう今までは考えていたんですが…
…思い違いだった」

「どういうことなの？」

イレーナに促され、シドは確信を持った表情で、ゆっくりと頷いた。

「掛けられた術は、“対”になっているそうなんです。怪我を負ってもすぐ塞がり、痛みだけが残る

俺の症状と、オリバーの要因の無い失血状態や内出血、突然の骨折…相反するようで、噛み合っていると
思いませんか？」

彼の言葉を、イレーナは頭の中で反芻する。

「…そう…そうね…、まるで正反対だわ」

「恐らく、俺が掛かったことで、同時に王にも術が及んだのではないかと。そして、その王が亡くなり…」

「今貴方と“対”になっている相手が、オリバーということになるのね？」

「そう…思います。対になる存在がいなくなったから、代わりの人間に術が移っていった。

感染なんかじゃない、これは『転移』の特性を併せ持った術です」

「そんな…恐ろしい術が…」

イレーナの顔からはすっかり血の気が引き、怯えたような瞳を床へと漂わせる。

「あくまでも過程の話です…しかし仮にそう考えるとすると、王家の血筋を狙っているように思えます。

そしてその魔術師は、俺の出自も知っている者なのではないかと…」

「そうね…十分あり得ることだわ…」

シドは下方へ落とすイレーナの視線に入り、真剣な表情を当てる。

「従姉上、何かお心当たりはありませんか？ 王家に近しい魔術師の存在が、今までに無かったか」

「……」

青ざめたイレーナは、向けられた彼の顔を受け止めたまま、暫時口を閉ざしていたが…ふと瞳に力が戻ったように、シドと焦点を合わせた。

「…いるわ…一人」

「!!」

「前王が魔術師を嫌い、城内から放逐させたきつかけとなった者が…」

彼女の言葉に、シドも何かに気付いたように、表情を変える。

「さきほど仰った、王に毒を盛ったという魔術師のことですか？」

「ええ。その術師は、前王の先代である第48代国王の時代から召し抱えられていたそうで、代々『FUNDIA』王家に側近や参謀として仕えてきた家柄の出なのよ」

「それが、その騒動で…」

言いかけたシドだったが、イレーナは首を横に振った。

「ですが…そのこと自体は、今でも事実関係が曖昧のままなのです。本当に毒物が見つかったのか、見つかったいたとしても、その出所は本当に魔術師本人であったのかも…その者が城を去る最後まで、はつきりしないままでした」

「…そうだったんですか…」

「…疑いが掛けられてから、魔術師が去るまでは、いくらも間が無かったように思います。意見を言う暇も与えられずに…半ば前王の一存だけで処分されてしまった」

「……恨み…か…」

シドは考えを巡らすように、空を睨む。イレーナはそんな彼を見…

臉を哀しげに落とした。

「…どのような形にしても、きっと王家にいい感情は向けていないわ」

「そうでしょうね…古くより築き上げて来た王家との主従関係が崩れてしまったんですから、家にとっても大きな打撃でしょうし」

「退去処分を受けてから、行方が判らなくなっていたけれど…まさか国を離れて、いまだ王家に執着していたとは…」

「従姉上、その魔術師がこの呪術に関わっているとしたら、『F O U N D I A』王家全体が危ういです。

…考えたくはありませんが、術に無限の転移特性があるとしたら――」

「――…」

「…なんだか、急ぐ必要がありそう？」

二人の応酬を見守っていたネオンが、独り言のように人知れず言葉を漏らした。

その呟きを確かに耳にし、隣のテルルが頷きながら答える。

「そうだね。でも、糸口がほとんど無さそう…王家に仕えていたほどの魔術師なら、かなりの遣い手だと思うし、シドが2カ月粘っても遭遇さえ出来ないのは、何となく納得がいくな」

「…そこなんだよなー…」

テルルの考察に、完全に踊らされるという経験を積んだネオンが、がつくりとうなだれた。

落ち込むネオンの横から、何となく煮詰まった様子のシドとイレーナに、テルルが声を掛ける。

「――でも、呪術の特性が“対”だって、よくわかったね。術の特性なんて、大体は掛けた本人に聞くとか、元になった本とか読まないと判らないのに」

「？ 掛けられたらしい時期が被ってたからじゃねえか？」

「いや、そうじゃないんだ」

テルルの言にネオンがそう返すと、シドは首を振った。

「実は昨夜…ネオンが気を失っている間のことなんだけど、この件に関して助言してくれた人がいたんだ」

「…！ あの場に、おれ達の他に誰かいたのか！？」

「ああ。明言はしてなかったけど…多分魔法士だ。女性の」

「……っ…！」

シドは至って普通に、笑顔で話し聞かせるが…ネオンは瞬時その表情を止め、閉口する。

そのまま二の句が次げなくなった彼に代わり、テルルがシドへ迫る。

「…っ、その人って…どんな人だった？」

「え？ …そうだな、丁度テルルくらいの長さの黒髪で…周りが暗くてはつきりは見えなかったけど、濃い青の瞳をしていたかな」

「……」

そのシドの言葉を受けて…テルルは確信し、クロムを仰ぐ。
その傍らで、加えてシドが思い出すように首を捻る。

「…そう言えば、なんだかネオンを知っているようだった。知り合
い…か？」

シドはネオンを覗うが、彼はうつむいて、床を凝視したまま動かない。

テルルの思い詰めたような表情を受けたクロムも、何か思案にふけるように、黙ったまま虚空を見続けた。

「…ネオン…？」

固まったままのネオンに、シドが怪訝そうに声を掛ける。耳元で響いたその声に、ネオンは弾かれたように顔を上げる。突然の挙動に驚いたのか少し身を引いたシドの手を取って、力強く握り…ネオンは真っ直ぐな眼差しを彼へ向けた。

「…シド、やっぱりおれ、お前に協力する。このままパーティに残れ」

「えっ…」

突然のネオンの言葉に面食らったシドだったが、ネオンは彼に確かに意志のこもった笑顔を見せると、次いで後方へと振り返った。

「いいよな？ クロム」

ネオンにそう言い投げられ…クロムは無表情に彼へと注いでいた目を閉じながら、ゆっくりと長い息をついた。

「…即片付けるぞ」

4日目：布石（1）（後書き）

次回更新予定日：2011/4/1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8466h/>

PLOT OF WIZARD

2011年3月1日07時59分発行